

印旛の原始・古代

— 縄文時代編 —



2007

財団法人 印旛郡市文化財センター

印旛の原始・古代

— 縄文時代編 —



2007

財団法人

印旛郡市文化財センター

ごあいさつ

昭和59年10月1日、印旛郡内における埋蔵文化財の調査・研究、ならびに地域住民の文化財保護思想の涵養と普及を目的として、財団法人印旛郡市文化財センターが設立されました。

平成16年に設立20周年という節目を迎えたことを機に、これまでの印旛郡内での調査・研究の成果を広く一般の方々に還元することを目的として、各時代別に6分冊の計画で、『印旛の原始・古代』を刊行する運びとなりました。

このたび、第2分冊の縄文時代編を刊行しました。印旛郡内の縄文時代の遺跡は千を超す膨大な数にのぼり、遺跡の内容、出土遺物ともに多種多様であります。そのため、第1分冊の旧石器時代編の刊行から3年という年月が経ってしまいました。その間、平成18年3月には印旛郡に隣接する香取郡の大栄町と下総町が成田市と合併し、印旛郡の市域が広がりました。このことは、より多くの縄文遺跡を皆様にご紹介する契機ともなりました。

本書では、限られた紙数で市域に存在する膨大な縄文遺跡について網羅的に紹介することは困難なため、代表的な遺跡を取り上げることとしました。印旛郡という限られた地域にあって、遺跡の内容は実に多様であります。そこから出土した遺物とあわせ、皆様の目を楽しませてくれることと思います。

本書が郷土史を理解する上でお役に立つことを祈念するとともに、文化財保護思想の涵養に寄与することを切に願う次第であります。

最後に、本書の刊行に至るまで御教示、御協力を賜りました関係各位に心よりお礼を申し上げます。

平成19年3月

財団法人 印旛郡市文化財センター
理事長 高 宮 良 一

『印旛の原始・古代—縄文時代編—』 目次

ごあいさつ

目次・例言

はじめに	8
I. 草創期	11
II. 早期	14
1. 鹿渡遺跡（四街道市）	20
2. 間野台貝塚（佐倉市）	21
3. 椎ノ木遺跡（成田市）	23
4. 城山ノ作遺跡・城次郎丸遺跡（佐倉市）	24
III. 前期	25
5. 和良比遺跡（四街道市）	29
6. 木戸先遺跡（四街道市）	31
7. 長田和田遺跡（成田市）	34
8. 子ノ神遺跡（成田市）	35
9. 南羽鳥中岫第1遺跡E地点（成田市）	36
IV. 中期	40
10. 南作遺跡（四街道市）	46
11. 神門房下遺跡（佐倉市）	51
12. 麻生広ノ台遺跡（栄町）	52
13. 墨新山遺跡・墨木戸遺跡（酒々井町）	54
14. 生谷松山遺跡（佐倉市）	56
15. 吉見稲荷山遺跡（佐倉市）	59
16. 長田雉子ヶ原遺跡（成田市）	62
17. 稲荷山遺跡・久井崎II遺跡（成田市）	65
18. 新山台遺跡（成田市）	67
V. 後・晩期	68
19. 西根遺跡（印西市）	71
20. 遠部台遺跡・曲輪ノ内貝塚（佐倉市）	73
21. 井野長割遺跡（佐倉市）	74
22. 吉見台遺跡（佐倉市）	78
23. 宮内井戸作遺跡（佐倉市）	82
24. 千代田遺跡群（四街道市）	89
25. 内黒田遺跡群・御山遺跡（四街道市）	93
26. 荒海貝塚・荒海川表遺跡（成田市）	95

協力者・協力機関一覧

付録 印旛郡市縄文時代遺跡台帳
印旛郡市縄文時代遺跡分布図
挿図・写真図版出典一覧

例 言

-
- ・本書は、財団法人印旛郡市文化財センター設立20周年記念事業、普及図書『印旛の原始・古代』刊行の第2分冊「縄文時代編」である。
 - ・本書に掲載した図版の提供元及び出典については、付録に収録した。
 - ・本書の執筆はⅠ～Ⅳを係長小倉和重、Ⅴを嘱託調査研究員田中大介がおこない、編集は小倉・田中がおこなった。
 - ・本書に用いた遺構・遺物の名称は、原則として報告書の用語を踏襲しているが、同類の遺物で異なる名称のものについては、一般的に使われている用語に統一した。
 - ・本書の作成にあたっては、巻末に掲載した協力者・協力機関のほか、センター職員の協力を得た。
-

『印旛の原始・古代—縄文時代編—』 図版目次

1. 関東地方を中心とする縄文土器編年	8
2. 有舌尖頭器とさまざまな石器（成田市成井遺跡）	11
3. 柳葉形尖頭器（佐倉市川崎遺跡）	11
4. 隆線文土器（印旛村瀬戸遠蓮遺跡）	12
5. 隆線文土器（印西市地岡穴台遺跡）	12
6. 爪形文土器（印西市榎峠遺跡）	12
7. 押圧縄文土器（佐倉市岩富漆谷津遺跡）	12
8. 押圧縄文・絡条体圧痕文土器（成田市取香和田戸遺跡）	13
9. 夏島式土器（佐倉市大林遺跡）	14
10. 撫糸文期の住居跡（成田市取香和田戸遺跡・ 成田市東峰御幸畑西遺跡・木の根拓美遺跡）	14
11. 撫糸文系土器の刺突文タイプ（佐倉市生谷境堀遺跡）	15
12. 撫糸文系土器の絡条体圧痕文タイプ（富里市金堀遺跡）	15
13. 撫糸文系土器様式末期の多様な文様（成田市木の根拓美遺跡）	16
14. 押型文土器（成田市西向野Ⅰ遺跡）	17
15. 土偶（成田市木の根拓美遺跡）	17
16. 土製品（酒々井町猿楽場遺跡）	17
17. 三戸式土器（成田市庚塚遺跡）	17
18. 田戸下層式土器（成田市稲荷峯遺跡）	17
19. 田戸上層式土器（成田市木の根拓美遺跡）	17
20. 土偶（成田市庚塚遺跡）	18
21. 炉穴に堆積した貝（佐倉市白井屋敷跡遺跡）	18
22. 条痕文期末葉の住居跡（佐倉市飯重新畑遺跡）	18
23. 田戸下層式期（上）と茅山式期（下）の住居跡 （成田市成田ニュータウンLoc.6・Loc.4遺跡）	18
24. 野島式土器（本埜村瀧水寺裏遺跡）	19
25. 線刻が施された条痕文系土器（印旛村駒込遺跡）	19
26. 茅山上層式土器（佐倉市太田長作遺跡）	19
27. 鶴ヶ島台式土器（佐倉市鷺尾余遺跡）	19
28. 撫糸文期の住居跡（四街道市鹿渡遺跡）	20
29. 押型文土器（四街道市鹿渡遺跡）	20
30. 住居内に堆積した貝（佐倉市間野台貝塚）	21
31. 条痕文期の住居跡（佐倉市間野台貝塚）	22
32. 鶴ヶ島台式土器（佐倉市間野台貝塚）	22
33. 前期の住居跡（上）と出土土器（下）（佐倉市間野台貝塚）	22
34. 前期の土偶（佐倉市間野台貝塚）	22
35. 糸巻き形石器（佐倉市間野台貝塚）	22
36. 子母口式期の住居跡（成田市椎ノ木遺跡）	23
37. 住居跡出土の田戸下層式土器（成田市椎ノ木遺跡）	23
38. 大型住居跡の平面図（佐倉市城山ノ作遺跡）	24
39. 大型住居跡（佐倉市城山ノ作遺跡）	24
40. 中期前葉と考えられる住居跡（佐倉市城次郎丸遺跡）	24
41. 前期中葉の住居跡（印西市泉北側第2遺跡・ 成田市幡谷萱橋遺跡）	25
42. 前期前葉から中葉の住居跡（印西市泉北側第2遺跡・ 佐倉市鐺木諏訪尾余遺跡）	25
43. 前期初頭の住居跡（四街道市中山遺跡）	26
44. 石鏃製作跡（印西市一本桜南遺跡）	26
45. 前期初頭の集石土坑（成田市東峰御幸畑西遺跡）	26
46. 石鏃の未製品（佐倉市向原遺跡）	26
47. 興津式期の住居跡（白井市一本桜遺跡）	27
48. 興津式期の住居跡（印西市船尾白幡遺跡）	27
49. 他地域の土器（四街道市木戸先遺跡・ 佐倉市先崎西原遺跡・富里市日吉倉遺跡）	27
50. 興津式土器（本埜村五斗蒔遺跡）	28
51. 前期末葉の土器（白井市河原子台遺跡）	28
52. 円形の珧状耳飾（印西市木蒨峠遺跡・成田市木の根拓美遺跡）	28
53. 縦長の珧状耳飾（成田市吉倉白ヶ峰遺跡・酒々井町墨新山遺跡）	28
54. 有孔磨製石斧（白井市一本桜遺跡）	28
55. 前期の土偶（白井市一本桜遺跡）	28
56. 有孔板状土製品（佐倉市先崎西原遺跡）	28
57. 和良比遺跡前期後半の住居と出土遺物	29
58. 前期後半の住居跡（四街道市和良比遺跡）	30
59. 土製珧状耳飾（四街道市和良比遺跡）	30
60. 獣面把手（諸磯b式土器 四街道市木戸先遺跡）	31
61. 遺跡全体図と土坑墓群の拡大（四街道市木戸先遺跡）	32
62. 墓坑からの副葬品出土状況（土器）（四街道市木戸先遺跡）	33
63. 墓坑出土の副葬品（土器）（四街道市木戸先遺跡）	33
64. 墓坑出土の石製品（垂飾・玉類）（四街道市木戸先遺跡）	33
65. 墓坑出土の石製品（石匙）（四街道市木戸先遺跡）	33
66. 関山式期の住居跡（成田市長田和田遺跡）	34
67. 黒浜式期の住居跡（成田市長田和田遺跡）	34
68. 極小石匙（成田市長田和田遺跡）	34
69. 大型住居跡（5号住）と出土土器（成田市子ノ神遺跡）	35
70. 蛇紋岩製の玉（成田市子ノ神遺跡）	35
71. 大型住居跡の土器片埋設炉（成田市子ノ神遺跡）	35
72. 遺跡全景（成田市南羽鳥中岫第1遺跡E地点）	36
73. 赤彩浅鉢の出土状況（成田市南羽鳥中岫第1遺跡E地点）	36
74. 石製垂飾の出土状況（成田市南羽鳥中岫第1遺跡E地点）	36
75. 墓穴出土の人頭形土製品（成田市南羽鳥中岫第1遺跡E地点）	37
76. 墓穴に納められた土器（成田市南羽鳥中岫第1遺跡E地点）	37
77. 群集する墓穴群（成田市南羽鳥中岫第1遺跡E地点）	38
78. 土製珧状耳飾の出土状況①（成田市南羽鳥中岫第1遺跡E地点）	38
79. 土製珧状耳飾の出土状況②（成田市南羽鳥中岫第1遺跡E地点）	38
80. 遺構配置および土壇出土遺物（成田市南羽鳥中岫第1遺跡E地点）	38
81. 住居内に堆積した貝（成田市南羽鳥中岫第1遺跡E地点）	39
82. 重複しあう住居跡（成田市南羽鳥中岫第1遺跡E地点）	39
83. 他地域の土器（成田市南羽鳥中岫第1遺跡E地点）	39
84. 墓穴出土の石匙（成田市南羽鳥中岫第1遺跡E地点）	39
85. 五領ヶ台式直後段階の土器（酒々井町猿楽場遺跡）	40
86. 阿玉台Ⅰa式土器（佐倉市大林遺跡）	40
87. 五領ヶ台式土器（佐倉市栗野Ⅱ遺跡・成田市村田居山遺跡）	41
88. 阿玉台式期の住居跡（印西市船尾白幡遺跡）	41
89. 阿玉台式土器（四街道市堂ノ後遺跡）	41
90. 阿玉台式期の土坑出土遺物（成田市野毛平泉台遺跡）	41
91. 加曽利E式期前半期の拠点集落（佐倉市下勝田殿台東遺跡）	42
92. 土製耳飾（佐倉市下勝田殿台東遺跡）	42
93. 土製耳飾（佐倉市六崎外出遺跡）	42
94. 土器が埋め込まれた小竪穴①（佐倉市坂戸念仏塚西遺跡）	42
95. 土器が埋め込まれた小竪穴②（四街道市中山遺跡）	43
96. 異系統土器を埋め込んだ竪穴状遺構（印西市松崎Ⅵ遺跡）	43
97. 斜位土器埋設炉と炉体土器（佐倉市寺崎一本松遺跡）	44
98. 他地域の影響を受けた土器（佐倉市寺崎一本松遺跡）	44
99. 加曽利EⅢ式土器（佐倉市寺崎一本松遺跡）	44
100. 異系統の土器（佐倉市池向遺跡）	44
101. 鐔付注口土器（佐倉市江原台遺跡・佐倉市生谷境堀遺跡・ 佐倉市六崎貴舟台遺跡）	44
102. 貯蔵穴に投棄された貝（佐倉市宮内井戸作遺跡）	45
103. 加曽利EⅣ式土器（成田市キサキ遺跡）	45
104. 石棒（印西市内）	45
105. 三角溝形土製品（佐倉市池向遺跡）	45

106. 加曽利EⅣ式末～称名寺Ⅰ式期の住居跡と出土土器 (印西市船尾白幡遺跡) ……………	45	160. 墓坑① (成田市長田雉子ヶ原遺跡) ……………	63
107. 調査地点航空写真 (四街道市南作遺跡) ……………	46	161. 墓坑② (成田市長田雉子ヶ原遺跡) ……………	63
108. フラスコ形土坑の土器出土状況 (四街道市南作遺跡) ……………	47	162. 100号住居址出土の鍔付注口土器 (成田市長田雉子ヶ原遺跡) ……………	63
109. フラスコ形土坑の断面 (四街道市南作遺跡) ……………	47	163. 加曽利EⅢ式土器 (成田市長田雉子ヶ原遺跡) ……………	64
110. 深鉢が倒立して出土した土坑 (四街道市南作遺跡) ……………	47	164. 加曽利EⅣ式～称名寺式期の土器 (成田市長田雉子ヶ原遺跡) ……	64
111. 土器が入れ子状態で出土した土坑 (四街道市南作遺跡) ……………	47	165. 出土土器 (成田市久井崎Ⅱ遺跡) ……………	65
112. さまざまな土器① (四街道市南作遺跡) ……………	48	166. 浅鉢 (成田市久井崎Ⅱ遺跡) ……………	65
113. さまざまな土器② (四街道市南作遺跡) ……………	49	167. ベンガラ容器 (成田市久井崎Ⅱ遺跡) ……………	65
114. 浅鉢が伏せられて出土した土坑 (四街道市南作遺跡) ……………	50	168. 南区遺構分布状況 (成田市稲荷山遺跡) ……………	66
115. 埋甕炉をもつ住居跡と炉の拡大 (四街道市南作遺跡) ……………	50	169. 加曽利EⅠ式期の有段住居 (成田市稲荷山遺跡) ……………	66
116. 有段住居 (四街道市南作遺跡) ……………	50	170. 加曽利E式期の有段住居 (成田市稲荷山遺跡) ……………	66
117. 調査地点全景 (西側一部) (佐倉市神門房下遺跡) ……………	51	171. 加曽利EⅡ式期の斜位土器埋設炉 (成田市稲荷山遺跡) ……	66
118. 有段住居 (佐倉市神門房下遺跡) ……………	51	172. 稲荷山遺跡出土土器 (成田市稲荷山遺跡) ……………	66
119. ベンガラ容器 (加曽利EⅠ式) (佐倉市神門房下遺跡) ……	51	173. 土器片囲い炉をもつ住居跡 (成田市新山台遺跡) ……………	67
120. 住居跡出土土器 (佐倉市神門房下遺跡) ……………	51	174. 土坑からの土器出土状況 (成田市新山台遺跡) ……………	67
121. 遺跡全景 (栄町麻生広ノ台遺跡) ……………	52	175. 加曽利EⅣ式土器 (成田市新山台遺跡) ……………	67
122. 小竪穴近景 (栄町麻生広ノ台遺跡) ……………	52	176. 浅鉢 (称名寺式 佐倉市太田向原遺跡) ……………	68
123. 貝層断面 (栄町麻生広ノ台遺跡) ……………	52	177. 深鉢 (称名寺式 成田市山口雷土遺跡) ……………	68
124. 遺物出土状況 (栄町麻生広ノ台遺跡) ……………	53	178. 把手 (称名寺式 成田市山口雷土遺跡) ……………	68
125. 有段住居 (栄町麻生広ノ台遺跡) ……………	53	179. 酒々井町伊篠白幡遺跡全体図 ……………	68
126. 土器捨て場の遺物出土状況 (栄町麻生広ノ台遺跡) ……………	53	180. 佐倉市坂戸草刈掘込遺跡全体図 ……………	68
127. 土坑断面 (栄町麻生広ノ台遺跡) ……………	53	181. 土偶 (成田市小菅法華塚Ⅱ遺跡) ……………	69
128. 埋甕出土状況 (栄町麻生広ノ台遺跡) ……………	53	182. 土偶 (佐倉市坂戸草刈掘込遺跡) ……………	69
129. さまざまな炉跡 (栄町麻生広ノ台遺跡) ……………	53	183. 手燭形土器 (佐倉市坂戸草刈掘込遺跡) ……………	69
130. 斜位土器埋設炉が設けられた住居跡 (酒々井町墨新山遺跡) ……	54	184. 石棒・石剣 (佐倉市坂戸草刈掘込遺跡) ……………	69
131. 埋設された土器 (酒々井町墨新山遺跡) ……………	54	185. 石製垂飾 (佐倉市坂戸草刈掘込遺跡) ……………	69
132. 斜位土器埋設炉と出土土器 (酒々井町墨木戸遺跡) ……………	55	186. 浅鉢 (安行3c式 印西市東畑遺跡) ……………	69
133. 住居跡・土坑出土土器 (酒々井町墨木戸遺跡・墨新山遺跡) ……	55	187. イノシシ形土製品 (栄町大畑Ⅰ－4遺跡) ……………	69
134. 調査地点全景 (佐倉市生谷松山遺跡) ……………	56	188. 人骨出土状況 (成田市奈土貝塚) ……………	69
135. 遺構分布状況 (佐倉市生谷松山遺跡) ……………	56	189. 粘土採掘坑 (四街道市南作遺跡) ……………	69
136. 有段住居 (佐倉市生谷松山遺跡) ……………	57	190. 深鉢 (粘土採掘坑出土安行3b式 四街道市南作遺跡) ……	70
137. さまざまな炉 (佐倉市生谷松山遺跡) ……………	57	191. 浅鉢 (粘土採掘坑出土大洞BC式 四街道市南作遺跡) ……	70
138. 石棒出土状況 (佐倉市生谷松山遺跡) ……………	57	192. 晩期粗製土器 (粘土採掘坑出土 四街道市南作遺跡) ……	70
139. ヒスイ製垂飾 (佐倉市生谷松山遺跡) ……………	57	193. 西根遺跡全体図 ……………	71
140. 焼成粘土塊 (佐倉市生谷松山遺跡) ……………	58	194. 遺跡全景 (印西市西根遺跡) ……………	72
141. 石鏃 (佐倉市生谷松山遺跡) ……………	58	195. 第3集中地点遺物出土状況 (印西市西根遺跡) ……………	72
142. 遺構分布図 (佐倉市生谷松山遺跡) ……………	58	196. 土器集中地点から出土した加曽利B式土器 (印西市西根遺跡) ……	72
143. 土器片鏃を多く出土した住居跡 (佐倉市吉見稲荷山遺跡) ……	59	197. 飾り弓 (印西市西根遺跡) ……………	73
144. 床面からまとまって出土した土器片鏃 (佐倉市吉見稲荷山遺跡) ……	59	198. 遠部台遺跡全体図 ……………	73
145. 土器片鏃を多く出土した住居跡の土器 (佐倉市吉見稲荷山遺跡) ……	59	199. 土器塚 (佐倉市遠部台遺跡) ……………	73
146. 漆液容器出土状況 (佐倉市吉見稲荷山遺跡) ……………	60	200. 曲輪ノ内貝塚全体図 ……………	73
147. 漆液容器の出土状況再現 (佐倉市吉見稲荷山遺跡) ……………	60	201. 海獣形土製品 (佐倉市曲輪ノ内貝塚) ……………	73
148. 漆液容器の内面 (佐倉市吉見稲荷山遺跡) ……………	60	202. 計画的な集落を示す遺構配置 (佐倉市井野長割遺跡第8次調査) ……	74
149. 漆液容器 (左) と蓋 (右) の実測図及び文様展開図 (佐倉市吉見稲荷山遺跡) ……………	60	203. 大型土坑 (佐倉市井野長割遺跡第8次調査28号土坑) ……	74
150. ベンガラ容器 (加曽利EⅡ式) (佐倉市吉見稲荷山遺跡) ……	60	204. 遺跡南側からのびる道状遺構 (佐倉市井野長割遺跡第9次調査) ……	74
151. 大型深鉢 (佐倉市吉見稲荷山遺跡) ……………	60	205. 埋甕をとまなう土坑墓 (佐倉市井野長割遺跡第4次調査) ……………	74
152. さまざまな土器 (佐倉市吉見稲荷山遺跡) ……………	61	206. 加曽利B式期の大型住居跡およびマウンド5堆積状況 (佐倉市井野長割遺跡第2次調査) ……………	75
153. 大木系の土器 (佐倉市吉見稲荷山遺跡) ……………	61	207. 貝塚からの獣骨検出状況 (佐倉市井野長割遺跡第4次調査) ……	75
154. 勝坂系の土器 (佐倉市吉見稲荷山遺跡) ……………	61	208. 石棒 (佐倉市井野長割遺跡) ……………	75
155. 勝坂系の土器 (佐倉市吉見稲荷山遺跡) ……………	61	209. 角底土器 (安行3b式 佐倉市井野長割遺跡) ……………	75
156. 特殊な住居 (成田市長田雉子ヶ原遺跡) ……………	62	210. 後・晩期深鉢 (佐倉市井野長割遺跡) ……………	76
157. 住居跡から出土した石皿 (左) と石棒 (右) (成田市長田雉子ヶ原遺跡) ……………	62	211. 関西地方の影響を受けた晩期の浅鉢 (佐倉市井野長割遺跡) ……	76
158. 埋甕炉 (成田市長田雉子ヶ原遺跡) ……………	62	212. 後・晩期注口土器 (佐倉市井野長割遺跡) ……………	76
159. 掘立柱建物跡 (成田市長田雉子ヶ原遺跡) ……………	62	213. 香炉形土器 (佐倉市井野長割遺跡) ……………	76

214. 異形台付土器（佐倉市井野長割遺跡）……………	76
215. 土製品（佐倉市井野長割遺跡）……………	76
216. イノシシ形土製品（佐倉市井野長割遺跡）……………	76
217. 井野長割遺跡環状盛土遺構全体図……………	77
218. 大規模な斜面の埋め立て （佐倉市井野長割遺跡第4次調査東側斜面トレンチ）……………	77
219. ローム質黄褐色土が堆積する土坑 （佐倉市井野長割遺跡第8次調査9号土坑）……………	77
220. 吉見台遺跡全体図……………	78
221. 大型住居跡（佐倉市吉見台遺跡）……………	79
222. 北側谷部斜面貝層（佐倉市吉見台遺跡）……………	79
223. 骨角貝製品（佐倉市吉見台遺跡）……………	79
224. 独鈷石（佐倉市吉見台遺跡）……………	79
225. 壺形土器（堀之内1式 佐倉市吉見台遺跡）……………	79
226. アワビ形土製品（加曽利B3式 佐倉市吉見台遺跡）……………	79
227. 鈎手土器（加曽利B式 佐倉市吉見台遺跡）……………	79
228. 注口土器（安行3a式 佐倉市吉見台遺跡）……………	80
229. 人面付注口土器（安行3a式 佐倉市吉見台遺跡）……………	80
230. 手燭形土器（安行3a式 佐倉市吉見台遺跡）……………	80
231. 異形台付土器（晩期安行式 佐倉市吉見台遺跡）……………	80
232. 海獣形土製品（佐倉市吉見台遺跡）……………	80
233. 動物形土製品（佐倉市吉見台遺跡）……………	81
234. 動物形土製品？（佐倉市吉見台遺跡）……………	81
235. 山形土偶（佐倉市吉見台遺跡）……………	81
236. ミミズク土偶（佐倉市吉見台遺跡）……………	81
237. 中空土偶・土版（佐倉市吉見台遺跡）……………	81
238. 溝状遺構（後・晩期 II－2地区18号溝 佐倉市宮内井戸作遺跡）……………	82
239. 溝状遺構（後・晩期 II－2地区18号溝） 出土遺物（佐倉市宮内井戸作遺跡）……………	82
240. 貯蔵穴（後期 III－2地区66号土坑 佐倉市宮内井戸作遺跡）…	82
241. 宮内井戸作遺跡全体図……………	83
242. 柄鏡形住居跡（堀之内1式期 VI地区11号住 佐倉市宮内井戸作遺跡）……………	84
243. 長方形住居跡（堀之内1式期 III－2地区2号住 佐倉市宮内井戸作遺跡）……………	84
244. D字形住居跡（後期後半 III地区 佐倉市宮内井戸作遺跡）…	84
245. 掘立柱建物跡（II－2地区1・2号掘立柱建物跡 佐倉市宮内井戸作遺跡）……………	84
246. 大型住居跡（加曽利B式期 II地区113・114号住 佐倉市宮内井戸作遺跡）……………	84
247. 大型住居跡（晩期安行式期 II地区118号住 佐倉市宮内井戸作遺跡）……………	84
248. 筒形土偶（佐倉市宮内井戸作遺跡出土）……………	85
249. 山形土偶・ミミズク土偶・遮光器土偶（佐倉市宮内井戸作遺跡）…	85
250. 東北地方からもたらされた土偶（佐倉市宮内井戸作遺跡）…	85
251. サメ歯製垂飾（佐倉市宮内井戸作遺跡）……………	85
252. 堀之内式土器（佐倉市宮内井戸作遺跡）……………	86
253. 加曽利B式土器（佐倉市宮内井戸作遺跡）……………	86
254. 曾谷・後期安行式土器（佐倉市宮内井戸作遺跡）……………	86
255. 晩期安行式土器（佐倉市宮内井戸作遺跡）……………	87
256. II－2地区18号溝出土晩期前葉の浅鉢 （佐倉市宮内井戸作遺跡）……………	87
257. 後期粗製土器（佐倉市宮内井戸作遺跡）……………	87
258. 動物（アナグマ？）模倣浅鉢（佐倉市宮内井戸作遺跡）……	87
259. 各種特殊土器（佐倉市宮内井戸作遺跡）……………	87
260. 注口土器（加曽利B式 佐倉市宮内井戸作遺跡）……………	87
261. 鳥形把手（称名寺式 佐倉市宮内井戸作遺跡）……………	88
262. 鳥形？把手（称名寺式 佐倉市宮内井戸作遺跡）……………	88
263. 鳥形土製品（佐倉市宮内井戸作遺跡）……………	88
264. ミニチュア土器（佐倉市宮内井戸作遺跡）……………	88
265. 耳飾（佐倉市宮内井戸作遺跡）……………	88
266. 各種土製品（佐倉市宮内井戸作遺跡）……………	88
267. 各種石器（佐倉市宮内井戸作遺跡）……………	88
268. 独鈷石（佐倉市宮内井戸作遺跡）……………	88
269. 千代田遺跡群IV区全体図……………	89
270. IV区土坑群（四街道市千代田遺跡群）……………	90
271. 後期土器（四街道市千代田遺跡群）……………	91
272. 浅鉢（後期 四街道市千代田遺跡群）……………	91
273. 蓋（四街道市千代田遺跡群）……………	91
274. 貝輪（四街道市千代田遺跡群）……………	91
275. 石剣（四街道市千代田遺跡群）……………	91
276. 山形土偶・ミミズク土偶（四街道市千代田遺跡群）……………	92
277. 土版（四街道市千代田遺跡群）……………	92
278. 動物形土製品（四街道市千代田遺跡群）……………	92
279. クルミ形土製品（四街道市千代田遺跡群）……………	92
280. 耳飾・石製垂飾（四街道市千代田遺跡群）……………	92
281. 土坑墓（四街道市御山遺跡）……………	93
282. 土坑墓白玉出土状況（四街道市御山遺跡）……………	93
283. 赤色顔料充填小形壺形土器（四街道市御山遺跡）……………	93
284. ビット群（四街道市御山遺跡）……………	93
285. 土偶（四街道市御山遺跡）……………	93
286. 石製垂飾（四街道市御山遺跡）……………	93
287. 有髻土偶（黥面土偶）（四街道市池花南遺跡）……………	93
288. 浅鉢（晩期後半大洞系 四街道市池花南遺跡）……………	94
289. 千網式土器（四街道市池花南遺跡）……………	94
290. 荒海式土器（四街道市池花南遺跡）……………	94
291. 晩期終末期土器古段階（四街道市御山遺跡）……………	94
292. 晩期終末期土器中段階（四街道市御山遺跡）……………	94
293. 晩期終末期土器新段階（四街道市御山遺跡）……………	94
294. 荒海貝塚全体図……………	95
295. 荒海川表遺跡遺構配置図……………	95
296. 荒海貝塚・荒海川表遺跡周辺地形航空写真……………	96
297. 荒海貝塚A地点貝層……………	96
298. 土偶（成田市荒海貝塚）……………	96
299. 鹿角棒状骨角器（成田市荒海貝塚）……………	96
300. 石製垂飾・骨角器（成田市荒海貝塚）……………	96
301. 10号竪穴出土遺物（成田市荒海川表遺跡）……………	96
302. 17号遺構出土遺物（成田市荒海川表遺跡）……………	96

はじめに

従来、縄文時代は今から約12,000年前に始まり、およそ1万年間続いた時代とされてきた。ところが、最新のC¹⁴（放射性炭素）年代測定法を用いた暦較正年代によると、上限が今から16,000年前（紀元前14,000年前）という年代が得られている。弥生時代の開始年代とともに、この年代観と文化事象、考古遺物との相関において、いましばらくは見直しや検証作業が必要とされる。それでも、縄文土器が世界最古の土器であることは、いまだに不動の地位を占めている。しかし、土器の起源については、極東アジア全体を視野に入れた研究が盛んに進められているところであり、その地位を近い将来他に譲る日がくるのかもしれない。

第1表は、関東地方を中心とした土器編年に最新のC¹⁴年代測定値を付したものである。本書の土器型式の年代を理解する上で参考にしていただきたい。

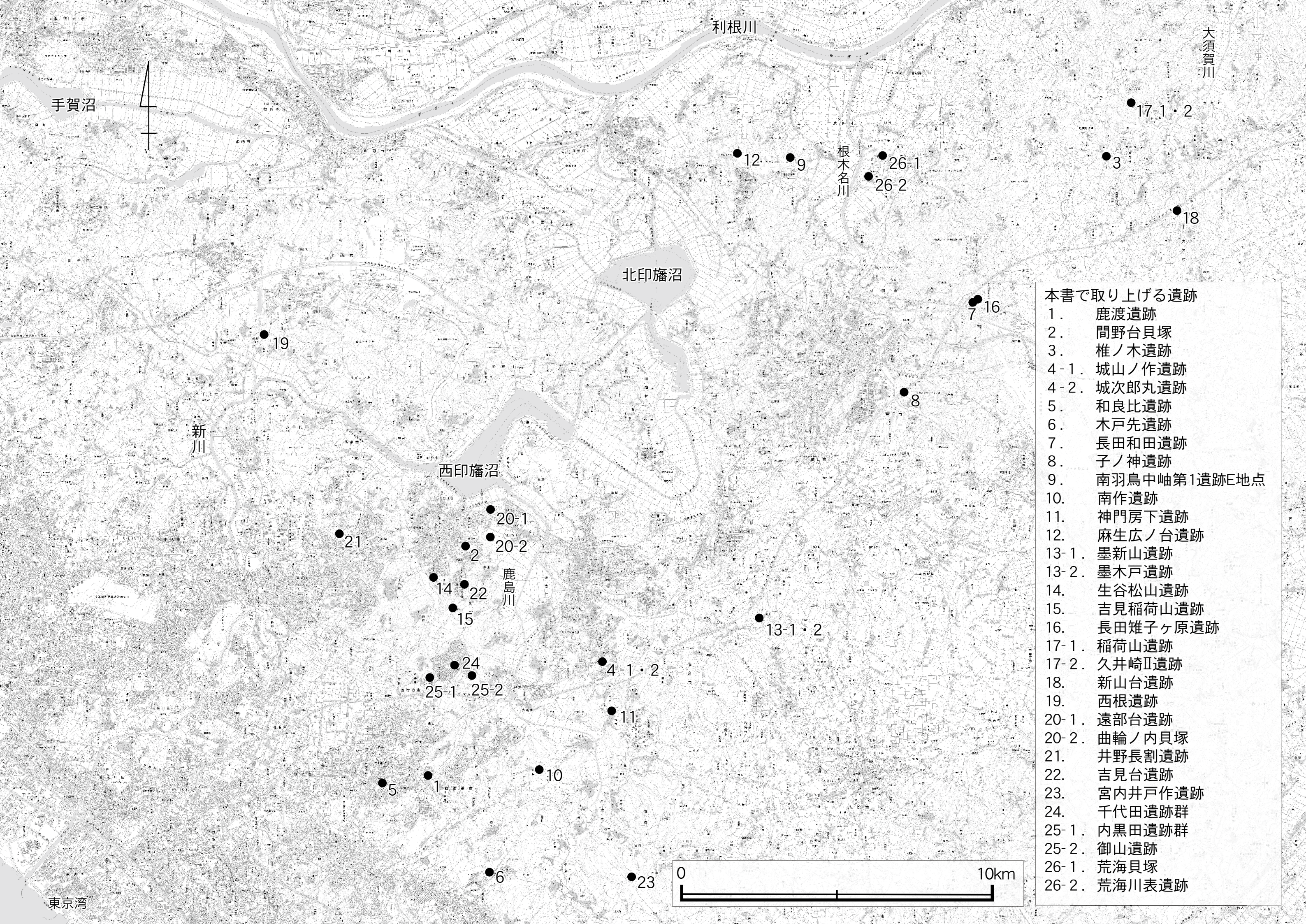
さて、縄文時代の印旛地域には、草創期から晩期にわたるあらゆる時期において縄文人の生活の痕跡が認められる。その痕跡が残る遺跡の立地する地形は、当然のことながら1万余りもの長い年月の間に変化している。当地域は下総台地の中央にあつて、東京湾側と太平洋側との分水界に位置している。目を北に転じると、郡域の北部は利根川本流に接している。遺跡の多くは「下総台地」と呼ばれる日本でも有数の平坦、かつ広大な台地上に立地しているが、河岸段丘や低地にも活動の痕跡を残している。現在の印旛沼を中心に、河川交通によって周辺地域とかかわりあいながら豊かな文化を育んでいたことは、約1,800箇所という遺跡の数が如実に語っている。この遺跡数に見てとれるように、千葉県内では遺跡の分布密度が高い地域で、縄文人にとっていかに住みやすい土地であったかがわかる。そして、印旛郡市という比較的狭い地域ではあっても、時期ごと、遺跡ごとに多様な側面を見ることができる。

たとえば、早期には印旛沼周辺に貝塚が多く形成される。前期には集落内に墓域を伴う環状集落が広域に出現する。中期には印旛沼南岸に大規模な環状集落が一定の間隔で分布し、利根川下流域では貝塚が形成される。後・晩期には中期の環状集落から場所を移して大規模な集落が形成されるが、集落間には中期と同様に一定の距離が保たれている。また、環状盛土や土器塚、大型住居などの特徴的な遺構が伴う。

このような文化事象のうちには、印旛地域の独自性を見出すこともできるが、もちろん印旛地域という閉ざされた空間で醸成され完結するものではない。他地域と密接に関わりあいながら築き上げられたものであることは、さまざまな遺物や遺構が雄弁に語っている。列島の縄文時代という鏡に印旛地域の縄文時代像がどう映るのか、本書がその期待や疑問に役立つことができれば幸いである。

前14000	草創期	(隆線文系) (爪形文系) (多縄文系)
前10500	早期	井草Ⅰ 大丸・井草Ⅱ 夏島 稲荷台 稲荷原・花輪台 大浦山・東山・花輪台 平坂 三戸 田戸下層 田戸上層 子母口 野島 鶴ヶ島台 茅山下層 (粕畑)茅山上層 (上ノ山) (入海Ⅰ) (入海Ⅱ) (石山) 打越 (天神山) 〃 (塩屋) 神之木台 (上ノ山Z)下吉井
前5000	前期	(木島)花積下層 二ツ木 関山Ⅰ 関山Ⅱ 黒浜 諸磯a・浮島Ⅰa 諸磯b古・浮島Ⅰb 諸磯b中・浮島Ⅱ 諸磯b新・浮島Ⅲ 諸磯c・興津Ⅰ 十三菩提・興津Ⅱ
前3500	中期	五領ヶ台Ⅰ・八辺 五領ヶ台Ⅱ・阿玉台Ⅰa (猪沢)・阿玉台Ⅰb 勝坂Ⅰ・阿玉台Ⅱ 勝坂Ⅱ・阿玉台Ⅲ 勝坂Ⅲ・中峠・阿玉台Ⅳ 加曽利EⅠ 加曽利EⅡ 加曽利EⅢ 加曽利EⅣ
前2500	後期	称名寺Ⅰ 称名寺Ⅱ 堀之内Ⅰ 堀之内Ⅱ 加曽利BⅠ 加曽利BⅡ 加曽利BⅢ 高井東・曾谷 安行Ⅰ 安行Ⅱ
前1250	晩期	安行3a 安行3b・姥山 安行3c・前浦Ⅰ 安行3d・前浦Ⅱ 千綱 荒海
前400		

1. 関東地方を中心とする縄文土器編年
※暦年代は、最新の炭素14年代値を参考に50年単位で表した。



- 本書で取り上げる遺跡
- 1. 鹿渡遺跡
 - 2. 間野台貝塚
 - 3. 椎ノ木遺跡
 - 4-1. 城山ノ作遺跡
 - 4-2. 城次郎丸遺跡
 - 5. 和良比遺跡
 - 6. 木戸先遺跡
 - 7. 長田和田遺跡
 - 8. 子ノ神遺跡
 - 9. 南羽鳥中岫第1遺跡E地点
 - 10. 南作遺跡
 - 11. 神門房下遺跡
 - 12. 麻生広ノ台遺跡
 - 13-1. 墨新山遺跡
 - 13-2. 墨木戸遺跡
 - 14. 生谷松山遺跡
 - 15. 吉見稻荷山遺跡
 - 16. 長田雉子ヶ原遺跡
 - 17-1. 稻荷山遺跡
 - 17-2. 久井崎Ⅱ遺跡
 - 18. 新山台遺跡
 - 19. 西根遺跡
 - 20-1. 遠部台遺跡
 - 20-2. 曲輪ノ内貝塚
 - 21. 井野長割遺跡
 - 22. 吉見台遺跡
 - 23. 宮内井戸作遺跡
 - 24. 千代田遺跡群
 - 25-1. 内黒田遺跡群
 - 25-2. 御山遺跡
 - 26-1. 荒海貝塚
 - 26-2. 荒海川表遺跡

I 草創期

草創期は縄文時代の萌芽期で、今から約14,000～10,500年前とされている。「はじめに」でも触れたように、最新のC14年代測定によれば、愛媛県上黒岩岩陰遺跡で16,000年前という数値が得られている。気候は寒暖を繰り返していた晩氷期にあたり、地形は今とは大きく異なっていた。列島規模で見ると、この時期の遺跡は愛媛県上黒岩岩陰遺跡のほか、長崎県泉福寺洞穴、長野県湯倉洞穴、埼玉県小瀬ヶ沢洞穴、福島県塩喰洞穴などの山深い洞窟で確認されており、その内容と規模からはとても集落と言えるほどのものではなかった。そのため、当時の人々は旧石器時代と変わらぬ狩猟対象の動物を追いながら点々と移動を繰り返す遊動的な生活をしていただと考えられていた。ところが、最近調査が行なわれた静岡県芝川町窪A遺跡で平坦な台地上に馬蹄形に分布する6軒の住居跡や炉跡、祭祀遺構などが発見され、すでに草創期には定住的な集落が存在していたことがわかった。

印旛地域でも河岸段丘面や平坦な台地上に遺跡が点在しているが、明確な住居跡は未だに確認されていない。遺跡からは、当時使用されていた土器と石器が出土するだけで、集落の様相は不明なままである。

石器には「尖頭器」と呼ばれる後期旧石器時代以来の器種が主体で、「木葉形尖頭器」や「柳葉形尖頭器」、「有舌尖頭器」などのかたちがある。前二者は研究者によって後期旧石器時代と縄文時代草創期のどちらに含めるかで見解が分かれるところであるが、印旛郡内の広範囲から出土している。まとまって出土した遺跡として、

富里市南大溜袋遺跡や四街道市木戸先遺跡が挙げられる。

土器は印旛沿岸の印旛村や印西市のほか、成田市南部での出土が目立つ。印旛郡内最古の土器は、隆線文系土器でも比較的新しい段階のもので、印西市や印旛村での出土が目立つ。印旛村瀬戸遠連遺跡では隆線文土器を中心に、有舌尖頭器や礫器などの石器が長径8m、短径4mの範囲に集中していたことから、なんらかの生活面が想定されている。

その後、草創期後半に縄文を押圧・回転して施文した多縄文系土器が出現し、土器の表裏両面に縄文が施された表裏縄文土器を経て早期の撚糸文系土器へと移行する。表裏縄文土器は、佐倉市大林遺跡で出土している。



2. 有舌尖頭器とさまざまな石器（成田市成井遺跡）
尖頭器とは槍の先に装着して狩猟に使われた石器で、茎の部分が舌状に突出するかたちのものがこの時期にみられる。最上段は木葉形尖頭器、中段は有舌尖頭器。



3. 柳葉形尖頭器（佐倉市川崎遺跡）
槍先に着けて使用した石器。長さ12cm。



4. 隆線文土器（印旛村瀬戸遠蓮遺跡）

土器面にミミズ腫れ状の細い粘土紐を貼り付けて文様を施したもの。土器の厚さは3～7mmと薄く、平均4～5mmである。隆起線の幅は3～6mmで、爪形文や棒状工具による押し潰しを加えたものなどがある。



5. 隆線文土器（印西市地国穴台遺跡）

粘土紐の上に刻みや棒状工具による押し潰しを施したものや、口の部分に「ハ」の字状の刻みを施したものがある。



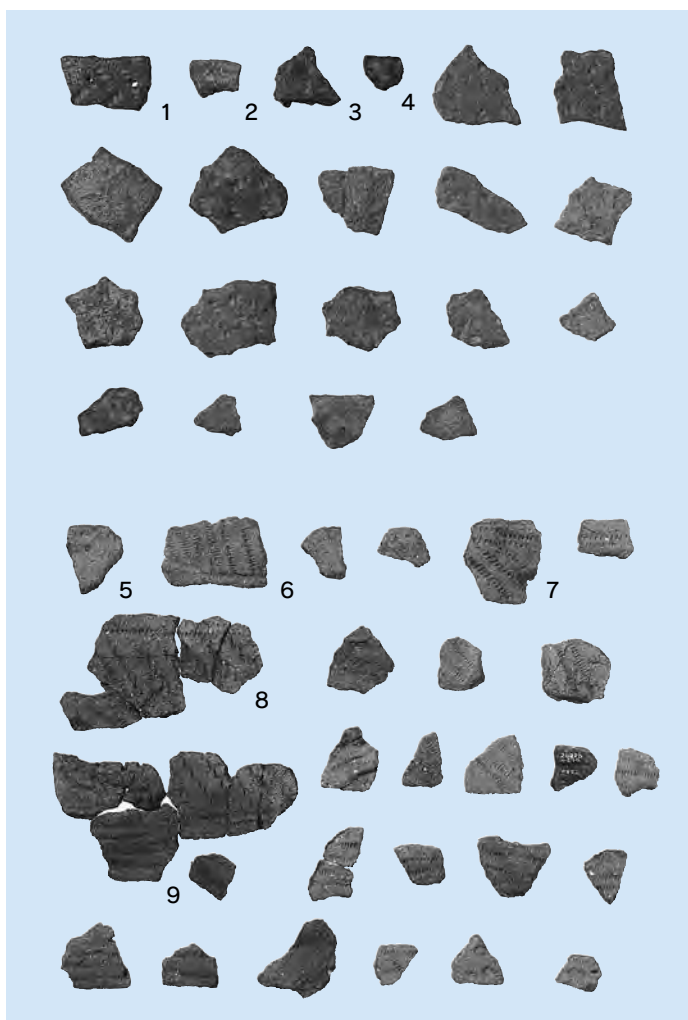
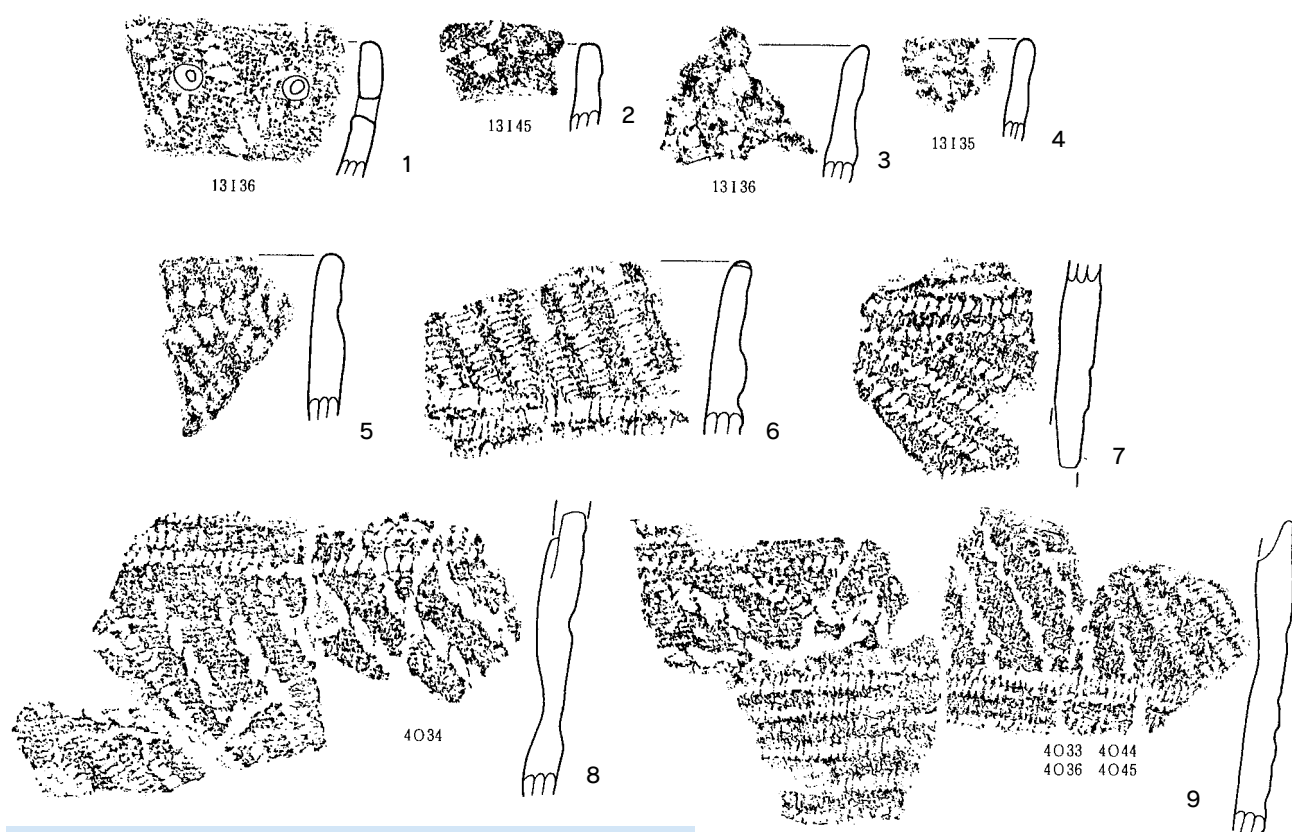
6. 爪形文土器（印西市榎峠遺跡）

土器面に爪を押し付けたような文様を施したもの。幅6mm強の細いヘラ状工具で、5～8mmの間隔で刺突している。



7. 押圧縄文土器（佐倉市岩富漆谷津遺跡）

縄文を土器面に押しつけて文様を施したもの。



8. 押圧縄文・絡条体圧痕文土器 (成田市取香和田戸遺跡)
 縄文を土器面に押しつけたり、棒状のものに巻きつけたりしたものを押し当てて文様を施したもの。上段は多段の横位羽状構成をとるもので、左端の1点は焼成前の穿孔が口縁に等間隔にめぐる。

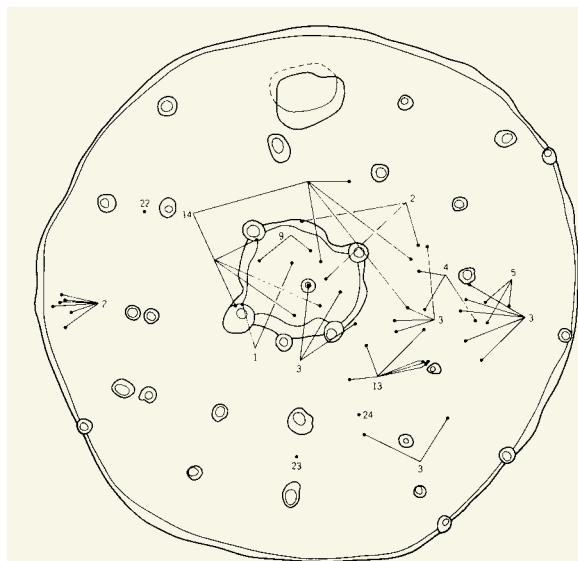
Ⅱ 早 期

早期は今から12,500～7,000年前とされている。地質学では後氷期にあたり、気候は前期前半にかけて温暖化となり、いわゆる「縄文海進」が始まる。撚糸文期は遺跡数が急増する時期であり、成田市南部や四街道市域で住居跡が検出されている。とくに成田市南部では複数の住居跡が検出される遺跡が近距離に密集している。井草式期の住居は円形で、床面の中央に炉に関連するとみられる窪みをもつ。なかには、径8m近い大型のものがある。出土土器には、三浦半島周辺の大丸式や南西関東の大浦山式、大宮台地周辺の稲荷原式など、他地域に分布の中心をもつ土器も散見される。末期には、印旛沼周辺に撚糸や縄文の原体（絡条体）圧痕文や刺突文、沈線文を施した特徴的な土器群が分布するようになり、それぞれ「金堀式」、「石神式」、「木の根式」と呼ばれることもある。さらに、中部地方から関東以西に分布する押型文土器が四街道市鹿渡遺跡や井戸作遺跡などで客体的に伴うが、なかには、これら他地域の影響を受けつつ印旛地域で変異（在地化）したものもある。



9. 夏島式土器（佐倉市大林遺跡）

撚糸文系土器様式期の中頃に位置付けられる土器である。底は本様式を通して丸底で、ふくらみをもちながら口縁にいたる。器面に縦方向の撚糸文が施されている。推定器高30cm、口径25cmである。



10. 撚糸文期の住居跡（写真：成田市取香和田戸遺跡 図左：成田市東峰御幸畑西遺跡 図右：木の根拓美遺跡）

取香和田戸遺跡例と東峰御幸畑西遺跡例はいずれも井草式期のもので、前者は径7.2×7.9m、後者は径7.5×7.6mである。ともに炉は確認されないものの床面の中央付近に方形の掘り込みがあり、後者の掘り込みは1.7×1.8mほどである。木の根拓美遺跡例は稲荷台式期とみられ、径約6.2mである。炉は確認されていないものの、焼土の堆積が9か所に認められた。中央付近の楕円形の掘り込みから多量の炭化物やクルミなどの種子が出土したが、焼土や熱を受けた痕跡はない。



11. 撚糸文系土器の刺突文タイプ
(佐倉市生谷境堀遺跡)

竹管状工具による刺突を施す。口縁部や胴部に、列点状の刺突によるさまざまな文様が施されている。



12. 撚糸文系土器の絡条体圧痕文タイプ
(富里市金堀遺跡)

撚糸文や刺突文を併用しながら、多様な文様を施す。



刺突文タイプ



絡条体圧痕文タイプ



沈線文タイプ

沈線文タイプは、成田市南部、太平洋岸との分水界の限られた範囲で出土する。

13. 燃糸文系土器様式末期の多様な文様（成田市木の根拓美遺跡）



14. 押型文土器

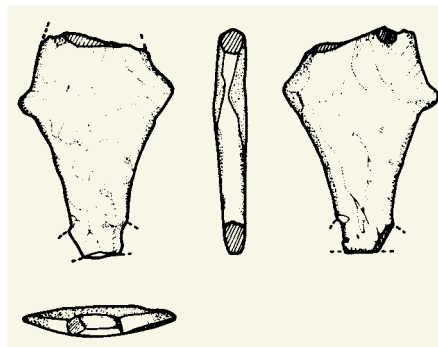
(成田市西向野Ⅰ遺跡)

楕円形の切り込みを施した棒状の工具を転がして文様を施した土器で、中部地方の細久保式に該当する。赤銅色の結晶片岩を含むことから、秩父地域で作られて搬入された可能性が考えられる。早期中葉、沈線文系土器に伴うものとみられる。



15. 土偶 (成田市木の根拓美遺跡)

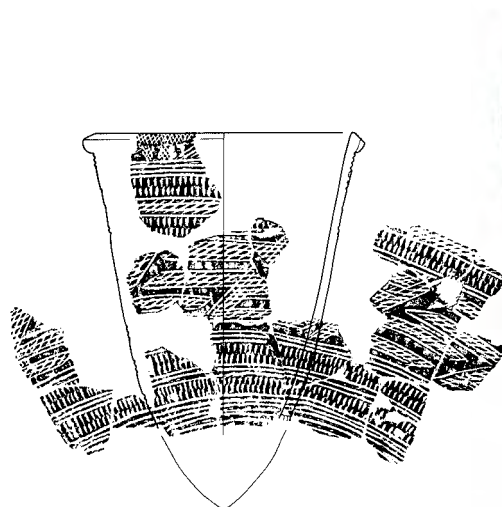
早期撚糸文系土器様式期のもの。三角形の偏平な粘土塊を胴部に見立て、そこに乳房の表現を足した程度である。側面に棒で突いた穴が施されたものもあり、使用方法を示唆している。左は幅4.5cm、残存高3.1cm、右は同じく4.1cm、2.8cm。



16. 土製品 (酒々井町猿楽場遺跡)

井草式土器の出土範囲内から出土した土偶と考えられるもの。逆五角形状をなす。高さ約4cm、最大幅2.7cm。

沈線文期になっても、成田市に遺跡が集中する傾向が伺える。田戸下層式期の住居跡が成田市椎ノ木遺跡や公津原遺跡群、四街道市和良比長作No-2遺跡などにあるほか、成田市西向野Ⅰ遺跡でも三戸式から田戸下層式期とみられる住居跡と炉穴がある。また、成田市西向野Ⅰ遺跡や佐倉市江原台遺跡では、当該期とみられる押型文土器が客体的に出土している。成田市取香和田戸遺跡では、撚糸文期から沈線文期と考えられる「集石土坑」と呼ばれる一種の屋外炉が検出されており、熱を受けて赤色変化した礫が500点以上出土した。



17. 三戸式土器 (成田市庚塚遺跡)

口径18cm、推定器高24cm。



18. 田戸下層式土器 (成田市稲荷峯遺跡)

口径19cm、推定器高39cm。



19. 田戸上層式土器 (成田市木の根拓美遺跡)

口縁に3対の突起をもつ。口径約31cm。

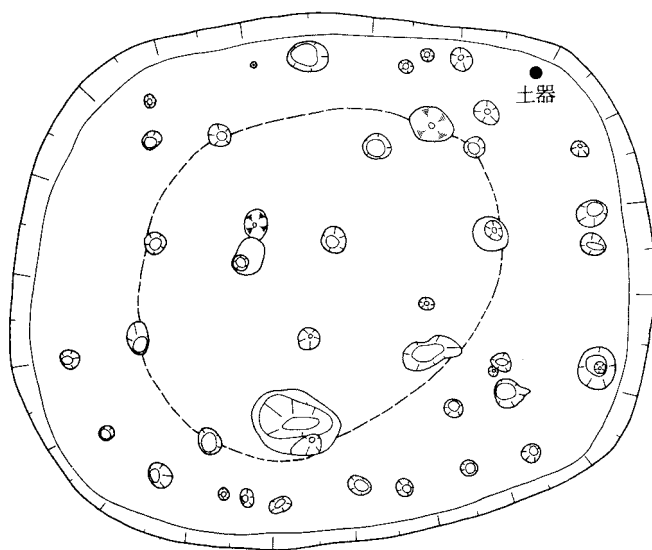


20. 土偶（成田市庚塚遺跡）

早期中葉、三戸式土器に伴うもの。左が表面で、右が裏面とみられる。最大幅6.5cm、残存高4.8cm、厚さ1.2cm。

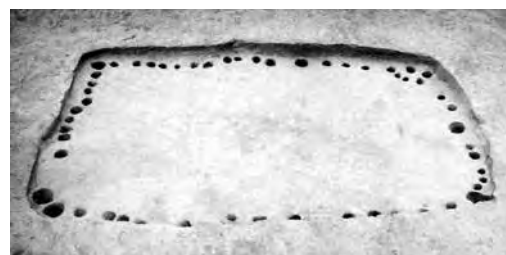


21. 炉穴に堆積した貝（佐倉市臼井屋敷跡遺跡） アサリを主体に、ハイガイ・マガキ・シオフキガイ・ハマグリなどが出土した。茅山式期。



22. 条痕文期末葉の住居跡（佐倉市飯重新畑遺跡）

茅山上層式期頃の住居跡で、5.0m×6.0mの小判形を呈する。破線の内側は、堅く踏み固められている。より古い鶴ガ島台式から茅山下層式への移行期の住居跡のなかには、印旛村トヶ前遺跡で見られるような小規模で柱穴もまばらな小竪穴状のものもある。

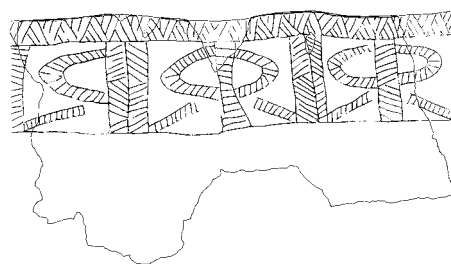


23. 田戸下層式期（上）と茅山式期（下）の住居跡（成田市成田ニュータウンLoc. 6・Loc. 4遺跡）

上は3.65×5.5m、下は3.7×5.6mのそれぞれ長方形状を呈する。住居の内側に傾く柱穴が、壁に沿っている。

条痕文期になると、遺跡は温暖化とともに海水面が上昇する縄文海進に呼応するように、谷奥にまで分布している。現在の印旛沼が霞ヶ浦をも含めた大きな内海を形成していたことは、貝塚の分布とその内容からもうかがえる。貝塚は印旛沼周辺から成田市新妻貝塚がある根本名川水系まで広く分布しているが、とくに印旛沼南岸域に多い。印旛沼周辺の主な遺跡としては、野島式期が本埜村瀧水寺裏遺跡や佐倉市城山ノ作遺跡、鵜ヶ島台式～茅山上層式期頃が佐倉市太田長作遺跡、間野台貝塚、飯重新畑遺跡、臼井屋敷跡遺跡、上座貝塚などが挙げられる。いずれも、住居跡や炉穴などに貝が廃棄されたものである。なかでも、瀧水寺裏遺跡の土坑内堆積の貝層は印旛沼周辺では最古級である。貝の組成は、おおむねハイガイやマガキを主体に、ハマグリやアサリなどである。当該期の集落はこれら貝塚を伴う遺跡のほか、印旛村トヶ前遺跡や駒込遺跡、成田市成田ニュータウン遺跡などが挙げられる。なお、成田市長田和田遺跡や椎ノ木遺跡、四街道市割山遺跡、印旛村岩戸広台遺跡A地区では子母口式期、駒込遺跡や佐倉市先崎西原遺跡では野島式期の住居跡が検出されている。また、野島式期には大型住居が出現するが、城山ノ作遺跡例は印旛地域最大である。ほかにも、駒込遺跡や成田市三里塚馬場遺跡で同時期、あるいはその可能性がある例が確認されている。当該期の遺構で注目されるのは、炉穴の分布形態である。臼井屋敷跡遺跡は住居が存在せず、炉穴だけが舌状に張り出した台地の縁辺に沿って長楕円形に分布しており、いわゆる「環状炉穴群」の様相を呈する。近くに集落の存在が推測されるが、住居と炉穴から構成される他の集落遺跡とは様相が異なる。印旛村古山遺跡も同様とみられる。また、駒込遺跡では住居跡を伴う環状炉穴群が展開し、本埜村五斗蒔遺跡では台地縁辺の最も標高の高い平坦面に、茅山上層式期とみられる67基もの炉穴だけが密集している。

当該期の出土土器の中には、野島式併行期の東海系の土器（清水柳E類）が佐倉市先崎西原遺跡で出土しているほか、東北地方南部に分布する常世2式土器が佐倉市太田長作遺跡に、同じく素山式との関連がうかがえるものが四街道市上野遺跡に、東海地方に分布する粕畑式や上ノ山式に類するものが成田市東峰御幸畑東遺跡にある。また、打越式や下吉井式、もしくは神之木台式が長田和田遺跡や飯重新畑遺跡、先崎西原遺跡、佐倉市向原遺跡、印西市船尾白幡遺跡などで出土しており、他地域との関連がうかがえる。



24. 野島式土器（本埜村瀧水寺裏遺跡）

炉穴の燃焼面上から、土器表面を内側にして2枚に折り畳むように出土したことから、意図的に置かれた可能性が指摘されている。口径40cm、残存高46cm。



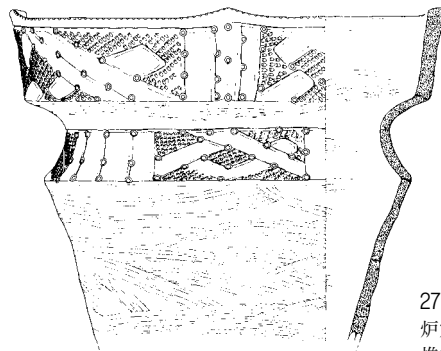
25. 線刻が施された条痕文系土器（印旛村駒込遺跡）

何を描いたものかは不明であるが、線刻画とすれば非常に珍しいものである。野島式土器。推定口径約32cm。



26. 茅山上層式土器（佐倉市太田長作遺跡）

炉穴から出土した。推定口径37cm、器高約43cm。



27. 鵜ヶ島台式土器（佐倉市鷺尾余遺跡）

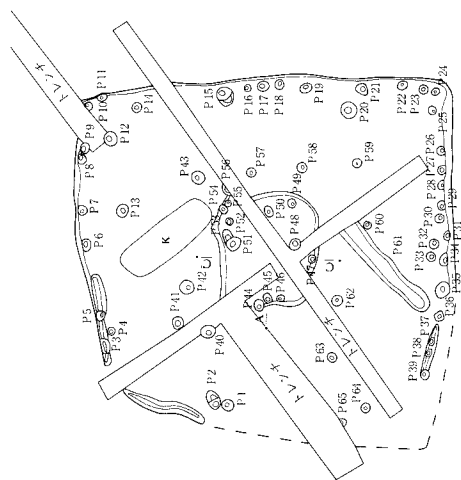
炉穴の燃焼部から出土した。推定口径約48cm。

II-1 鹿渡遺跡（四街道市）

遺跡は四街道市の南東、小名木川北岸の標高約40m前後の台地上に立地している。早期前半、撚糸文期の住居跡が検出され、撚糸文土器と押型文土器が多数出土した。

本遺跡の撚糸文土器は、撚糸原体を口縁部に山形に押し付けた絡条体圧痕文のほか、撚糸文を縦方向にジグザグに回転施文したもの、あるいは、ジグザグに絡条体圧痕文を施したものなどバラエティに富む。押型文土器は、原体に山形やキャタピラ状、あるいは、矢羽状の切り込みを施したものを縦方向に回転施文したものがあり、撚糸文と押型文が一つの土器に併用されているものもある。このような複雑な押型文土器は、押型文土器の本場である中部地方以西にはみられない要素であり、本遺跡に特徴的なものである。しかも、本遺跡における押型文土器の出土量が、印旛郡内の他の遺跡にくらべて多いこと自体が興味深い。他地域の影響を受けつつ、印旛地域で独自に生み出された文様と言えよう。一方で、撚糸文土器のなかには富里市金堀遺跡の絡条体圧痕文土器に代表される土器と共通する点も認められる。

このように、撚糸文土器と押型文土器の組成比率の差にも現れているように、当該期における他地域との交流を考える上で興味深い遺跡である。



28. 撚糸文期の住居跡

方形で、壁柱穴と呼ばれる壁際にめぐる柱穴のほか、床面中央寄りにも柱穴が認められる。柱穴は最も深いもので36cmを測るが、その他は10～20cm前後で比較的浅い。住民跡の平面規模は長軸5m、短軸4.3mで、中央部分に長軸1.5m、短軸1.3mの隅丸長方形の窪みがあるが、焼けた痕跡はない。



29. 押型文土器

矢羽根状、三角形を複合した押型文を施した土器。全面に施文した後、縦方向に帯状に文様を磨り消し、再度ジグザグに文様を施す。文様の細部の観察から、同じ土器に対して2、3種類の原体を用いているとみられる。

II-2 間野台貝塚（佐倉市）

遺跡は佐倉市の北部、印旛沼南岸の標高約28mの台地上に立地している。遺跡が所在する台地は、印旛沼に注ぐ鹿島川から入り込む谷によって開析されている。

遺跡は早期後半の条痕文期と、前期後半の諸磯・浮島式期の集落が中心である。調査の歴史は古く、昭和14年の東京大学人類学教室（現：東京大学考古学研究室）の調査を嚆矢とする。当時としては前例のない条痕文期の住居跡と、船橋市飛の台貝塚につぐ炉穴の発見という成果を挙げている。

条痕文期の集落は、鶺鴒ヶ島台式から茅山下層式移行期の住居跡、炉穴、土坑から構成されている。住居跡はいくつかの群を形成するが、なかには重複関係にある群も認められる。住居跡や炉穴の一部からは、貝が廃棄された状態で出土している。貝はハイガイを主体に、ハマグリ、オキシジミ、マガキ、アサリなどが認められた。住居跡は径2 m前後の円形を呈し柱穴が小さく不明確なものから、長軸6 mほどで支柱穴をもつ隅丸長方形形状のものまで多様である。炉はもたないものが多いが、炉に相当するとみられる窪みが認められるものもある。この窪みは、方形や長楕円形を呈しており、形態的には早期前半、燃糸文期の住居跡の窪みに似ている。

出土した鶺鴒ヶ島台式土器のなかには、胎土に金色雲母や石英・長石を多量に含むものがわずかに認められる。印旛地域に限らず近隣都県でも確認されており、同時期の土器とくらべて明らかに異質である。また、胎土中の繊維の含有量が少なく、焼成が良いのが特徴である。

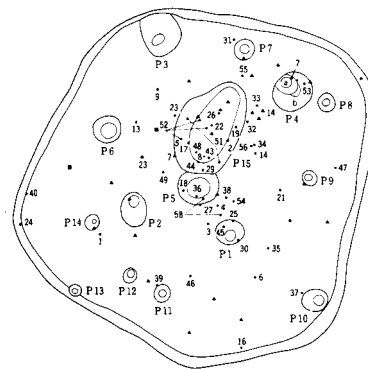
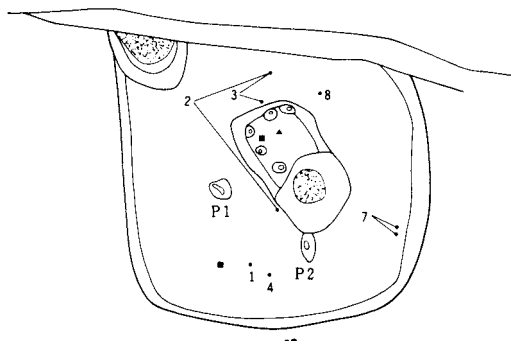
本遺跡は条痕文期の一時期に集落が設営された後、断絶を挟んで前期後半に再び集落が形成されるという印旛郡内では珍しい土地利用の変遷を迎える。なお、前期後半の集落は本遺跡の近辺では確認されていないことから、当該期の印旛沼南岸の様相を知る上でも興味深い遺跡である。



4つのブロックでハイガイを主体とする貝が堆積していた。ハイガイとオキシジミだけで全体の9割以上を占める。鶺鴒ヶ島台式期。



30. 住居内に堆積した貝
ハイガイを主体に、オキシジミとマガキを加えて全体の9割ほどを占める。鶺鴒ヶ島台式期。



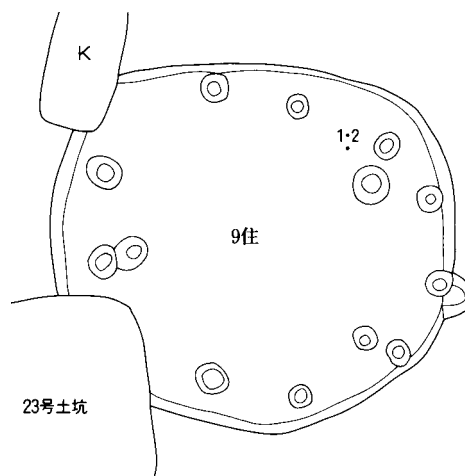
31. 条痕文期の住居跡

左は鶴ヶ島台式期の住居跡で、推定長軸 4 m の隅丸方形。床面の中央部に炉に付随するとみられる方形の掘り込みがある。早期燃糸文期にみられる灰床炉の系譜を引くものであろうか。右は茅山下層式期の住居跡で、約 5.4 × 5.7 m の隅丸不整形方形。炉は存在しないが楕円形状の掘り込みを有する。やはり、燃糸文期からの系譜を引くものであろうか。



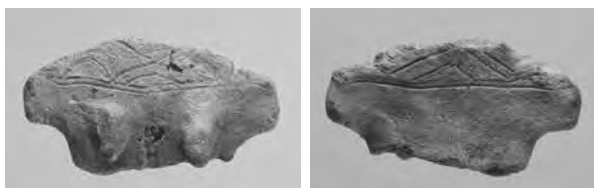
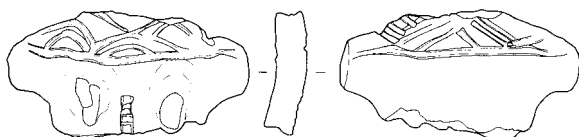
32. 鶴ヶ島台式土器

土器面を貝殻で調整した後、竹管状工具で沈線や刺突などの文様を施したもの。



33. 前期の住居跡（上）と出土土器（下）

3.4 × 3.74 m の不整形円形の住居壁寄り (1・2) からセットで出土した諸磯b式深鉢。左は最大口径24.5cm、高さ21cm、右は推定口径16cm、高さ約16cm。



34. 前期の土偶

胎土に多量の繊維を含むことから、黒浜式期のものとみられる。残存高 5 cm、最大幅 9 cm。



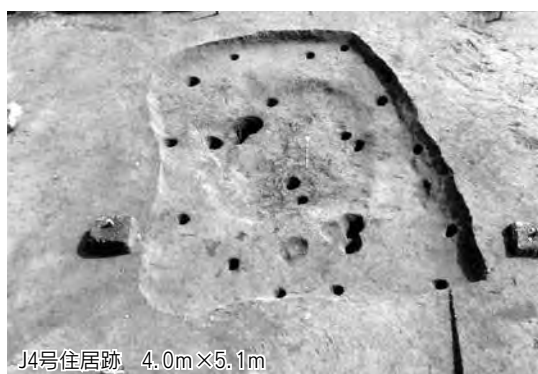
35. 糸巻き形石器

長さ6.6cm、幅3.3cm、重量11 g の頁岩製。前期のものとみられる。

II-3 椎ノ木遺跡（成田市）

遺跡は成田市の北東部、大須賀川の支流によって開析された標高約40mの台地上に立地している。細尾根状を呈する台地先端部の6,500㎡の調査範囲に、早期中葉、田戸下層式期から子母口式期を中心とする集落が展開していた。当該期の主な遺構は、住居跡8軒（田戸下層式期3軒、子母口式期5軒）、小竪穴4基、炉穴28基である。このうち、炉穴は台地の中央部から先端部にかけて分布するが、住居と小竪穴は台地の先端部の40×60mの範囲に集中している。

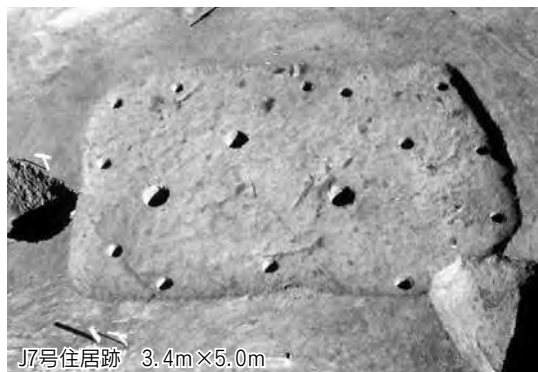
土器は、早期の撚糸文系土器から後期の堀之内式土器まで幅広い時期のものが出土している。土製品は、土製袈状耳飾が5点出土している。石器は、石鏃を中心に石斧、敲石、磨石などが出土しているほか、遺構が集中する台地の先端部に集中して小礫^{やれき}が出土している。しかも、そのうちの半数以上が焼けている「焼礫」と呼ばれるものであり、炉穴との関連で考えていくことにより、遺跡の性格が浮かび上がってくるであろう。



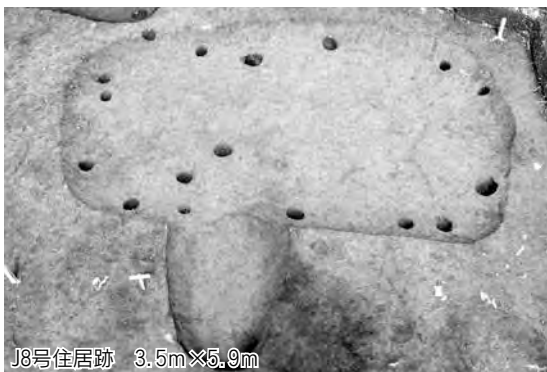
J4号住居跡 4.0m×5.1m



J6号住居跡 3.5m×5.0m



J7号住居跡 3.4m×5.0m



J8号住居跡 3.5m×5.9m

36. 子母口式期の住居跡

子母口式期の住居は、1軒を除き炉がない。なお、5軒のうち3軒には、床面に長軸2m前後、深さ20cm前後の不整円形の掘り込みがある。撚糸文期の「灰床炉」の系譜を引くものであろうか。



37. 住居跡出土の田戸下層式土器

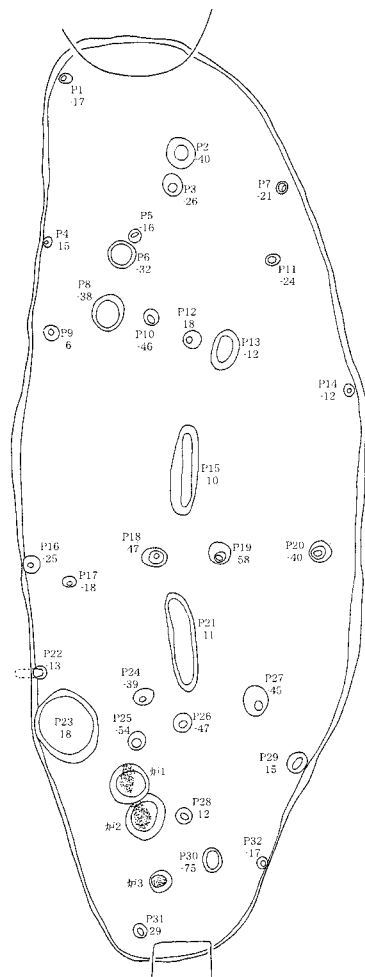
ともに大型の深鉢で、同じ住居跡の焼土付近からまとめて出土した。左は口径39cm、高さ約57cm、右は口径約32cm、高さ約57cm。

II-4 城山ノ作遺跡・城次郎丸遺跡（佐倉市）

両遺跡は、佐倉市の東部、高崎川の支流である南部川に開析された標高約33mの台地上に立地している。隣接した位置関係にあり、ともに早期中葉（野島式期）の住居跡や炉穴が検出されていることから、同一集落とみられる。

住居跡はおおよそ隅丸長形状で、炉があるものとなないものがある。注目されるのは、城山ノ作遺跡の長軸が16mを超すとみられる大型住居跡である。大型住居の性格はもとより、その系譜を考える上で貴重な発見である。そもそも大型住居は北海道、東北地方北部、関東地方東部に多く、その存在はこれら地域間の文化交流が住居構造に反映されたものと考えられることができる。しかし、大型住居そのものの性格はもとより、その起源と前期以降の大型住居との系統関係については未だに説明しきれていない。今のところ、共同作業施設や共同居住家屋、集会所などの機能が想定されている。

このほか、城次郎丸遺跡では中期五領ヶ台式期の可能性のある住居跡が検出されている。



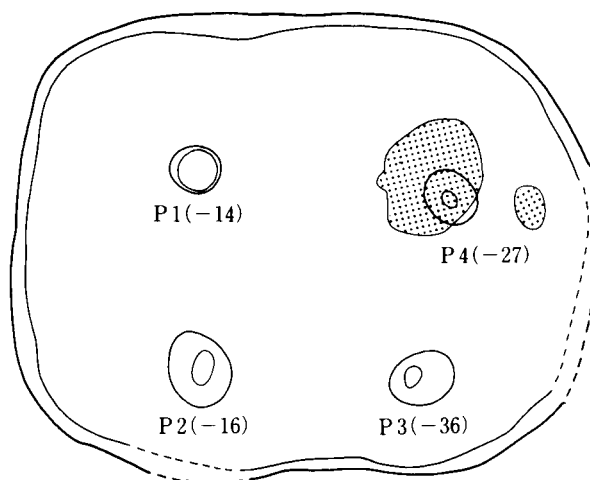
38. 大型住居跡の平面図（城山ノ作遺跡）

炉は片側の壁寄りに3基認められ、いずれも焼土が分布していた。このほか、P 6・8・13は焼土こそ確認されなかったものの、形態と位置関係から炉の可能性が指摘されている。P15・21は間仕切りであろうか。



39. 大型住居跡（城山ノ作遺跡）

小学校の体育館建て替え工事の事前調査で、既存の体育館の下から検出された。長軸は最大で推定16.7m前後、短軸は5.6mある。確認面から床までの深さは、約35cmである。



40. 中期前葉と考えられる住居跡（城次郎丸遺跡）

約2.8m×3.6mの隅丸長形状で、4本の主柱穴をもつ。柱穴上面に焼土（図中の網点部分）が堆積していたが、炉は確認されていない。五領ヶ台式土器を用いた土器片1点と深鉢片がわずかに出土した。

Ⅲ 前 期

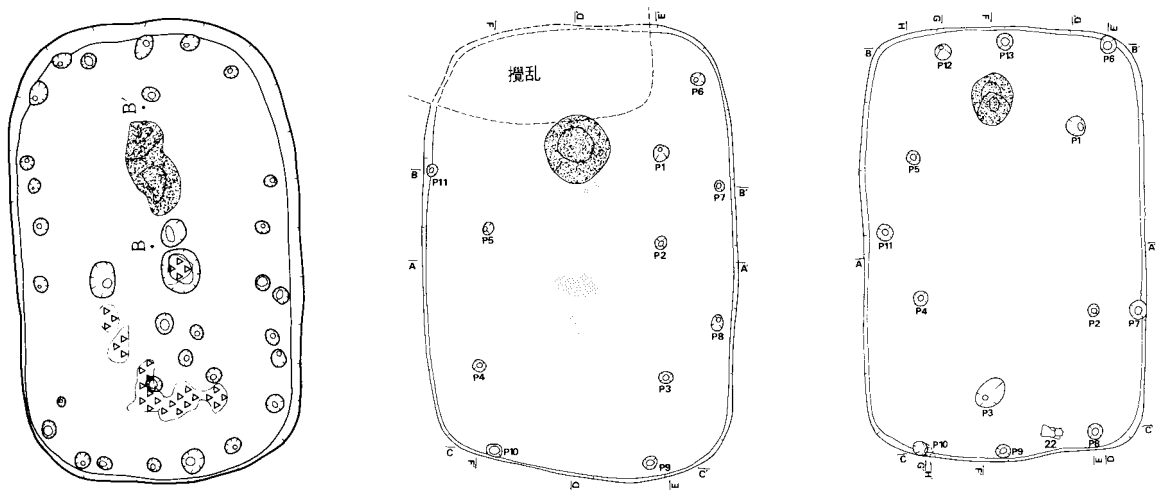
前期は今から7,000～5,500年前とされている。この時期の遺跡は前時期にくらべると減少する。とくに、前期前半の遺跡が少なく、その分布は印旛沼北岸に偏る傾向がある。複数の住居跡が検出された遺跡は、成田市子ノ神遺跡（花積下層式期）と幡谷萱橋遺跡（関山式期）、幡谷宮谷第1遺跡（同）、長田和田遺跡（関山式～黒浜式）、佐倉市竊木諏訪尾余遺跡（黒浜式期）くらいしかない。成田市幡谷の2遺跡は隣接しており、同一集落とみられる。このほか、成田市木の根拓美遺跡で二ツ木式期、佐倉市臼井屋敷跡遺跡で関山式期、成田市稲荷峯遺跡で黒浜式期の住居跡が各1軒検出されているほか、印西市武西千駄菰遺跡で関山式期の集落の存在が確実視されている。長田和田遺跡では、関山Ⅱ式から黒浜式古段階の住居が2～3軒を1単位としながら群に分かれて分布しており、2～3時期の居住期間が想定されている。なお、炉は無いものが多いにもかかわらず、屋外炉が検出されていない。このほか、成田市東峰御幸畑西遺跡で花積下層式期の集石土坑が検出され、土器片とともに凹石や磨石などの礫石器が出土している。

また、成田市久米貝塚は標高13mの河岸段丘に立地する関山式期の貝塚で、斜面部に小規模な地点貝塚が点在する。貝塚の詳細は不明であるが、ハマグリ、ハイガイ、オキシジミを中心に、マガキ、アカニシなどの貝で構成されている。



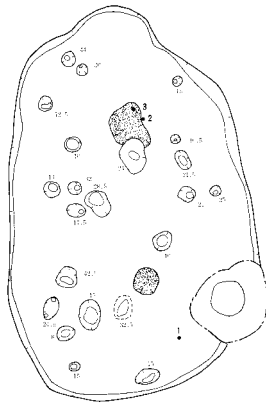
41. 前期中葉の住居跡（左：印西市泉北側第2遺跡 右2点：成田市幡谷萱橋遺跡）

おおむね長方形を呈する。泉北側第2遺跡例は3.9×5.7mの長方形で、床面の長軸に沿って2か所に地床炉が検出されたが、主柱穴は不明確であった。幡谷萱橋遺跡例は約5×6mの隅丸長方形で、壁柱穴がめぐる。主柱穴は4本で、地床炉をもつ。

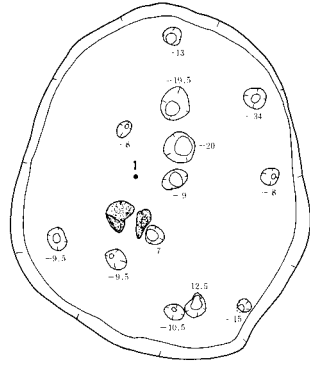


42. 前期前葉から中葉の住居跡（左から印西市泉北側第2遺跡 右2点：佐倉市竊木諏訪尾余遺跡）

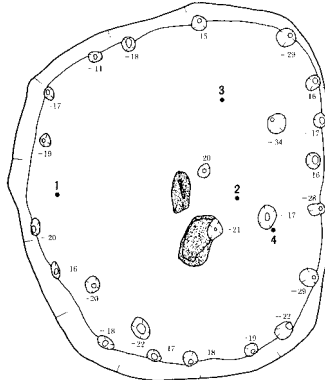
泉北側第2遺跡例は関山式期で、2.5×4.5mの隅丸長方形。主柱穴は検出されず、壁柱穴がめぐる。ハマグリを主体に、シオフキ、マガキなどの貝が堆積していた（図中の△印）。竊木諏訪尾余遺跡例は黒浜式期。4m×6mほどの長方形で、壁寄りに地床炉がある。うち1軒にはヤマトシジミを主体に、ハマグリ、アサリ、オキシジミなどの貝が堆積していた。



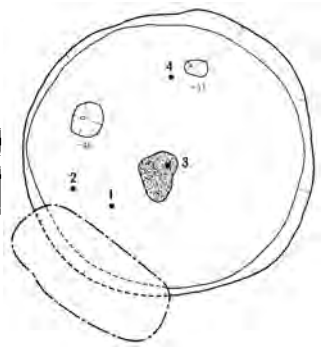
001号：3.6×5.48m



006住：3.1×3.9m



016住：3.77×4.48m



017号：径3.05m

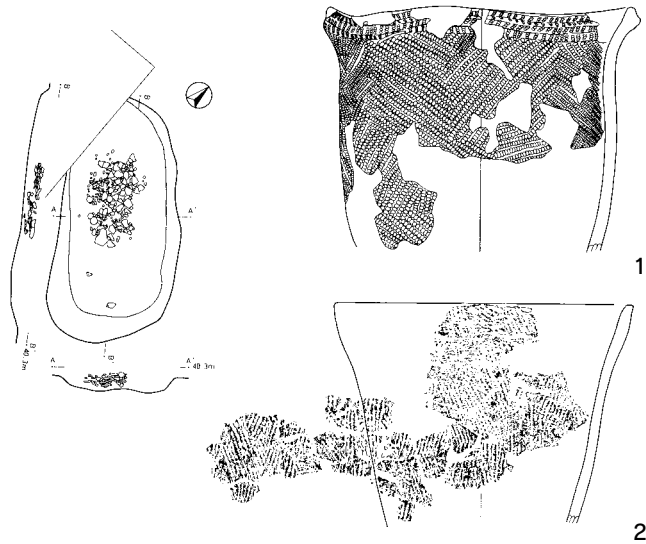
43. 前期初頭の住居跡（四街道市中山遺跡）

花積下層式期とみられる住居跡である。平面プランは不整形円形や不整楕円形をなし、規模は径4m前後である



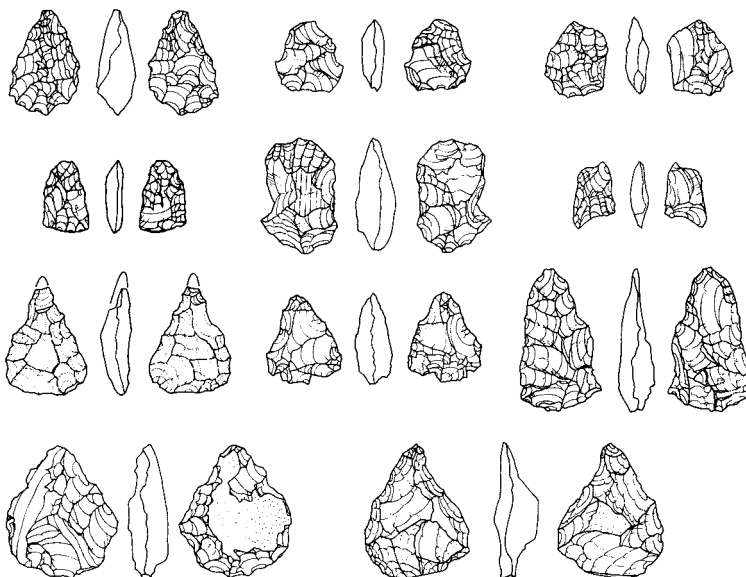
44. 石鏃製作跡（印西市一本桜南遺跡）

石鏃の製品とともに、未製品や製作に使われたとみられる礫などがまとまって出土した。この遺跡では、石鏃製作跡が11か所確認されているが、石材は94%がチャートである。いずれも前期のものと考えられる。



45. 前期初頭の集石土坑（成田市東峰御幸畑西遺跡）

長軸2.17m、短軸1.06mの土坑から、礫70点、石器6点などが出土した。土器は1が口径29.6cm、2が口径28cm。



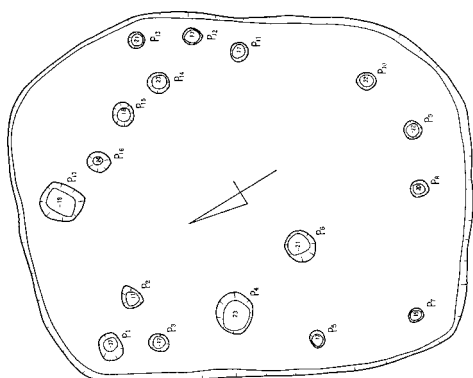
46. 石鏃の未製品（佐倉市向原遺跡）

左上：長さ約2.9cm、幅約1.9cm。

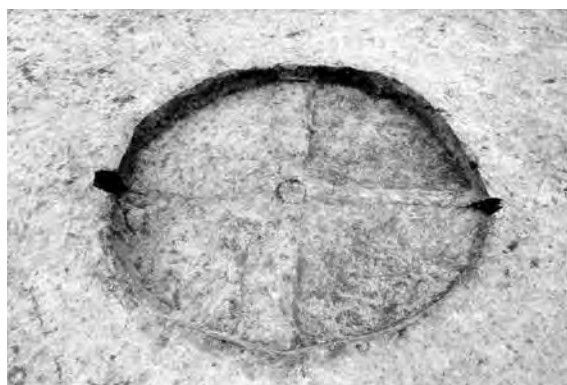
前期後半の浮島・諸磯式期になると遺跡数は爆発的に増え、分布は広範囲に及ぶ。四街道市木戸先遺跡、和良比遺跡、成田市南羽鳥中岫第1遺跡E地点、印西市復山谷遺跡、成田市加定地遺跡が代表的な遺跡である。前3遺跡は多数の墓穴を囲むように住居跡が分布する環状集落で、墓穴から垂飾や耳飾などの副葬品が出土している。後2遺跡も墓穴が存在し副葬品が出土しているものの、集落の全体像は不明である。興味深いのは、石製品の保有量や種類、浅鉢の完成度や出土状況など、副葬品の内容や出土状況に遺跡間で違いが認められることである。とくに、浅鉢は正位と逆位の両方の出土状態が認められるほか、なかには赤彩が施された優品が存在する。

この時期は西関東地方に分布の中心をもつ諸磯式土器と、東関東地方に分布の中心をもつ浮島式土器が各遺跡で混在して出土している。また、東北地方南部の大木5式や同6式の影響を受けた土器が佐倉市先崎西原遺跡や宮内井戸作遺跡、栄町竜角寺ニュータウン遺跡No.4地点、成田市日吉倉遺跡で、大木2b式の搬入品が四街道市木戸先遺跡で、関西地方の北白川下層Ⅱ式土器が白井市一本桜遺跡で出土するなど、遠隔地との交流を示す資料もみられる。

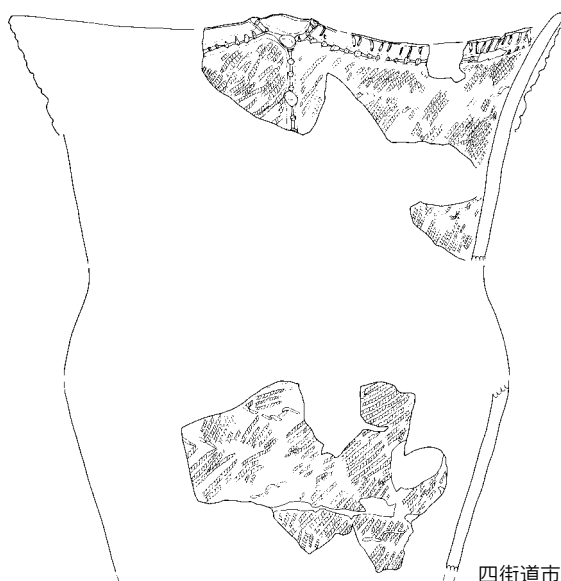
前期後葉の興津式期の住居跡とされているものが印西市船尾白幡で1軒検出されているが、後続する十三菩提式期を含めて明確に遺構が捉えられた例はほとんどない。十三菩提式期の土器片は広く点在しているが、佐倉市栗野Ⅰ遺跡では中部～西関東系の土器片が出土している。



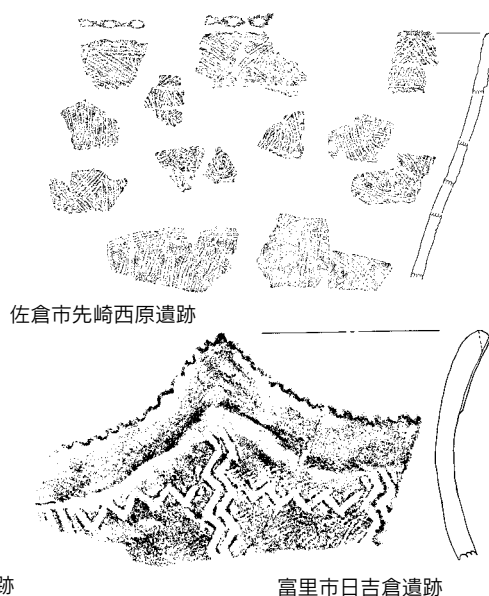
47. 興津式期の住居跡 (白井市一本桜遺跡)
4.2×5.3mの隅丸方形で炉をもたない。



48. 興津式期の住居跡 (印西市船尾白幡遺跡)



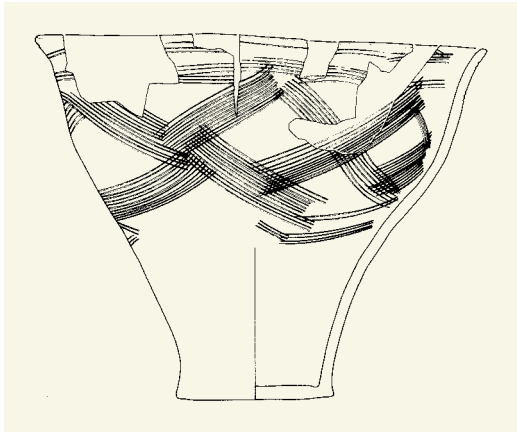
49. 他地域の土器
東北地方の大木式土器の影響を受けたものや、大木式土器そのものの搬入品がある。



佐倉市先崎西原遺跡

四街道市木戸先遺跡

富里市日吉倉遺跡



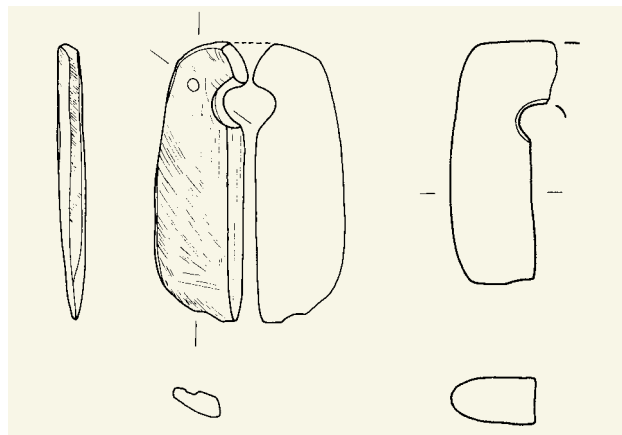
50. 興津式土器（本埜村五斗蒔遺跡）
口径約38cm、器高約32cm。



51. 前期末葉の土器（白井市河原子台遺跡）



52. 円形の袈状耳飾（上段左：印西市木苅峠遺跡、同右・下段：成田市木の根拓美遺跡）
前期後半に特徴的な耳飾で、土製品と石製品がある。土製品には、側面に刺突や沈線、タコの吸盤様の粘土瘤による文様を施すものがある。石製品は滑石製や蛇紋岩製、瑪瑙製がある。写真上段左は瑪瑙製で最大幅約4cm、同右は土製品で長径5.3cm、短径4.5cm、下段は石製の未製品で径約2cm。



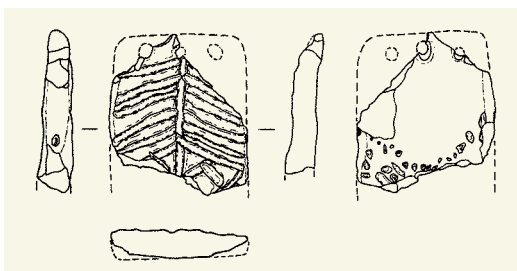
53. 縦長の袈状耳飾（左：成田市吉倉白ヶ峰遺跡、右：酒々井町墨新山遺跡）
左は石製で長さ約6.5cm、右は土製で長さ約5cm。



54. 有孔磨製石斧（白井市一本桜遺跡）
穿孔が施された磨製石斧で、ともに刃部に使用痕が認められる。左は長さ7cm、幅1.8cm、厚さ4mmで緑色片岩製、右は同じく5.2cm、3.5cm、9mmで蛇紋岩製。



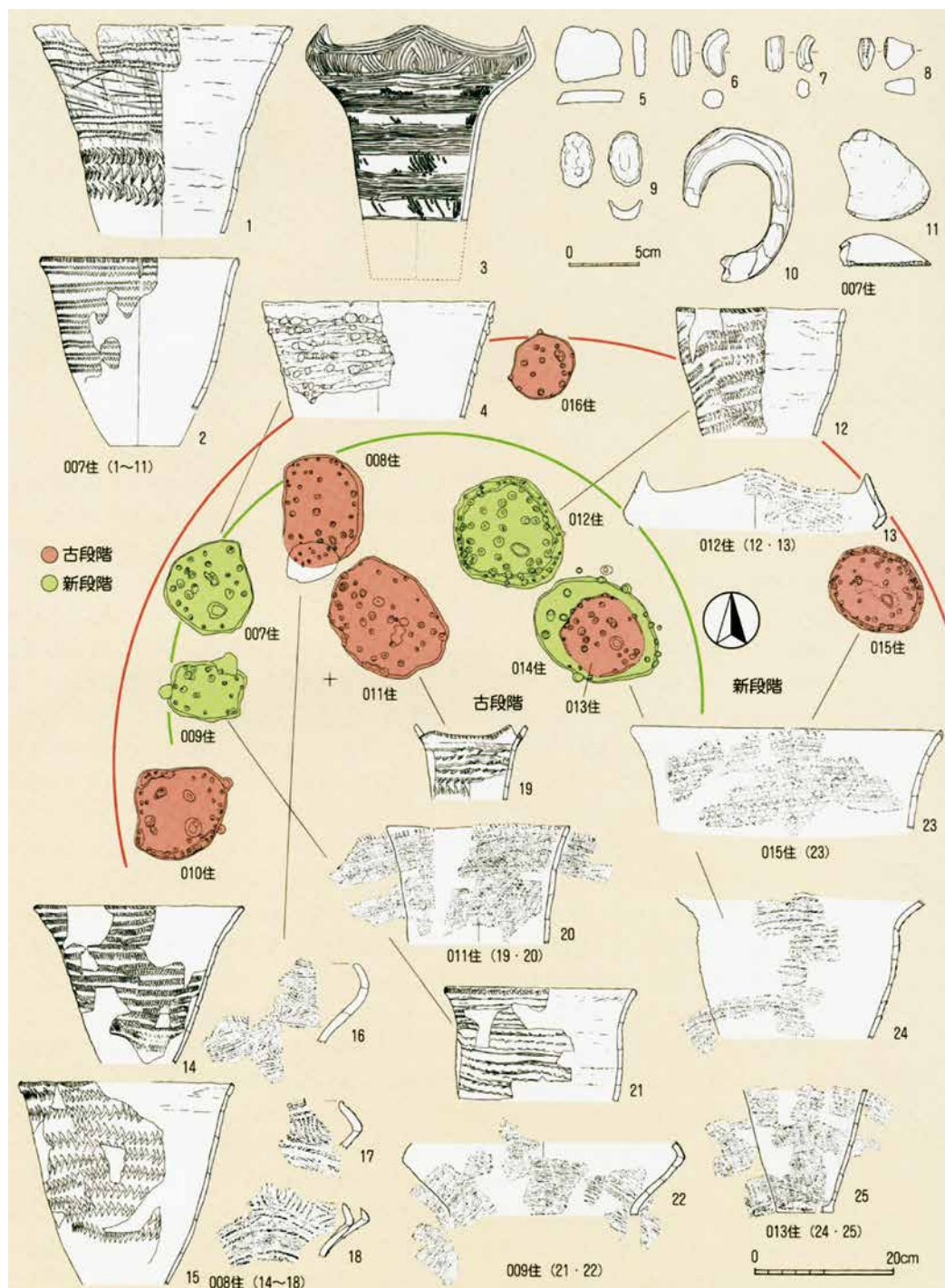
55. 前期の土偶（白井市一本桜遺跡）
付近で多く出土している前期の繊維土器に伴うものとみられる板状土偶。全体に丸みを帯び、研磨されている。肩の部分と胴部中央に円形の窪みがある。長さ8.6cm、最大幅4.3cm、厚さ2.5cm。



56. 有孔板状土製品（佐倉市先崎西原遺跡）
表面に綾杉状の沈線文、裏面に刺突文を施す。胎土に少量の繊維を含むことから、早期野島式期か前期黒浜式期のものと考えられる。最大長4.3cm、最大幅3.6cm、厚さ0.8cm。

Ⅲ-5 和良比遺跡（四街道市）

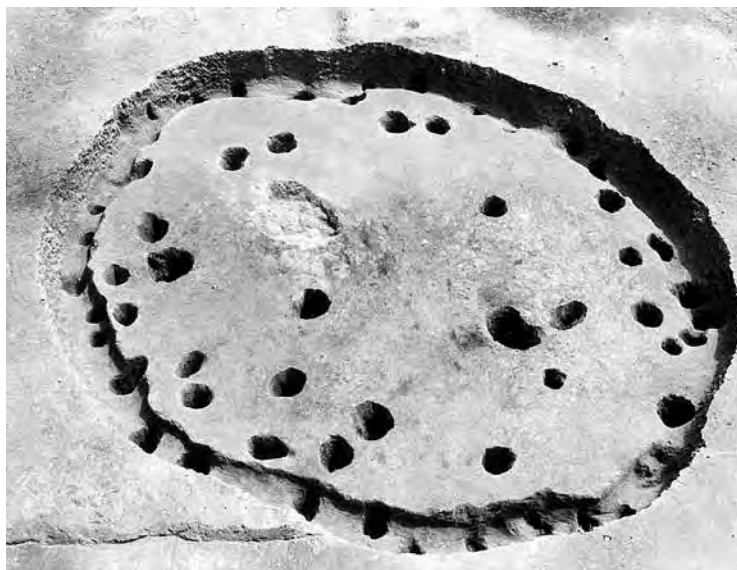
遺跡は四街道市の西端、小名木川最上流域に形成された支谷の最奥部に位置する。標高は約30mで、比較的平坦な台地の220,000㎡を調査した。検出された遺構は早期から中期にわたるもので、主に前期後半の集落が中心である。住居跡の時期ごとの内訳は、早期撚糸文～沈線文期1軒、条痕文（鵜ヶ島台式～茅山下層式）期3軒、前期（浮島Ⅱ～Ⅲ、諸磯b式中～新段階）10軒、中期加曾利E式期4軒、不明2軒である。前期の集落は、浮島Ⅱ式後半＝諸磯b式中段階の古段階と、浮島Ⅲ式＝諸磯b式新段階の大きく2段階の変遷がたどれる。このほか、炉はないものの柱穴状の穴をもつことから住居跡の可能性のあるものとして、小竪穴が2基存在す



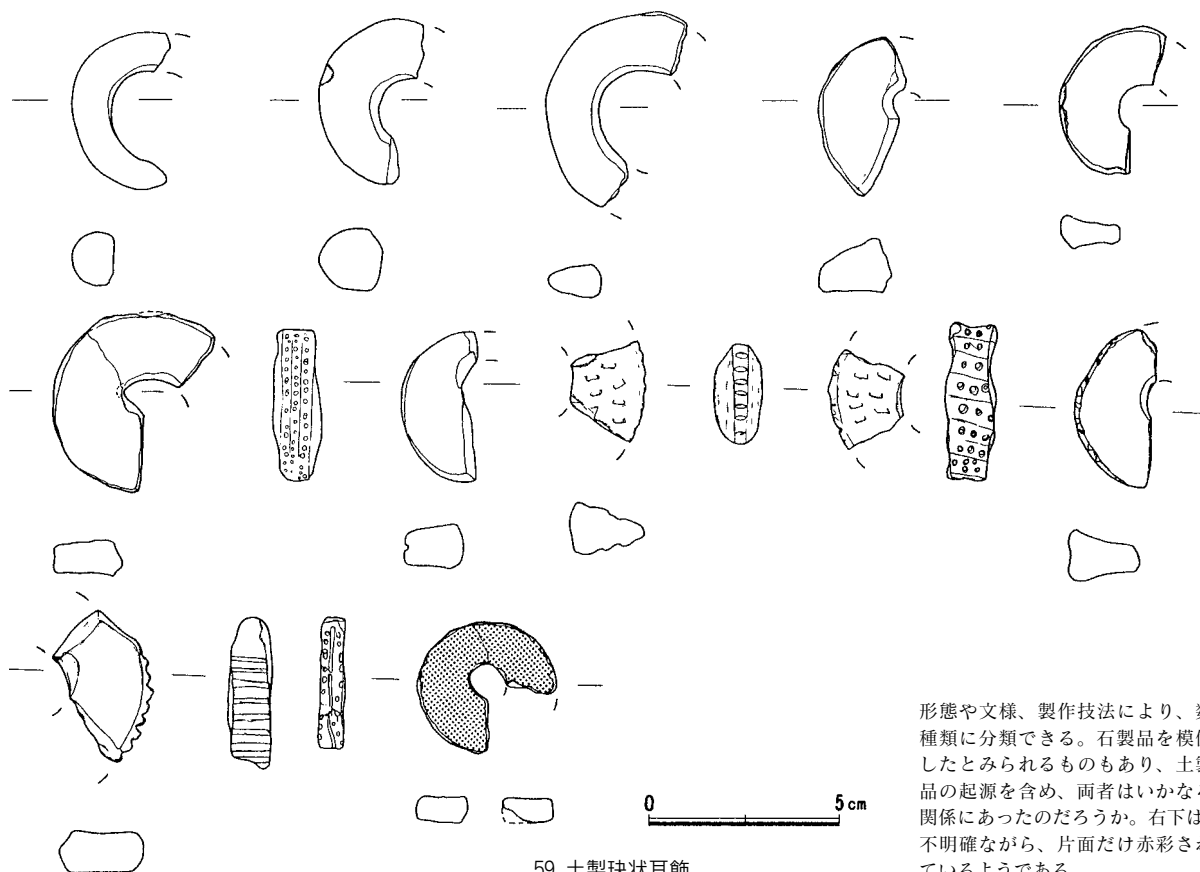
57. 和良比遺跡前期後半の住居と出土遺物

る。一つは中期の土器（阿玉台式）が中心に出土しており、一つは前期（浮島式）の小破片がわずかに出土している。

出土した土器は総数5万点を超し、早期から晩期までのあらゆる時期の土器が認められるが、そのうち半分が前期後半のものである。なかには、関東地方西部を中心に分布する早期末葉の土器（下吉井式土器）もある。自然遺物には、前期の2軒の住居跡からマガキを主体とする貝ブロックが出土し、そのうちの1軒からカキ素材の貝輪とハマグリ素材の貝刃が出土した。このほか、土製玦状耳飾57点、焼成粘土塊23点、石製垂飾1点などが出土している。同時期の環状集落で約3km西に位置する木戸先遺跡や根本名川水系の成田市南羽鳥中岫第1遺跡E地点とくらべると、石製垂飾品の保有量がきわめて少ない一方で、土製玦状耳飾が極端に多い点特徴的である。



58. 前期後半の住居跡
3.6×4.4mの楕円形を呈する。中央部の床上4～10cmに、厚さ5～20cmのマガキ主体の貝層が堆積していた。浮島Ⅲ式＝諸磯b式新段階。



59. 土製玦状耳飾

形態や文様、製作技法により、数種類に分類できる。石製品を模倣したとみられるものもあり、土製品の起源を含め、両者はいかなる関係にあったのだろうか。右下は、不明確ながら、片面だけ赤彩されているようである。

Ⅲ-6 木戸先遺跡（四街道市）

遺跡は四街道市の南端、鹿島川から入り込む支谷最奥部の標高約30mの台地上に立地しており、東京湾側と太平洋側との分水界に位置する。当初、遺跡の範囲は行政的には千葉市に属していたが、一部が四街道市に編入されたことにより、結果的には千葉市と四街道市にまたがる遺跡となった。遺跡の内容は、前期後半、浮島・諸磯式期を中心とする住居跡と墓坑で構成される典型的な環状集落である。住居の時期別の内訳は、千葉市側で早期（撚糸文期）3軒、前期8軒（黒浜式期2軒、諸磯a式期4軒、諸磯b式期2軒）、四街道市側で前期（諸磯a～b式期）8軒である。四街道市側では12,153㎡の調査がおこなわれ、住居跡とともに570基もの墓穴とみられる土坑が検出された。そのうち、約200基が住居跡に囲まれた径40mほどの範囲にいくつかの群を構成しながら分布している。

住居の形状は方形基調で、不整形や隅丸長方形のものがある。規模は一辺が2～3mの小型のものから、長軸約9m、短軸約6mの大型のものまである。しかし、小型の2軒は柱穴と炉がないことから、住居とは異なる性格の遺構であった可能性もある。しかも、分布もこの2軒のみが環状集落の外側に大きくはみ出ていることも示唆的である。住居跡のなかには、土器とともに貝が廃棄されたものもある。貝はハマグリを主体に、マガキ、ヤマトシジミ、シオフキ、ハイガイなどがある。また、貝に混ざってイノシシの歯やタイ類の歯、ヘビの椎骨が含まれていた。

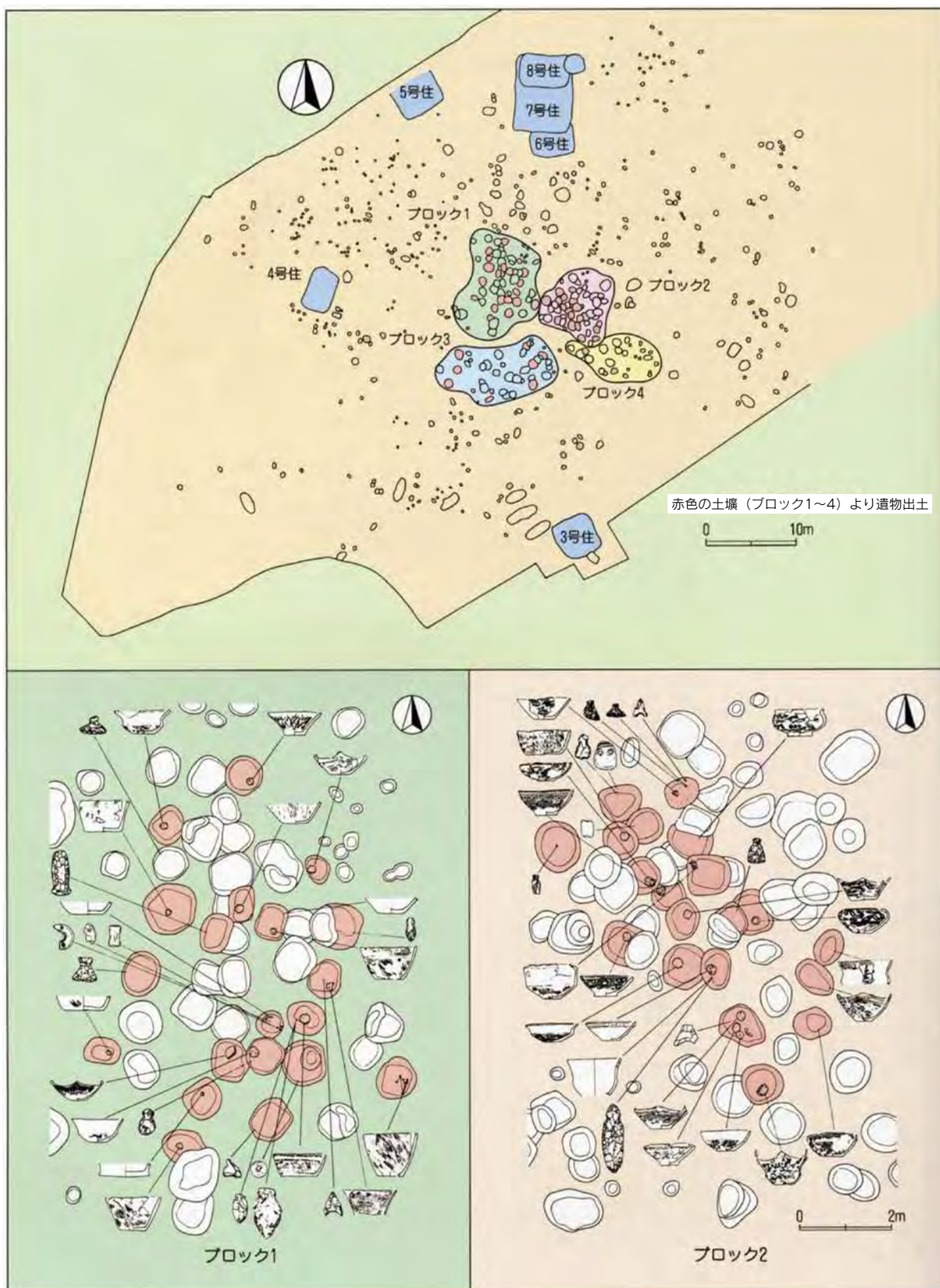
墓坑の形態は円形のもが主体をなし、楕円形や五角形をなすものもある。また、底面に段をもつものもある。副葬品として、浅鉢や石匙に代表される石器、管玉や玦状耳飾などの石製装身具類が出土した。おもな石製品の数に石匙が16点、玉類を含む石製垂飾が11点、石製玦状耳飾が2点である。石製玦状耳飾は同じ土坑から出土したもので、最終的には2点とも垂飾に再加工されている。石材の内訳は、石匙はチャート9点、安山岩3点、黒曜石2点、ホルンフェルスと凝灰岩各1点、石製垂飾は蛇紋岩8点、凝灰岩・滑石・琥珀各1点となり、器種によって石材が異なっている。このほか、包含層中より石製玦状耳飾2点、玉類5点が出土している。なお、土製玦状耳飾は破片が3点のみで、石製品にくらべると非常に少ない。

また、遺跡から出土した土器のなかには、東北地方や東海地方以西からの搬入品（それぞれ大木2b式・北白川下層式）がある。



60. 獣面把手（諸磯b式土器）

前期後半の諸磯式土器には、しばしばイノシシに似た顔を表現した把手や突起が付される。キャリパー状の口縁部を飾るもので、目・鼻・口が表現されている。



61. 遺跡全体図 (1/600) と土坑墓群の拡大 (1/120)



62. 墓坑からの副葬品出土状況（土器） 浅鉢はほとんどが正位の状態出土した。



63. 墓坑出土の副葬品（土器）

前期中葉（黒浜式）から後葉（浮島式、諸磯式）の土器が出土していることから、墓域はおおむねこの期間に営まれていたと考えられる。
後列右から2番目の土器：器高約12cm、口径約30cm。諸磯a式。



64. 墓坑出土の石製品（垂飾・玉類）

当初、玦状耳飾として作られたものが、垂飾に再加工されたものが2点同じ墓坑から出土した。左上：長さ3.1cm、幅1.7cm、重量14.8g。左下：長さ4.1cm、幅3.3cm、重量16.1g。ともに蛇紋岩製。



65. 墓坑出土の石製品（石匙）

石匙は携帯用のナイフのようなもので、小さなつまみが作り出されている。かたちは横長のものと縦長のものがある。大きさは大小あるが、小型のものは非実用的なものとも考えられる。左上は旧石器時代の槍先形尖頭器を再利用したもの。長さ10cm、幅3.1cm、重量35.8g。安山岩製。

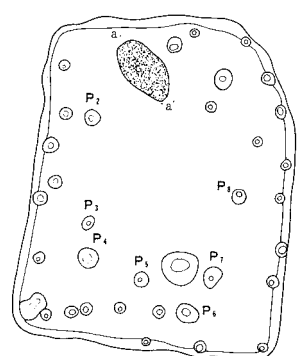
Ⅲ-7 長田和田遺跡（成田市）

遺跡は成田市の東部、根本名川の支流である取香川右岸の標高約40mの台地上に立地しており、同一台地上には中期後葉の集落である長田雉子ヶ原遺跡と長田香花田遺跡が隣接している。本遺跡は縄文時代前期中葉を中心とする集落であるが、早期後半の子母口式期、前期後半の浮島式期の住居跡も存在する。7,000㎡の調査範囲で検出された住居跡の内訳は、早期子母口式期が2軒、前期関山式期が7軒、黒浜式期が7軒、浮島式期が1軒、前期関山式～浮島式期のいずれに属するものか不明なものが5軒の計22軒である。その他、ほぼ前期に属するとみられる土坑が70基検出されている。

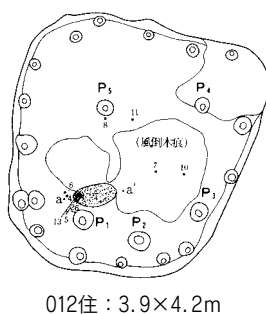
集落形態は調査範囲が限られているため不明確であるが、住居跡は東西、中央部の3群に数軒ずつの群を構成しながら分布しており、なおかつ、その空隙に土坑が散在するというおおそ環状集落とはいえない。前期の住居は2～3棟を1単位とする群が2～3時期にわたって営まれたものと考えられ、小規模な集落構成と言える。このように、比較的短期間で小規模な集落構成をなすことから、周辺に母村が別にあるのではないかとの見方がある。そういう意味では、同じ取香川の約1.5km上流にある久米貝塚との関係が注目される。

住居形態は関山式期の隅丸長方形のものから、黒浜式期の不整形のものへという変化が認められる。黒浜式期の住居跡には、長軸約6m、短軸約4mの比較的大型のものもある。

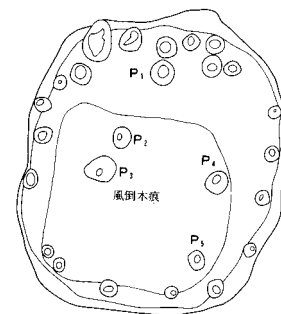
出土遺物は全体的に少ないが、特殊なものとして黒浜式期の住居跡からチャート製の極小の石匙が1点出土している。



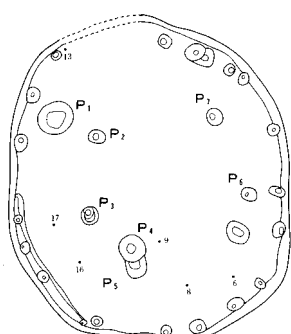
005住：3.0～5.4×4.4m



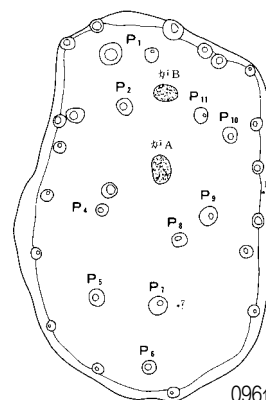
012住：3.9×4.2m



039住：4.2×4.8m

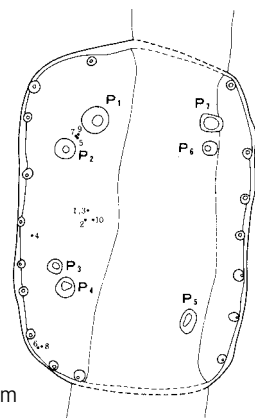


090住：4.6×5.3m

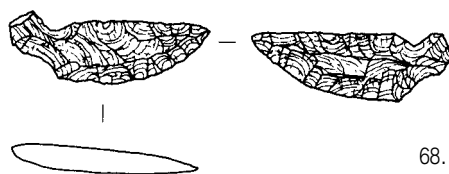


096住：4.2×6.1m

67. 黒浜式期の住居跡



116住：3.8×5.8m



68. 極小石匙

残存長2.6cm、最大幅0.9cm、厚さ0.6cm。

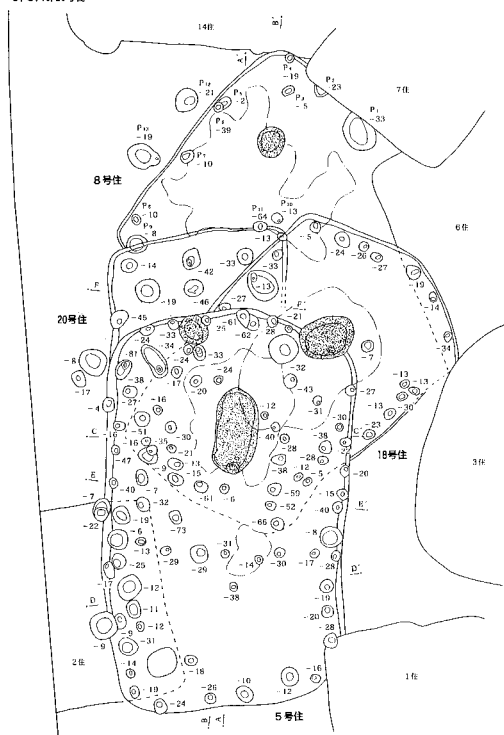
Ⅲ-8 子ノ神遺跡（成田市）

遺跡は成田市の南部、根木名川の上流域右岸の台地上に立地している。595㎡の調査範囲から、前期初頭、花積下層式期の住居跡が16軒（うち1軒は炉跡のみ）検出された。成田市内に限らず、印旛沼沿岸域においても当該期の住居が調査された例がないうえ、集落形態をも推測できる例として貴重である。

各住居跡は重複しながらも数軒単位のまとまりをなし、環状、あるいは弧状集落の一部を構成するものと考えられる。住居形態は、長方形で多数の壁柱穴を有するものが主流である。なかには、4.8m×7.8m以上の大型のものもある。このほか、炉も柱穴ももたない不整形なもの、円形に近いもの、小型円形とみられるものがあるが、それらは形態や占地場所、東海系土器（木島式の模倣品）の出土から判断して、長方形の住居とは異なる系統のものである可能性が指摘されている。炉の形態にも地床炉や土器片埋設炉のほか、土器を埋設した可能性がある穴も確認されている。土器片埋設炉には、土器片を衝立のように重ねて並べたものがある。土器片を幾重にも並べる形態は、中期後葉、加曽利E式期に一般化するものであるが、本遺跡の土器片埋設炉がその起源になるものか興味深いところである。

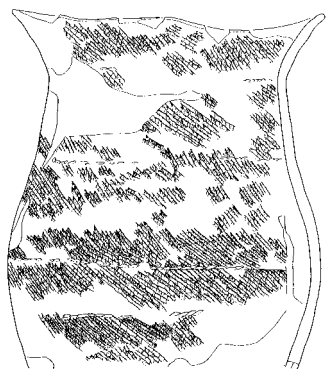
出土遺物のうち、石鏃を中心とする石器の製作の際に生じた剥片類が大量であることから、石鏃製作が盛んであったことがうかがえる。石材はおもにチャートで、そのほか黒曜石、安山岩、瑪瑙、頁岩がある。また、装飾品である蛇紋岩製の玉が1点出土している。

5, 8, 18, 20号住



69. 大型住居跡（5号住）と出土土器

1は口径23cm、残存高26cmの大型の深鉢。
2は推定口径22.7cm。隆帯と刺突、撚紐圧痕で文様を施す。

70. 蛇紋岩製の玉
径約1.4cm、厚さ約8mm。

71. 大型住居跡の土器片埋設炉

0.85m×1.7mの規模であるが、4回分の掘り方が重複してできた最終的な姿である。土器片は同じ土器の破片を、内面を火床側に向けて幾重にも重ねて立て並べている。

Ⅲ-9 南羽鳥中岫第1遺跡E地点（成田市）

遺跡は成田市の北西部、根本名川の支流である十日川によって開析された標高約30mの台地上に立地している。南羽鳥遺跡群内では早期から晩期の遺物がみられるが、主体をなすのは前期中葉から後葉、黒浜式から浮島・諸磯式期である。南羽鳥中岫第1遺跡では、5,650㎡の調査範囲から当該期の住居跡が29軒検出されている。なかでも、同遺跡のE地点では当該期の住居跡が19軒検出されていることから、拠点的な集落であったと考えられる。住居跡の時期ごとの内訳は、可能性があるものを含めて黒浜式期6軒、浮島Ⅰ～Ⅱ式期10軒、不明3軒である。本遺跡の特徴は、これらの住居跡が環状に展開する内側の径35mの範囲に、推定250基もの墓穴群が密集する環状集落を呈することである。墓穴は黒浜式から興津式期まで継続的に造られたものと考えられるが、浮島式期に盛行するようである。墓穴の約7割が円形の土坑で占められており、そのほかに楕円形や長方形を呈するもの、底面に段を有するものや柱穴があるものがある。



72. 遺跡全景



73. 赤彩浅鉢の出土状況

底面に段差をもつ推定規模0.8×1.3m、深さ約0.5mの土坑から、正位状態で出土した。口縁部の内外面に赤彩が施されている。作りが薄手で、胎土も精練された優品。口径約17cm、器高約12cm。



74. 石製垂飾の出土状況

底面に段差をもつ約0.9×1.0m、深さ約0.5mの土坑の下層から、まとまって3点出土した。緑色が蛇紋岩製の管玉で、長さ4.3cm、幅2.2cm、25.7g。赤色は琥珀製の垂飾である。

これらの墓穴からは、赤彩を施した浅鉢を含む土器類や石製・土製の玦状耳飾、石製の玉類、石匙といった副葬品が出土している。遺跡全体での出土量の内訳は、石匙が7点、石製玦状耳飾が3点、土製玦状耳飾が13点、石製垂飾（玉類を含む）4点である。なお、琥珀製の玉は、銚子産の琥珀が製品の状態で搬入された可能性がある。このほか、副葬品として注目されるのは、人の顔をかたどった「人頭形土製品」である。その表情はまさに死者を映したものとみられ、集落の特定の人間の墓に納められたものと考えられている。



75. 墓穴出土の人頭形土製品（国指定重要文化財）

1.14m×0.83m、深さ0.3mの墓穴の底面近くから出土した。横臥屈葬されたとみられる被葬者の頭に向けて置かれたものと考えられる。土器と同じように作られているが開口部に4箇所の小穴があることから、紐を通して蓋を被せるか、何かに固定させるかして使われたものと考えられる。高さ15.1cm、最大幅13.5cm、開口部径8cmで、前期後半（諸磯式期）のものとみられる。



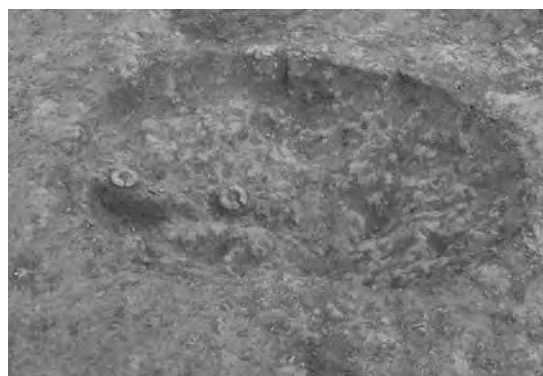
76. 墓穴に納められた土器

後列は底部を欠損した深鉢、前列は赤彩浅鉢。赤彩浅鉢は約5km離れた成田市加定地遺跡では7基の土坑から出土しており、そのうちの4点が赤彩浅鉢であることから、両遺跡の関係が注目される。後列左は口径約20cm、残存高約27cmの深鉢。前列右は口径約13cm、器高約10cmの赤彩浅鉢で、土坑の有段部から正位の状態で出土した。



77. 群集する墓穴群

黒浜式から興津式まで間段なく営まれる。時期によって分布域が異なるほか、いくつかのグループに分けることができる。しかし、墓穴の主体を占める円形土坑が分布しない空白域も認められることから、その場の機能が問題視されるとともに、占地に対する規制の強さをうかがうことができる。



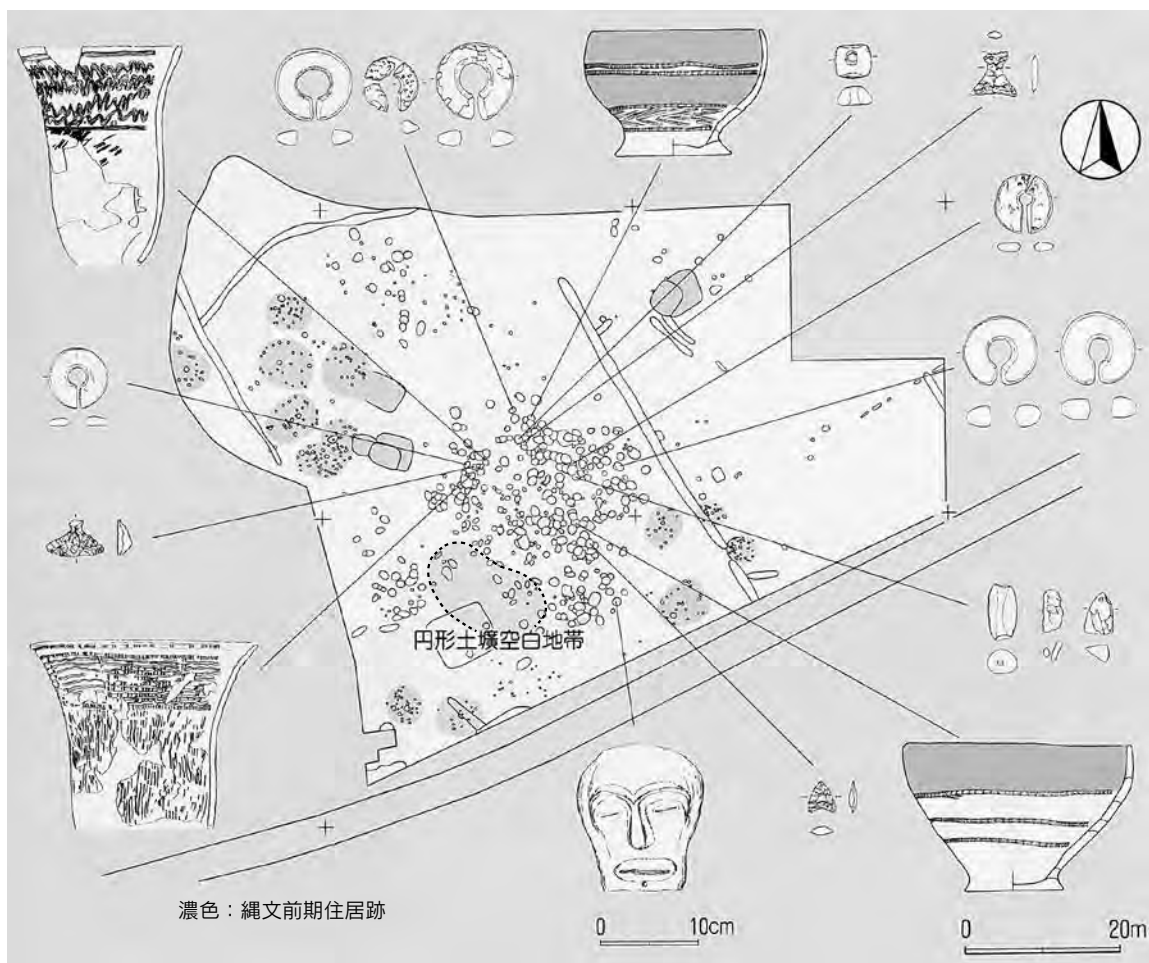
78. 土製珧状耳飾の出土状況①

約0.7×1.0m、深さ約0.2mの土坑から、高さ5.5cm、幅5.8cmと同じく推定5.8cm、5.9cmのものが一対と、その中間から同じく推定4.2cm、推定4.2cmのものが出土した。



79. 土製珧状耳飾の出土状況②

約1.0×1.5m、深さ0.3mの土坑から、高さ5.2cm、幅5.7cm、重さ42.8gと同じく5.5cm、5.7cm、46gの大型で丁寧な作りのものが一対で出土した。



80. 遺構配置 (1/1000) および土坑出土遺物



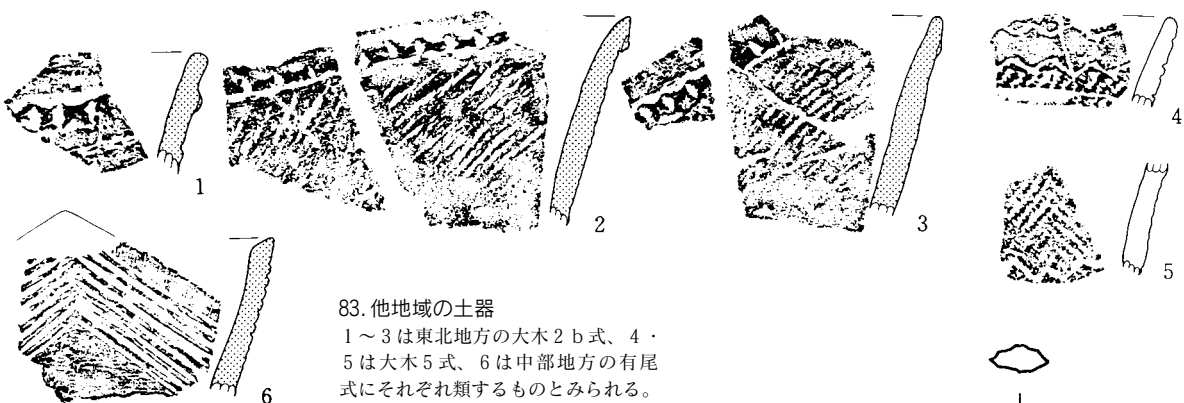
81. 住居内に堆積した貝

住居の炉周辺の土層から、ハマグリを主体とする貝層が検出された。住居は2.0×7.0mの隅丸長方形で、最低3回の建て替えがおこなわれたとみられる。黒浜式期。



82. 重複しあう住居跡

深い方は約3.5×4.5m、浅い方は約5.0×5.4mのそれぞれ隅丸長方形。深い方にはハマグリを主体とする貝が堆積していた。ともに浮島式期。

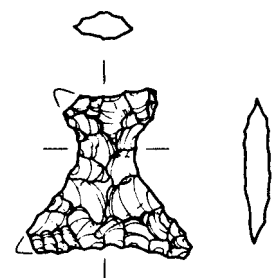


83. 他地域の土器

1～3は東北地方の大木2b式、4・5は大木5式、6は中部地方の有尾式にそれぞれ類するものとみられる。

84. 墓穴出土の石匙

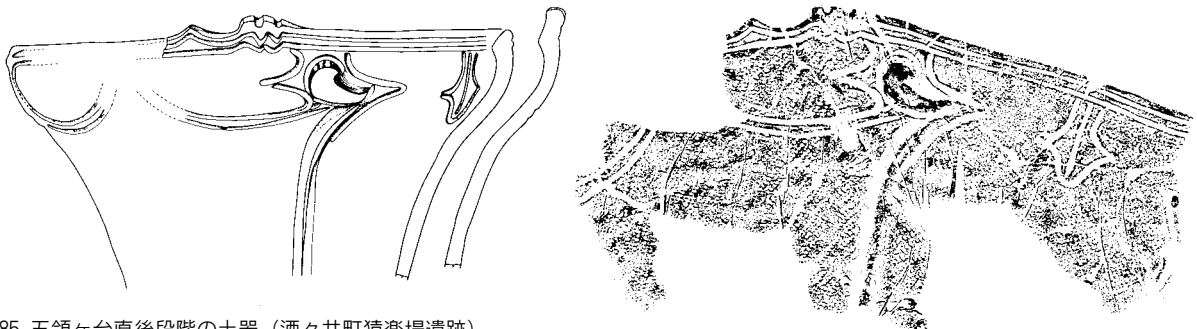
長さ2.3cm、幅（推定）2.5cm、重量1.3gの小型の石匙で、黒曜石製。



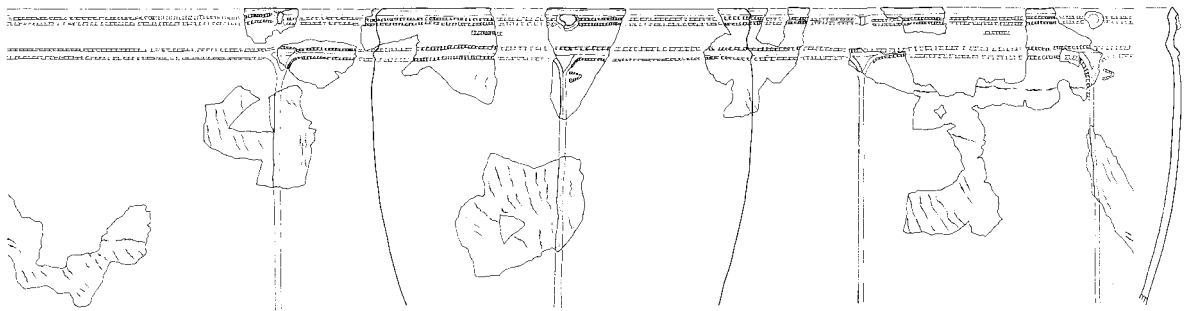
IV 中 期

中期は今から5,500～4,500年前とされている。この時期になると、遺跡数は急増する。五領ヶ台式～阿玉台式期を前半期、加曽利E式期を後半期とすると、遺跡が急増するのは加曽利E式期になってからであり、前半期は少ない。

前半期の遺跡では、明確に集落として捉えることができる遺跡は少ない。とくに、五領ヶ台式期の集落は不明確で、佐倉市城次郎丸遺跡で当該期とみられる住居跡が1軒検出されているくらいである。同石川奥行台遺跡や同大林遺跡、酒々井町猿楽場遺跡などで五領ヶ台式直後段階の土器が出土しているものの、遺構は確認されていない。四街道市笹目沢Ⅰ遺跡では、五領ヶ台式を含む前後の時期の土器が比較的多く出土しているものの、明確な当該期の遺構は確認されていない。成田市村田居山遺跡では、五領ヶ台式～阿玉台Ⅰa式の完形に近い土器や大型の土器片が内側を向いて出土する土坑が3基検出されており、墓穴と推測されている。



85. 五領ヶ台式直後段階の土器（酒々井町猿楽場遺跡）
縄文地に沈線文と隆帯文を施す。口径約27cm。



86. 阿玉台Ⅰa式土器（佐倉市大林遺跡）
推定口径約42cm、残存高34cm。

阿玉台式期も集落と明確に捉えられる遺跡は少なく、とくに阿玉台Ⅱ式期までの前半期となると住居跡そのものの検出は散発的で、四街道市相ノ谷遺跡や成田市東和田遺跡などで住居跡が検出されている程度である。阿玉台Ⅲ～Ⅳ式期の後半期になると、四街道市南作遺跡でこの時期に限定された集落のほぼ全体が調査されている。ここからは印旛地域では珍しい当該期の貝がわずかに出土しているほか、石器製作の際に生じた黒曜石の破片が多く出土している。黒曜石は近くの上野遺跡でも多く出土しており、石器製作跡が想定されている。時期は不明であるが、おおむね中期前葉、五領ヶ台式～阿玉台式前半期と考えられ、両遺跡における中期前葉から中葉における黒曜石のあり方が興味深い。成田市野毛平泉台遺跡では在地の土器とともに異系統の土器や土器片錘、石斧、石棒が比較的まとまって出土した土坑があり、何らかの意図をうかがわせる。



87. 五領ヶ台式土器（左：佐倉市栗野Ⅱ遺跡 右：成田市村田居山遺跡）

佐倉市栗野遺跡例は推定口径約16cm、推定器高約20cm。村田居山遺跡例は、左が口径約26cm、右が口径約12cm、高さ約13cm。



88. 阿玉台式期の住居跡（印西市船尾白幡遺跡）

直径3.02～3.36mのほぼ円形を呈する。深さ30～40cm程度の柱穴が3本あるのみで、炉は検出されていない。

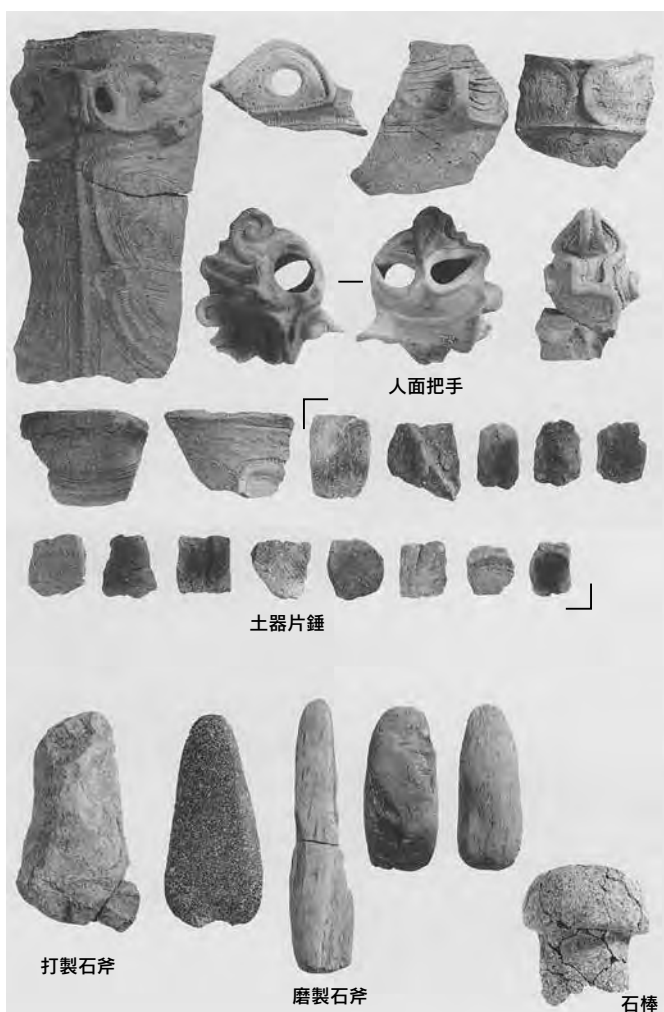


89. 阿玉台式土器（四街道市堂ノ後遺跡）

底部を欠損する。胴部に隆帯で蕨手状のモチーフを施す。

90. 阿玉台式期の土坑出土遺物（成田市野毛平泉台遺跡）

1つの土坑から阿玉台式と勝坂系の土器、土器片錘13点、打製石斧1点、磨製石斧4点、石棒1点が出土した。勝坂系の土器には、裏面に人面表現をした中空の把手がある。

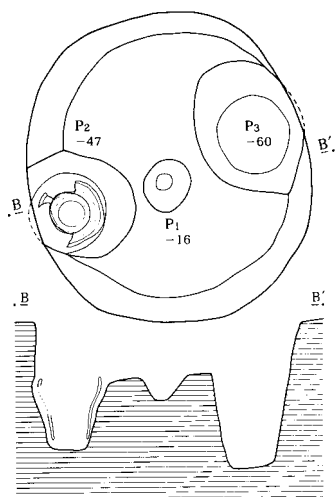


加曽利E式期に入ると環状集落、あるいはそれに類する大規模な集落が出現する。前半期では、印旛沼北岸の成田市稲荷山遺跡、久井崎Ⅱ遺跡、栄町麻生広ノ台遺跡、同南岸の佐倉市神門房下遺跡、吉見稲荷山遺跡、下勝田殿台東遺跡、坂戸念仏塚西遺跡、生谷松山遺跡などが挙げられる。これらの遺跡では阿玉台式期から集落の形成が始まるが、おおむね加曽利EⅡ式期を境に集落規模が縮小し、加曽利EⅢ式期のうちに集落は終焉を迎える傾向にある。前半期の遺跡は遺構数に比例して遺物の量も多く、土器や石製品にも特殊なものがある。

しかし、東京湾岸の馬蹄形貝塚に代表される大規模な貝塚を伴う遺跡と違い、貝塚の形成は小規模かつ部分的である。印旛沼周辺では、利根川下流域の成田市北部から栄町に貝塚が点在しているほか、印旛沼南岸で小規模な貝の堆積が検出された遺跡がある。とりわけ、斜面貝層が形成されていた麻生広ノ台遺跡は本格的に調査がおこなわれた唯一の例であり、当時の自然環境や食料事情を知る上で重要な位置を占めている。このほか、根本名川左岸に位置する成田市宝田山ノ越貝塚に加曽利EⅡ式期を中心とする斜面貝層が形成されている。貝塚の詳細は不明であるが、ハマグリを主体に、サルボウ、マガキ、オキシジミなどが確認されている。



91. 加曽利E式前半期の拠点集落（佐倉市下勝田殿台東遺跡）
高崎川下流域の拠点集落である。約150㎡の調査範囲から、住居4軒、炉跡2基、小竪穴19基、土坑4基、掘立柱建物跡1棟を検出した。



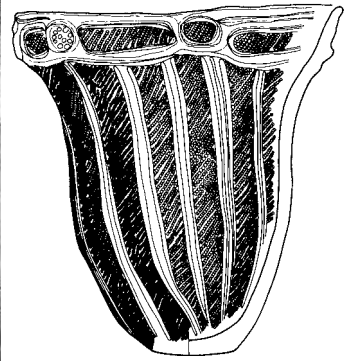
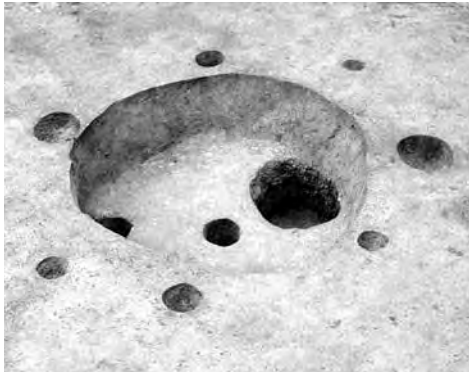
92. 土製耳飾（佐倉市下勝田殿台東遺跡）
渦巻状の沈線文を施している。加曽利E式期。



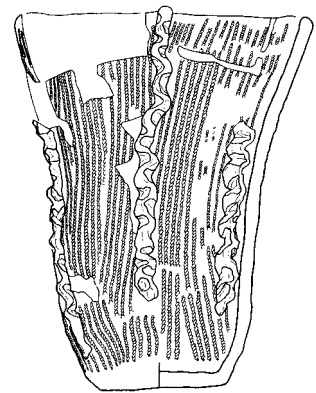
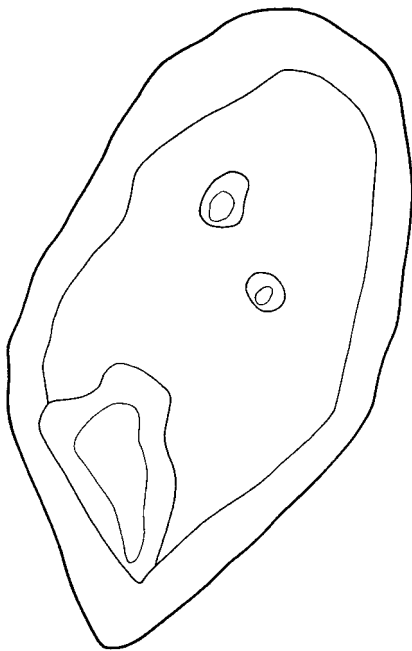
93. 土製耳飾
（佐倉市六崎外出遺跡）
残存高2.0cm、最大径2.6cm。加曽利E式期。



94. 土器が埋め込まれた小竪穴①（佐倉市坂戸念仏塚西遺跡）
推定口径41cm、残存高43cmの大型の深鉢。口縁部・頸部・胴部の各文様帯に、系統が異なる文様がはめ込まれた折衷土器。加曽利EⅡ式期。



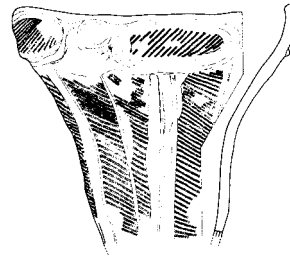
95. 土器が埋め込まれた小竪穴②（四街道市中山遺跡）
口径31cm、器高33cmの深鉢。加曽利EⅢ式期。



96. 異系統土器を埋め込んだ竪穴状遺構（印西市松崎Ⅵ遺跡）
1.3×2.4m、深さ30cmほどの炉跡とみられる竪穴状遺構（左）。在地の加曽利E式土器に加え、中部地方の曽利式の影響を受けた小型深鉢（右写真・図）が埋められていた。口径約17cm、器高約21cm。

加曽利E式後半期から後期初頭にかけては気候が冷涼化し、自然環境が大きく変わる時期に相当すると言われている。それまでの大規模な環状集落は崩壊し、集落は小規模・分散化する傾向がみられる。佐倉市池向遺跡や酒々井町墨遺跡群、成田市新山台遺跡、キサキ遺跡、馬洗城址は加曽利EⅢ～EⅣ式期、佐倉市江原台遺跡や栄町竜角寺ニュータウン遺跡NO.4地点、成田市加定地遺跡は加曽利EⅣ～称名寺式期に形成された集落としては広範囲に調査がおこなわれた遺跡であり、当該期の集落構造を知る上で好例といえる。池向遺跡では、主に信州産の黒曜石を素材とした石鏃製作跡が存在し、未製品を含めると約450点もの石鏃が出土している。一方で、打製石斧や石皿、磨石などの礫石器は40点弱と少ない。同一台地上に隣接する向原遺跡との関係が興味深い。鹿島川と高崎川の合流地点に近い佐倉市六崎貴舟台遺跡では、加曽利EⅣ式期の土坑にヤマトシジミの純貝層が堆積しており、周辺に汽水域が広がっていたことを示している。

当該期の住居や炉には特徴的な構造がみられ、住居には長楕円形（卵形）のものや壁に沿って溝（周溝）がめぐるもの、炉には深鉢を斜めに埋め込んだ「斜位土器埋設炉」に代表される、複構造の炉を設けたものがある。このほか、特徴的な遺構として、印西市馬込遺跡Ⅱの加曽利EⅣ式期の土坑では、凝固した貝ブロックが検出された覆土中層から上層で石器や土器が出土するのに対し、中層から下層に土器片錘が集中するという特異な遺物の出土状態が認められた。佐倉市生谷境堀遺跡では、土器片錘とその未製品とみられる磨滅した土器片が床面から出土した加曽利EⅣ式期の住居跡がある。



97. 斜位土器埋設炉と炉体土器（佐倉市寺崎一本松遺跡）
炉に埋め込まれた土器は、意図的に底部を欠いている。口径約13cm、残存高23cm。



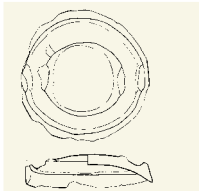
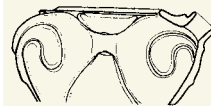
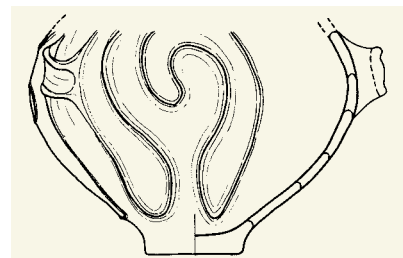
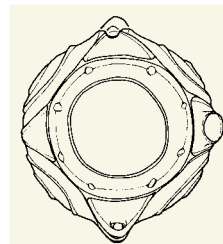
98. 他地域の影響を受けた土器（佐倉市寺崎一本松遺跡）
胴部の渦巻状の隆帯文に、東北地方の太木式の要素がうかがえる加曽利EⅢ式土器。口径約33cm、器高約38cm。



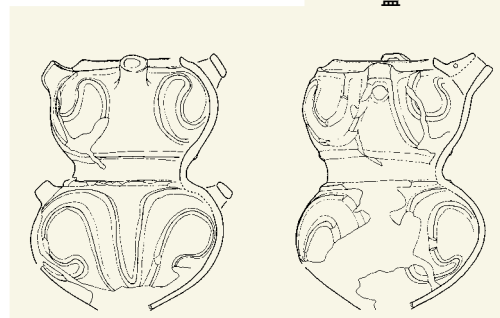
99. 加曽利EⅢ式土器（佐倉市寺崎一本松遺跡）
住居の床面に立った状態で出土した。胴部に大柄な渦巻状の文様が隆帯で描かれており、東北地方の太木式の影響がみられる。残存高52cmで、口縁部の大半と底部を欠く大型の土器。



100. 異系統の土器（佐倉市池向遺跡）
東北地方の太木9式に特徴的な文様が施されている。現存器高9.6cm、現存推定最大径33.6cm。



蓋



101. 鐙付注口土器（加曽利EⅣ式期）
瓢箪形で、口縁に鐙がめぐる。鐙に等間隔に穴が開けられたものと開けられないものがある。一般的には、儀式の際に使う酒造具、あるいは酒の容器と考えられている。佐倉市江原台遺跡では同じ住居跡の対称的な位置にある壁寄りの床面から2点（写真・図左上）出土した。写真の土器は口径約15cm、高さ約29cm、図左上の土器は胴部上半だけで、口径12cm。佐倉市生谷境堀遺跡例（図右上）は残存高約13cm。佐倉市六崎貴舟台遺跡例（図下）は鐙に穴が開けられていないもので、底部が欠損している。口径約8cm、残存高約20cm。なお、同じ土坑からは径約10cm、高さ約3cmの土製の蓋が出土している。



102. 貯蔵穴に投棄された貝（佐倉市宮内井戸作遺跡）
径約1.8m、深さ約1.3mの土坑の上層に、20cmほどの厚さで貝が堆積していた。東京湾で採られたとみられるハマグリやアサリ、シオフキなどのほか、九十九里方面で採られたであろうダンベイキサゴも含まれていた。加曽利E IV式期。



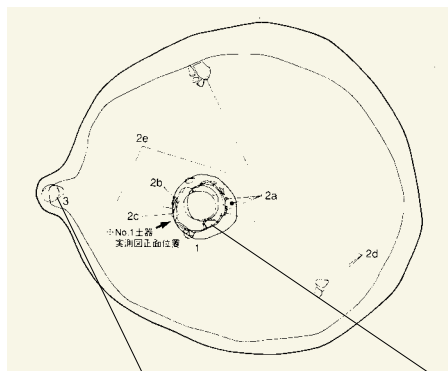
104. 石棒（印西市内）
石棒は男性器を模した石製品で、大きさは大小ある。写真は長さ1m以上の大型品。同様の大型品は、佐倉市向原遺跡で被熱・破砕したものが土坑から出土しており、残存長50cm、頭部径約13cmで、推定長1mとされている。



103. 加曽利E IV式土器（成田市キサキ遺跡）
写真左から、小型台付鉢。残存高約7cm。鏝付注口土器。口径8.6cm、器高25.4cm。舟形土製品。径5mmの円孔を施した把手が付く。全長約12cm、幅約5.5cm、器高約4cm。



105. 三角溝形土製品（佐倉市池向遺跡）
東北地方南部を中心に分布する祭祀用具。3面に縄文を施して沈線で区画している。中心に径7～10mmの穴が貫通している。高さ7.6cm、幅5.8cm、重さ222g。加曽利E IV式期。



106. 加曽利E IV式末～称名寺 I 式期の住居跡と出土土器（印西市船尾白幡遺跡）
径2.7mの円形で、一部に深小さな張り出しをもつ。埋甕炉とみられる施設があるが、焼土は確認されていない。土器は右が埋甕、左が張り出し部にあった深鉢の胴下部。

IV-10 南作遺跡（四街道市）

遺跡は四街道市の東端、鹿島川左岸の標高約30mの台地上に立地している。台地は北側に向かって先細りになり、痩せ尾根状を呈する。その台地の基部に中期中葉、阿玉台式後半期の集落が展開しているほか、中期後半、加曽利EⅢ式期の住居跡が1軒確認されていることから、断絶期間を挟んだ土地利用の形跡がうかがえる。検出された遺構の内訳は、住居跡25軒、フラスコ形土坑67基、土坑209基である。集落を構成する主な遺構は住居と貯蔵穴と考えられる土坑であり、長径160m、短径90mほどの長楕円形の範囲に分布している。しかも、住居の内側に貯蔵穴及び墓穴が分布している点で環状集落と同じ集落形態といえる。それとは別に、未調査区を挟んだやや離れた箇所にも住居と貯蔵穴がわずかに分布している。住居と貯蔵穴は、それぞれいくつかの群に分けることができるほか、貯蔵穴群も線対称になるような分布が特徴的である。各遺構から出土した土器を見ると、ほとんどが阿玉台Ⅲ～Ⅳ式期に属するものであることから、当該期の集落構成を知る上で数少ない貴重な調査例である。



107. 調査地点航空写真

中期中葉、阿玉台式後半期の集落の中心部を調査した。舌状台地の基部に、南北に長い楕円形の範囲に遺構が分布している。仔細に見ると、住居跡が外側に、貯蔵穴と墓穴がその内側に分布しており、それぞれいくつかグルーピングできる。各遺構の重複関係があまり見られないことから、比較的短期間に営まれた集落と考えられる。

阿玉台式期に限ると住居跡の形状は方形基調で、柱穴は配列が不規則で深さも不揃いであり、主柱穴が不明確なものもある。炉の種類は埋甕炉と地床炉の2種類がある。なお、有段住居として明らかに捉えることができたのは1軒のみである。貯蔵穴はその断面形状の特徴から「フラスコ形土坑」と呼ばれるもので、直径・深さともに1 m前後の規模である。なかには、開口部に蓋をするかのように深鉢が逆さまの状態出土したものもある。

出土遺物は土器を中心に各種石器が少量出土しているが、石鏃が少ないことが特徴である。また、当該期としては珍しく小規模な貝の散布が認められた。貝種組成はハマグリ・シオフキ・イボキサゴ・アサリなどで構成されており、貝の入手経路を含め東京湾岸の貝塚を伴う同時期の遺跡と比較する上で興味深い。



108. フラスコ形土坑の土器出土状況

断面形状がフラスコ状を呈する土坑の開口部から、土器が逆さまの状態出土した。貯蔵穴が廃絶した後、そこに人骨を埋葬して蓋をするという墓穴（土坑墓）に転用されたとみられる。土坑の開口部径1.2～1.6m、深さ1.2m。



109. フラスコ形土坑の断面

底面が大きくオーバーハングする。開口部径1.3m、底径2.4～2.75m、深さ約0.9m。



110. 深鉢が横転して出土した土坑

長軸約2.5m、短軸約1m、深さ34cmの土坑に、底部を欠く深鉢が倒立した状態で出土した。土器は異系統の土器で、底部を欠いている。



111. 土器が入り子状態で出土した土坑

底部を欠く深鉢の中に、小型の深鉢が入ったまま横倒しの状態で出土した。外側の深鉢（左）は口径26cm、残存高30cm、内側の深鉢（右）は、口径11cm、器高16cm。土坑の大きさは、長軸約1.5m、短軸約1.1m、深さ25cm。





深鉢

後列左から口径26cm、残存高30cm、口径24cm、器高37cm、前列右から口径27cm、残存高31cm、口径27cm、残存高約29cm。



深鉢

左から口径18.5cm、器高35～36cm、口径32cm、残存高約54cm。



深鉢

後列左：口径26cm、器高41cm 後列右：器高36cm、中央：器高約54cm 前列左：口径19cm、器高32cm 前列右から2点目：口径約15cm、残存高18cm。

112. さまざまな土器①

阿玉台Ⅲ～Ⅳ式、及びそれに並行する西関東～中部地方の土器の影響を受けた土器である。この時期に特徴的な口縁が大きな波状をなす深鉢のほか、小型の深鉢も目立つ。



小型深鉢

左から口径14cm、残存高22cm、口径11cm、器高16cm、口径11cm、残存高15cm、口径13.5cm、器高15.5cm。



小型深鉢

左：口径15cm、残存高19.5cm 中央：口径12cm、残存高24cm 右から2点目：口径12cm、器高19cm。



浅鉢

中央後：口径34cm、器高約14cm
右：口径約14cm、器高約8cm。



深鉢

右から推定口径22cm、残存高25cm、口径24cm、器高24cm、器高約29cm、口径30cm、残存高27cm。

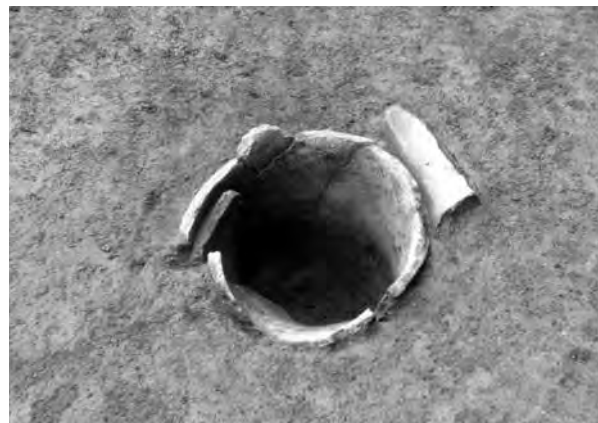


異系統の土器

多摩丘陵～甲信地方、さらには北陸地方の要素が色濃く反映された大型の深鉢の上半部で、印旛地域では類例のない珍しい文様が施されている。口径47cm、残存高約32cm。



114. 浅鉢が伏せられて出土した土坑
土器は推定口径56cm、残存高22cmの大型品。



115. 埋甕炉をもつ住居跡と炉の拡大
上段：3.04×3.72m、下段：3.4×5.96m。



116. 有段住居
約5.4m×約4mの長方形を呈する。下段の床面の四隅に主柱穴を配置している。柱穴はいずれも深さが1m以上あり、もっとも深いもので1.3mある。炉は確認されなかった。

IV-11 神門房下遺跡（佐倉市）

遺跡は高崎川の支流、南部川によって開析された標高約35mの台地上に立地しており、支谷の最奥部に位置している。また、鹿島川本流にも近く、西方1kmで鹿島川低地に至る。

遺跡の大部分は佐倉市立南部中学校の敷地内であり、縄文時代の集落想定域の中心部は現在の校庭と推測されてきた。平成5年におこなわれた、北側の谷に面した台地縁辺部における校庭の拡張工事に伴う調査によって、中期中葉から後葉にかけての集落の一部が検出された。わずか400㎡の調査範囲から5軒の住居跡と82基もの土坑が検出されたことから、遺跡の全体を推測すれば拠点集落であることは間違いない。住居跡には有段住居が2軒含まれており、うち1軒からは大量の土器が出土した。土坑はその形状から小竪穴、袋状土坑、その他の土坑の3タイプに分類されるが、前二者は貯蔵穴として使われたものであろう。



117. 調査地点全景（西側一部）

住居跡と土坑が多数分布しているが、谷寄りの台地縁辺（写真奥）にはまったく分布しないところも認められる。



118. 有段住居

長軸6.2m、短軸4.7mの隅丸長方形を呈する。確認面から床までの深さは約50cmである。壁に沿って溝がめぐり、下段の床面に支柱穴が配置されている。炉は認められない。



119. ベンガラ容器（加曽利EⅠ式）

口径約13cm、器高17cmの小型の深鉢。内部に未粉碎のままのベンガラの小塊が残されていた。



120. 住居跡出土土器

1軒の住居跡の中央部から、阿玉台Ⅳ期の土器が多数出土した。

IV-12 麻生広ノ台遺跡（栄町）

遺跡は栄町の北部、利根川右岸の標高約30mの台地上に立地している。付近には支谷が樹枝状に入り込んでおり、谷奥のわずかな平坦面に阿玉台式後半期～加曽利E式前半期を中心とする大規模な環状集落が展開している。約32,000㎡の調査範囲から住居跡90軒、小竪穴が主体の土坑1,000基以上、斜面貝塚2か所などが検出されたが、それでも環状集落のおよそ半分を調査したに過ぎないとみられる。北側と西側の斜面貝塚は、台地上の集落が大規模化するのとは反対に堆積が終息するようである。貝塚からはイノシシやシカ、タヌキなどの動物遺骸、タイ、フグ、エイなどの魚骨のほか、猪牙製やサメ歯製の垂飾、貝輪やヤス、牙斧、貝刃などの骨角貝製品、人骨など、豊富な遺物が出土した。貝の主体はハマグリで、当時の遺跡付近の環境や採貝活動を知る上で注目される。

付近には、支谷を挟んだ西岸に阿玉台式期のフラスコ形（袋状）土坑を中心とする土坑23基と住居跡1軒が検出された麻生天福遺跡があり、本遺跡との関係が注目される。印旛沼北岸にあって、利根川にも近い位置にあることから、利根川下流域の遺跡群との関係においても興味深い。



121. 遺跡全景

尾根状を呈する台地の平坦面に、住居と小竪穴を中心とする多数の遺構が複雑に重複しながら分布している。西側（写真中央）の斜面は不用品の捨て場で、さまざまな遺物が大量に出土した。



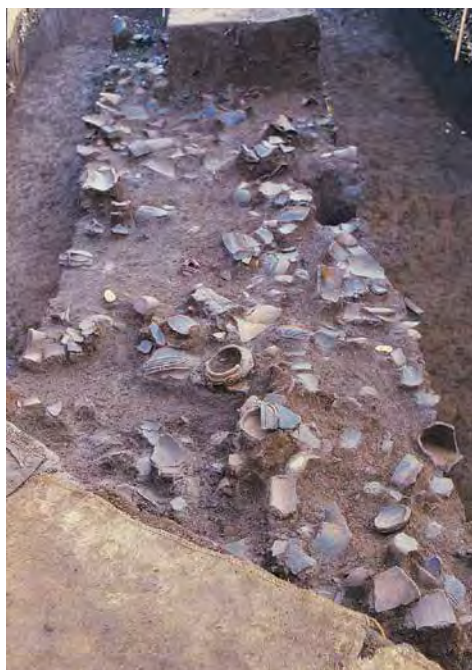
122. 小竪穴近景

底面からクルミやドングリ類の炭化種実が出土したり、粘土塊が詰まった土器が壁際から出土したりしたものがあることから、貯蔵穴と考えられる。台地平坦面の標高がもっとも高い部分は比較的遺構が少なく、集落の広場になっていたとみられる。



123. 貝層断面

西側の斜面貝塚は約300㎡の範囲に形成されており、厚さは最大で50cmある。



125. 有段住居
床面が2段構造の住居。下段の四隅に主柱穴があるが、炉は確認されない。

124. 遺物出土状況
貝が堆積していた斜面部における土器の出土状態。大量の土器片が折り重なって出土した。遺跡全体から出土した遺物は、54cm×33cm×15cmのコンテナで千箱以上にもおよぶ。



126. 土器捨て場の遺物出土状況

西側の斜面貝塚の貝層上に堆積したおびただしい量の土器。加曽利E式直前期～加曽利EⅡ式期の土器捨て場である。写真中央の土器は「器台」と呼ばれ、土器を製作する際の台と考えられている。



127. 土坑断面
台地上の土坑のなかには、貝が投棄されたものもある。



128. 埋甕出土状況
深鉢を逆さまにして、下の土器に蓋をしたかたちになっている。埋葬にかかわるものと考えられる。

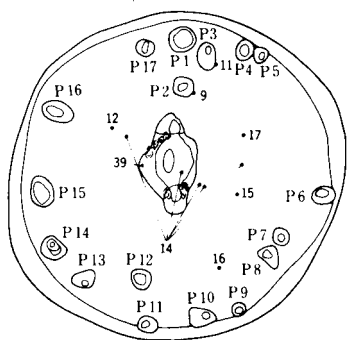


129. さまざまな炉跡
深鉢をそのまま、あるいは途中で切断して埋め込んだ埋甕炉、土器片で囲った土器(片)囲い炉、両者が合わさった土器(片)囲い埋甕炉(写真上段左)、拳大の石で囲った石囲い炉(同右2点)、石を寄せ集めた集石遺構(写真下段)など、多様な形態がある。なかでも、10基以上の石囲い炉と住居跡内の集石遺構は、印旛地域では極めて珍しい。

IV-13 墨新山遺跡・墨木戸遺跡（酒々井町）

墨新山遺跡と墨木戸遺跡は、酒々井町の南西端、高崎川とその支流である南部川によって開析された標高約35mの台地上に立地している。墨遺跡群は両遺跡と墨新山遺跡、墨古沢遺跡、墨古沢南Ⅰ遺跡、同Ⅱ遺跡から構成されており、中期後葉（加曽利EⅠ式期）から後期初頭（称名寺式期）までの集落が展開している。集落は時期により占地場所が異なり、高崎川本流に面した北西部で中期後葉から末葉、南部川に面した南東部で中期末葉の集落が展開している。およそその集落の変遷をたどると、墨古沢遺跡に阿玉台式後半の有段住居を中心とする大規模な集落が出現した後、墨木戸遺跡に加曽利EⅠ式期の比較的小規模な集落が展開する。その後、断絶期をはさんで加曽利EⅢ式期になると墨木戸遺跡・墨新山遺跡・墨古沢南Ⅰ遺跡において比較的規模の大きな集落が再び形成され、住居の分布からは二つの不定形な環状集落が対峙しているようにも見える。続く加曽利EⅣ式期に集落の規模は縮小し、後期初頭に墨古沢南Ⅰ遺跡で集落は終焉を迎える。

詳細が報告されている墨木戸遺跡・墨新山遺跡・墨古沢南Ⅰ遺跡において特筆される点は、土器を斜めに埋め込んだ特徴的な炉をもつ加曽利EⅢ式期の住居跡がまとめて検出されたことである。この炉は「斜位土器埋設炉」と呼ばれ、その分布の中心が東北地方にあることから、地域間交流を考える上で注目される。

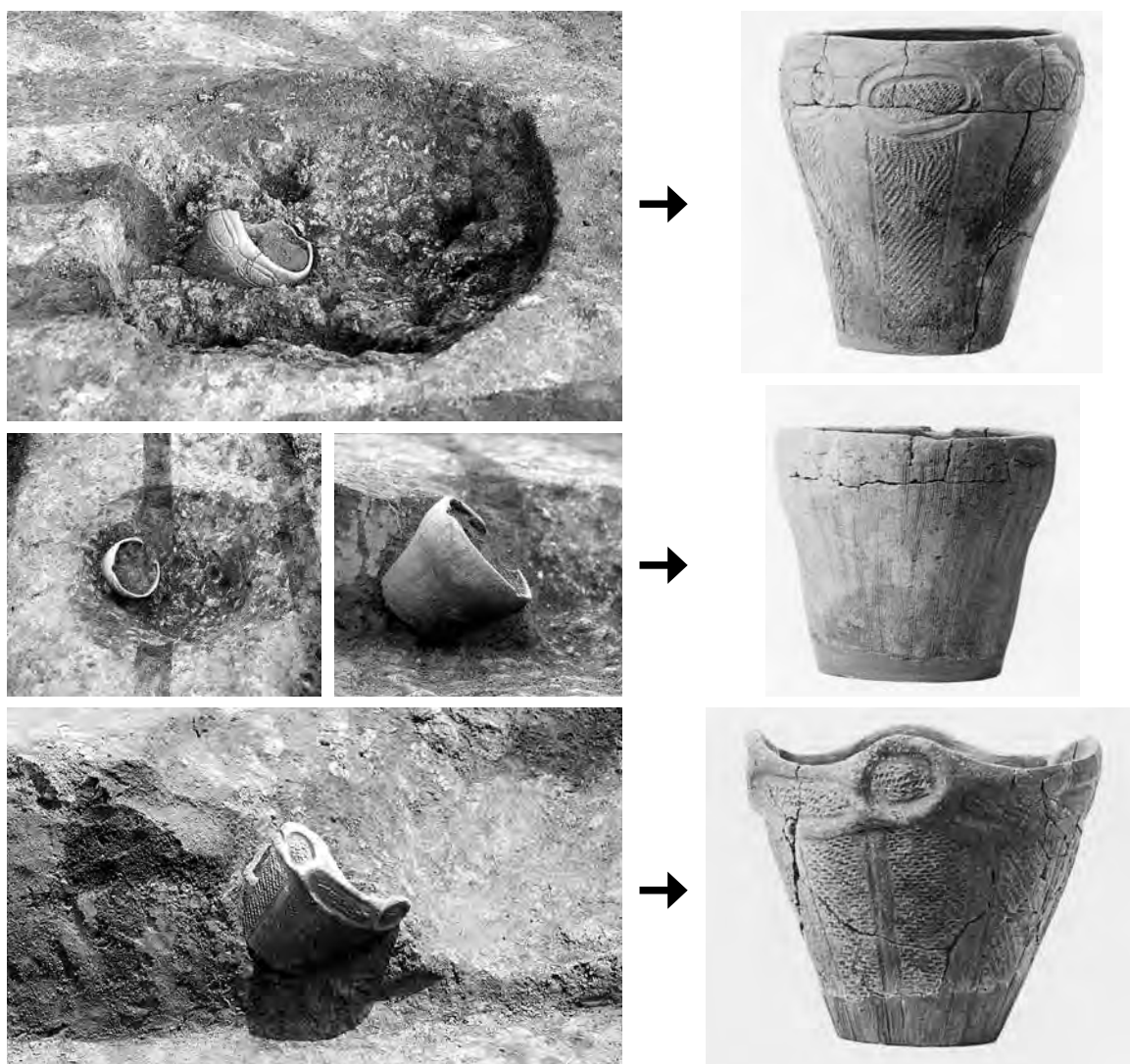


130. 斜位土器埋設炉が設けられた住居跡（酒々井町墨新山遺跡）

住居跡は3.45×3.7mのほぼ円形で、柱穴が壁際にめぐる。炉は約0.6×1mの掘り込みで、深さは最深部で30cm。斜めに埋設した土器のまわりを粘土で裏込めしている。燃焼部には深鉢を縦半分にしたものを敷き、さらに残りの破片と他の土器片で囲むという手の込みようである。炉の脇からは石皿が出土した。



131. 埋設された土器（酒々井町墨新山遺跡）
写真左は口径17cm、器高26cm。同右は推定器高46cm、口内径27cm。加曽利EⅢ式期。



132. 斜位土器埋設炉と出土土器（墨木戸遺跡）



133. 住居跡・土坑出土土器（墨木戸遺跡・墨新山遺跡）

推定口径43cm、推定器高62cmの大型の深鉢。
2本一組の隆起線で上下に大柄な渦巻文を施す。加曾利EⅢ式期。

IV-14 生谷松山遺跡（佐倉市）

佐倉市の中央部、手繰川によって開析された標高約28mの台地上に立地している。これまでに約4,700㎡を調査した結果、径約150mと推定される大規模な環状集落の一部が姿を現した。集落の時期は中期後葉、加曽利E式前半期が中心で、印旛沼南岸域における当該期の集落の様相を把握できる例として重要である。集落は有段住居を含む住居跡と小竪穴を含む土坑から構成されており、それらが複雑に重複している。これまでの調査で確認された遺構は、該期の住居跡48軒、土坑470基以上である。

出土遺物は大量の土器を中心に、石棒や軽石製品を含む各種石製品が出土している。土器のなかには、深鉢の底部破片を用いた漆液容器が出土している。漆液容器は近接する吉見稲荷山遺跡に中期のもの、吉見台遺跡で後期のものが出土していることから、縄文時代における漆利用の実態を探る上で注目される。



134. 調査地点全景（南から）

南北を谷で挟まれた狭小な台地上に営まれた拠点集落。環状集落のおよそ半分を調査したことになる。

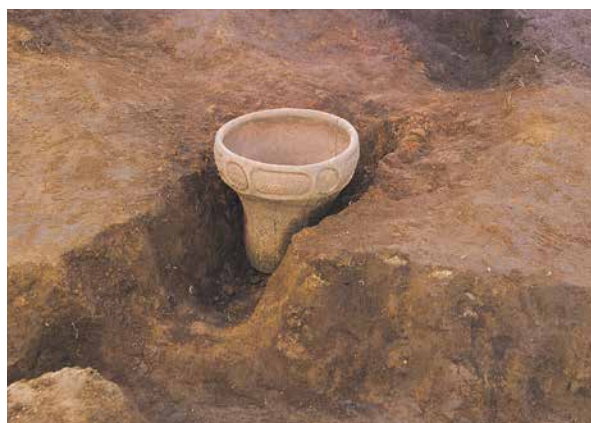
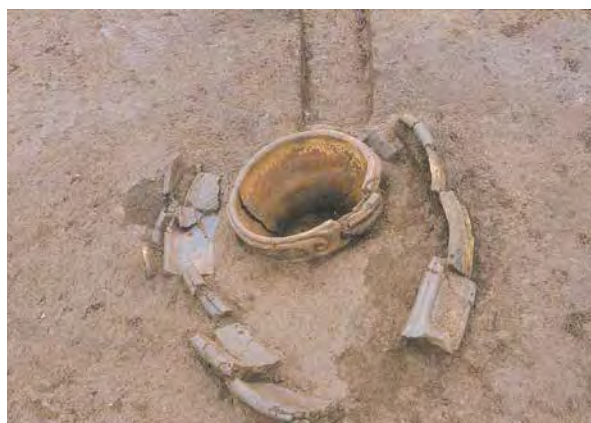


135. 遺構分布状況（真上から）

住居跡と土坑が重複しながら多数分布している。径1～2mの小竪穴が群集するなかに、それより大きめの住居跡が見える。小さい穴の多くは、住居や小竪穴に伴う柱穴である。



136. 有段住居
隅丸方形を呈し、下段床面の四隅に主柱穴がある。



137. さまざまな炉
多数の土器片で囲いを作った「土器片囲い炉」(写真左上)や2つの土器を並べて埋め込んだ「埋甕炉」(写真下段)などがある。



138. 石棒出土状況



139. ヒスイ製垂飾
ヒスイを含む硬玉製の装飾品は過去に5点採集されている。装飾品であるばかりでなく、威信財としてひときわ価値の高いものであった。拠点集落でしか出土しない希少品である。長さ4.2cm、幅2.3cm。



140. 焼成粘土塊

土器を製作した際に生じた粘土の余りであろうか。2軒の住居跡を中心に50点出土した。大きさは4 cm前後～10 cm前後で、かたちはさまざまである。



141. 石鏃

未製品を含め、14点出土した。1点がチャート製のほかは、黒曜石製。



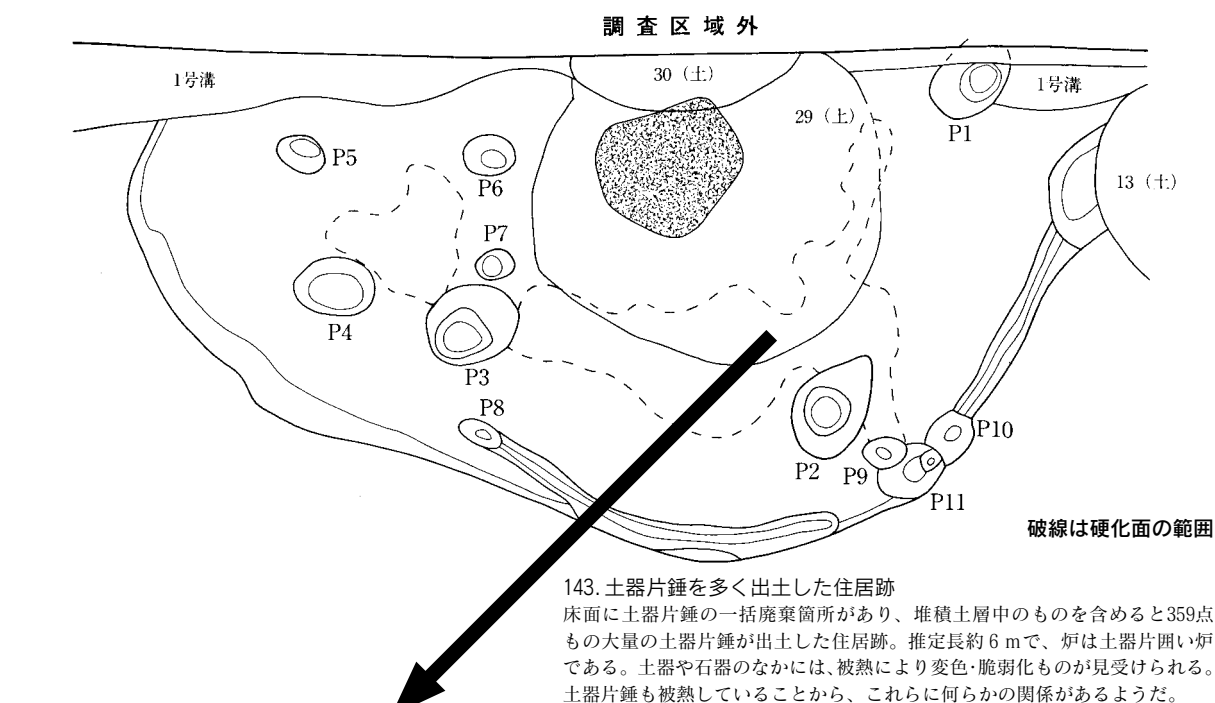
142. 遺構分布図

縄文時代の遺構のほか、古墳時代前期の住居跡6軒、奈良・平安時代の方形周溝状遺構1基、中世の台地整形区画1か所が検出された。

IV-15 吉見稲荷山遺跡（佐倉市）

遺跡は佐倉市の東部、印旛沼に注ぐ手繰川によって開析された標高約30mの台地上に立地している。これまでの調査の結果、北側の支谷に向かって傾斜する窪地を囲むように中期後葉、加曽利E I～II式期を中心とする集落が展開していることがわかった。集落はおもに有段住居を含む住居跡と貯蔵穴とみられる小竪穴で構成されているが、小竪穴の数が圧倒的に多いことは当該期の特徴をよく示している。しかも、住居跡と小竪穴の分布に偏りが認められることから、おおむね馬蹄形の集落形態をなすものと推測される。

出土遺物の中で注目されるのは、大量の土器片錘である。これは魚網用の錘と考えられているもので、土器片に紐掛けのための切り込みが施されている。これまでの調査で出土した土器片錘はおよそ870点にも上り、東京湾岸域の貝塚に勝るとも劣らない数である。このことから、本集落の人々が近くの河川や現在の印旛沼を含む内湾で盛んに漁労活動をしていたと考えられる。また、漆液容器やベンガラ容器の存在は、当時の漆利用の実態や彩色事情を考える上で興味深い。



143. 土器片錘を多く出土した住居跡

床面に土器片錘の一括廃棄箇所があり、堆積土層中のものを含めると359点もの大量の土器片錘が出土した住居跡。推定長約6mで、炉は土器片囲い炉である。土器や石器のなかには、被熱により変色・脆弱化ものが見受けられる。土器片錘も被熱していることから、これらに何らかの関係があるようだ。



144. 床面からまとめて出土した土器片錘

約60cm×80cmの範囲から292点もの土器片錘が出土した。なかには、未製品や破損品も含まれている。1個の大きさは長さが4cm前後で、重さは20g程度のものが多い。土器の文様から判断する限りでは、10個体以上の異なる土器の破片が使われている。



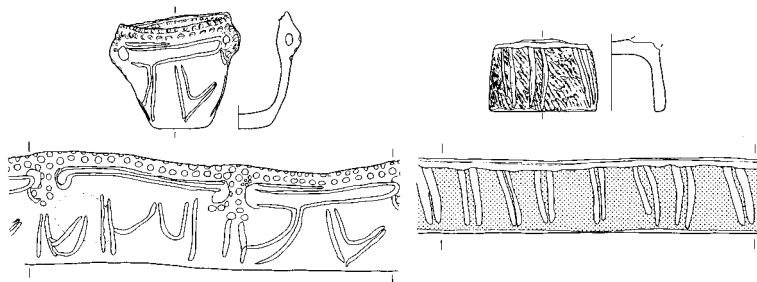
145. 土器片錘を多く出土した住居跡の土器

加曽利E II式に比定される。いずれも熱を受けて脆くなっている。鉢（写真左）は高さ約24cmで、口径約33cm、深鉢（写真右）は高さ約40cm、推定口径約33cm。



146. 漆液容器出土状況

径約2.6m、深さ約82cmの貯蔵穴とみられる土坑の壁寄り、小型の深鉢2個が入れ子状で立ったまま出土した。土坑が中ほどまで埋まった時点で意識的に置かれたものと考えられる。



149. 漆液容器（左）と蓋（右）の実測図および文様展開図

漆液容器は器形・文様ともに印旛地域では類例のない珍しいもの。蓋とともに加曽利EⅠ式～EⅡ式にかけての移行期のものとみられる。



147. 漆液容器の出土状況再現

下は一对の把手が付いた漆液容器。高さ約9cm、口径9cm。上は台付き土器の台部を逆さまにして漆液容器の蓋に転用したもの。高さ約6cm、径約9cm。ちょうど漆液容器の口径に合うのと、漆液容器の口縁内側が受け部のように作られていることは、二つの土器の密接な関係を示唆している。



148. 漆液容器の内面

底面に少量の漆が付着していた。漆のほかにベンガラも認められていたことから、ベンガラ漆のパレットとして使っていたとみられる。



150. ベンガラ容器（加曽利EⅡ式）

土器片錘を多く出土した住居跡の床下の土坑から出土した。外面には縄文が雑に施され、内面にベンガラが付着している。口縁に一对の穿孔が施されていることから、紐を通してぶら下げて使われたとみられる。高さ6.5cm、口径7cm、重量約152g。



151. 大型深鉢

口径50cm、推定器高80cmほどの大型品である。胴部半ばで意識的に打ち割られていることから、埋甕炉に転用された可能性がある。



152. さまざまな土器

出土土器は加曽利Ⅰ～Ⅱ式土器が中心で、中部地方の勝坂式や曽利式の影響を受けたものもある。手前の左から2番目の土器は曽利式の影響を受けたもので、胴下部を取り除いて埋甕炉に転用されたもの。口径21cm、残存高約14cm。



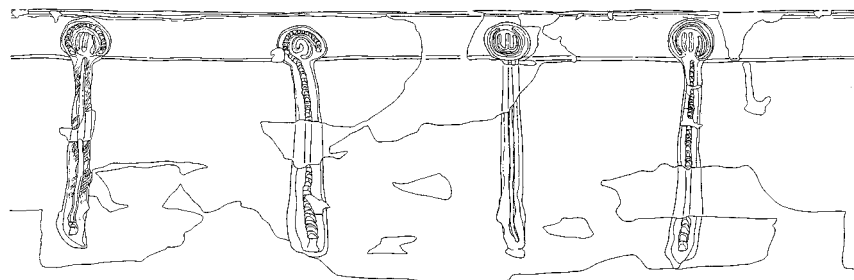
153. 大木系の土器

東北地方に分布する大木式の影響を受けた土器。写真は接合しないが同一個体の口頸部破片。大型の深鉢で、被熱により脆くなっている。



154. 勝坂系の土器

西関東から中部地方に分布する勝坂式の文様をまねて作られたもの。全体の文様構成がうかがえる資料としては、印旛郡内では数少ない例である。推定口径27cm、残存高約35cm。



155. 勝坂系の土器

勝坂式末期の土器の一類型。次期曽利式との関係がうかがえる。口径29.7cm、残存高32.7cm。

IV-16 長田雉子ヶ原遺跡（成田市）

遺跡は成田市の東部、取香川右岸の標高40mの台地上に立地しており、前期前半の集落が展開する長田和田遺跡は同じ台地の南側に隣接している。調査面積は合わせて約14,000㎡で、中期末葉（加曽利EⅣ式期）から後期初頭（称名寺Ⅰ式期）までの集落が展開していることがわかった。遺構の分布状況から、両遺跡は同じ集落であると考えられる。主な遺構は、当該期に属する住居跡57軒、掘立柱建物跡4棟、早期から前期の炉穴や陥し穴を含む土坑が300基以上である。

本遺跡の特徴は、土坑群を囲むように住居が配置する環状集落の形態を呈することである。集落は出土土器から大きく3時期の集落変遷がたどれるほか、重複関係や建て替えの痕跡等から、各時期においてさらに数段階の変遷が想定できる。しかし、集落としての継続期間はそれまでの大規模な環状集落とくらべると短く、環状集落の崩壊過程を考える上で貴重な遺跡である。住居は加曽利EⅣ式期から称名寺式期にかけて、分布域をずらしながらいくつかの群を形成している。土坑の多くは貯蔵穴と考えられるが、なかには深鉢が倒立して出土した土坑のように墓穴とみられるものもある。また、住居群と土坑群の間には1間×1間の掘立柱建物跡が分布しており、土坑とは異なる貯蔵施設である可能性も考えられる。

出土遺物で注目されるのは、火災住居から蓋をされた状態で出土した鰐付注口土器である。その独特な形から、祭祀・儀礼に使われた酒の容器と考えられている。



156. 特殊な住居（右：100号住居址）
長軸4.6m、短軸1.1mの楕円形、あるいは隅丸方形に近い形状である。写真右は鰐付注口土器のほか、石棒や丸石、軽石、石皿といった、特徴的な遺物が出土した火災住居。



157. 100号住居址から出土した石皿（左）と石棒（右）
同じ住居跡から出土した。石皿は径約28cm、厚さ約15m、重さ16.2kg。石棒は長さ約28cm、重さ4.22kg。



158. 埋葬炉
長軸1m、短軸約0.9mの炉に、深鉢の胴上半部を埋め込んだもの。口径約32cm、残存高約23cm。



159. 掘立柱建物跡
人物が入った穴が柱穴に相当する。柱穴の掘り方は、径80cm前後～1m前後、深さ80cm前後である。



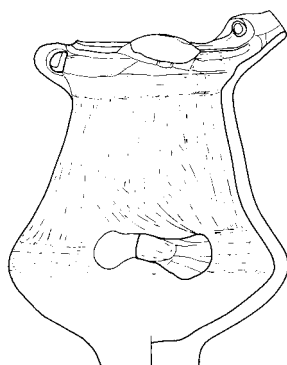
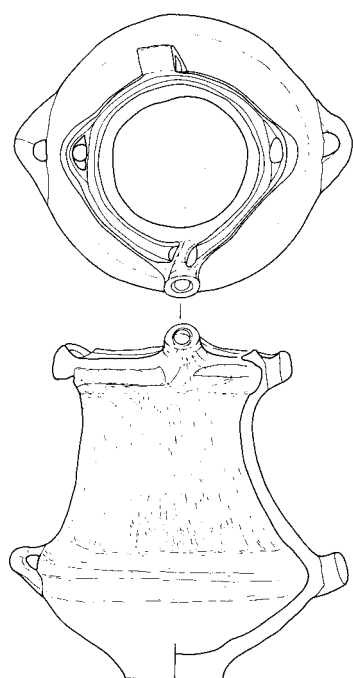
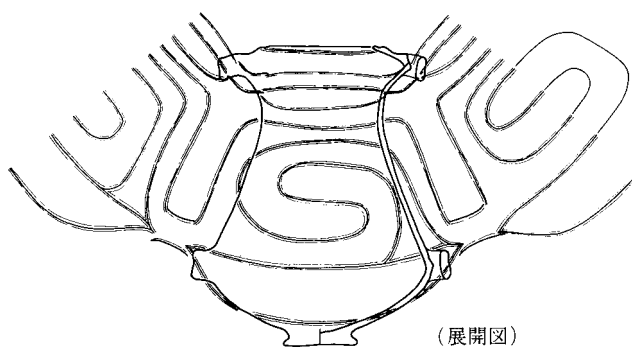
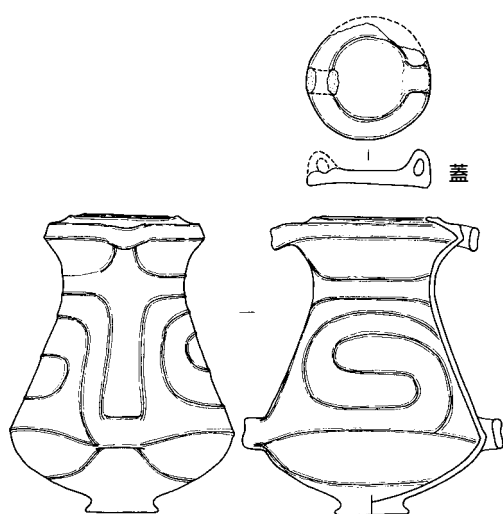
160. 墓坑①

土坑の下層から出土した完形の浅鉢。口径17.6cm、器高10.5cm。



161. 墓坑②

径1.5m、深さ60cmの土坑から、口径約23cm、器高約31cmの深鉢が逆さまの状態出土した。



162. 100号住居址出土の鐙付注口土器

上は最大口径6.5cm、胴部径15.2cm、器高20.3cm。下は同じく9.5cm、19.5cm、24.7cm。



163. 加曾利EⅢ式土器

左は口径35cm、高さ50cm。右は口径48cm、残存高30.5cm。



164. 加曾利EⅣ式～称名寺式期の土器

左端が罌付注口土器で、口径9.5cm、器高約25cm。左から4番目が罌付土器で、口径6.5cm、器高約20cm。

IV-17 稲荷山遺跡・久井崎Ⅱ遺跡（成田市）

遺跡は成田市（旧大栄町）の北西端部、大須賀川の支谷最奥部の標高約38mの台地上に立地している。両遺跡は隣接した位置関係にあり、縄文時代中期後半（阿玉台式末葉～加曽利EⅢ式）の大規模な環状集落を形成している。稲荷山遺跡では22,000㎡の調査範囲から、同時期の住居跡32軒、土坑516基が検出された。遺構の分布状況から推測すると、直径100m以上の弧状、あるいは馬蹄形状の集落の半分近くを調査したことになり、集落全体の遺構数は住居100軒程度、土坑1,000基を超えるとみられている。同時期の東京湾岸の拠点集落とくらべて住居と土坑の比率がきわめて高いこと、貝塚がほとんど形成されないことが挙げられ、それが当時の古鬼怒湾側の拠点集落の特徴（地域性）ではないかとの指摘もある。

住居の分布の変遷を見ると、分布は大きく南北の2群に分かれ、まず阿玉台式末葉期に北側に住居が営まれはじめる。その後南側にも住居が形成され、加曽利EⅢ式期まで南北に数軒ずつ住居が営まれていたようである。住居の時期ごとの軒数は、中峠式期が1軒、加曽利EⅠ式古期が4軒、加曽利EⅠ式新期が4軒、加曽利EⅡ式期が5軒、加曽利EⅢ式期が5軒、不明が13軒である。炉の形態は、地床炉がもっとも多く、そのほか土器囲炉や石囲炉、埋甕炉がある。しかし、有段住居4軒はすべて炉が確認されていない。おびただしい数の土坑は、一部で住居跡と重複しながらも住居跡に囲まれた内側に集中している。



165. 出土土器（成田市久井崎Ⅱ遺跡）

左3点は阿玉台式土器。右は阿玉台式後半期に伴う異系統の土器で、東北地方南部から関東地方北部を中心に分布する七郎内Ⅱ群土器。残存高29cm。中央の大型の深鉢は口径約33cm、高さ49cm。



166. 浅鉢（成田市久井崎Ⅱ遺跡）
口径約13.5cm、高さ約9cm。阿玉台Ⅱ式。



167. ペンガラ容器（成田市久井崎Ⅱ遺跡）
阿玉台Ⅱ式の小型深鉢の胴下部を転用したもの。器面は被熱により荒れている。残存高約9cm、底径約7cm。



168. 南区遺構分布状況（北から）
縄文時代の遺構はすべて南区の西寄りに分布し、北区には皆無であることから、環状集落の輪郭の一部を把握することができる。



169. 加曽利 E I 式期の有段住居
長軸5.3m、短軸4.2mの隅丸方形で、下段四隅の支柱穴の深さは80cm前後ある。



170. 加曽利 E 式期の有段住居
長軸5.9m、短軸5.6mの不整方形で、下段四隅の支柱穴の深さは1m前後ある。



171. 加曽利 E II 式期の斜位土器埋設炉
重さ約6kgの凹石を含む石を使った石囲炉の一端に、深鉢の上半分を斜めに埋め込んでいる。土器は口径約24cm、残存高約16cmで、胴部の文様には東北地方に分布する大木式の要素を備えている。



1



2



3



4



5



6



7

172. 稲荷山遺跡出土土器
1：21cm、40cm 2：約21cm、約38cm 3：約25cm、約37cm 4：28cm、約31cm 5：約20cm、約30cm 6：約15cm、約20cm（口径：高さの順）

IV-18 新山台遺跡（成田市）

遺跡は成田市の北部、大須賀川左岸の標高約41mの台地上に立地している。4,900㎡の調査範囲から、中期後葉、加曽利EⅢ～EⅣ式期の集落が検出された。主な遺構の内訳は、住居跡4軒、貯蔵穴と墓穴を含めた土坑23基である。住居跡はすべて円形に近い楕円形で、周溝はもたない。規模や柱穴の配置などにも規則性は認められない。うち1軒は径6mともっとも大きく、多数の土器とともに土器片^{どせいえんぱん}鍾や土製円盤などの土製品35点、石鏃15点のほか、磨製石斧、砥石、磨石、石皿、軽石などの各種石器が出土した。また、床面直上から白色粘土塊が検出された住居もある。土坑は住居間の空白部を埋めるように分布しており、しかも偏在傾向が認められる。規模は径1.0～1.5m、深さ50cm前後で、多くは覆土の中層以上から土器が多く出土している。なかには深鉢が逆さまの状態^{さかさま}で出土したものがあり、土坑が貯蔵穴として使われなくなった後、墓穴に転用されたものと考えられる。

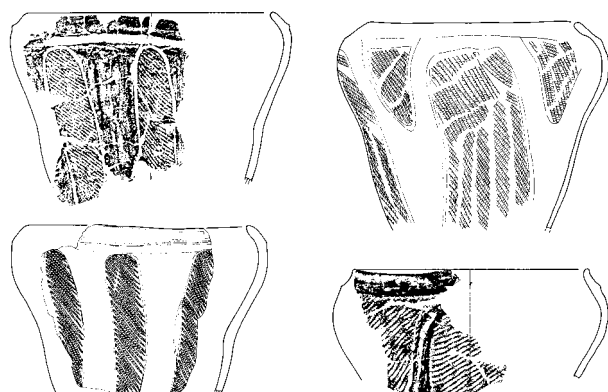
本遺跡の南東約200mの同一台地上には同時期のキサキ遺跡が存在することから、両遺跡の関係が注意されている。キサキ遺跡の約4,500㎡の調査範囲で検出された主な遺構の内訳は、住居跡9軒、土坑11基、埋甕（乳幼児埋葬にかかわる土器）4基である。住居軒数に対する貯蔵穴と墓穴の基数から、新山台遺跡の方がより安定した生活環境にあったのではないかと推測されている。

このように、同一台地上における同時期の集落において、遺構の内容から生活レベルの差異（集落間格差）が指摘されている点で興味深い。



173. 土器片囲い炉をもつ住居跡

径3.2×3.5mの楕円形に近い円形の住居。柱穴は深さ約30cmのもの2本、60cm前後のもの3本の計5本が検出された。炉の近くの床面には、石皿が残されていた。



174. 土坑からの土器出土状況

径1.1m、深さ30cmの不整形の土坑。底面から、推定口径40cmの深鉢が倒置された状態で出土した。



175. 加曽利EⅣ式土器

写真は口径約42cm、器高約57cm、底径約8cmの深鉢。胴部上半に渦巻文、下半に逆U字状の懸垂文をそれぞれ微隆起線で描く。

V 後・晩期

後期は4500～3250年前、晩期は3250～2400年前とされる。寒冷化にともなう海退により、現在の印旛沼周辺の汽水域（淡水と海水が混ざった水域）化が進み、その環境に適応した生活が営まれていたようである。

中期後半における環状集落の崩壊以降、中期末葉（加曽利EⅣ式期）から後期初頭（称名寺式期）にかけて、印旛郡市域では規模の大きな遺跡が認められなくなる。しかし、佐倉市太田向原遺跡、成田市長田雉子ヶ原遺跡、同山口雷土遺跡など、中期末葉から後期初頭に限定される小規模な集落跡がわずかに認められる。続く堀之内式期になると、遺跡数、規模が拡大し始める。堀之内式期に限定される集落跡として、酒々井町伊篠白幡遺跡がある。一方、印旛沼南岸地域では、中期末葉に始まり、晩期中葉（前浦式期）まで継続的に営まれる大規模な拠点集落が近距離に数多く分布する。これらの遺跡は、集落の中心部分に「中央窪地」と呼ばれる窪地を有し、その周囲に住居跡をはじめとする生活痕跡が展開する、いわゆる「中央窪地型環状集落」を呈する。加曽利B式期以降になると、汽水域化した現在の印旛沼周辺で採取したヤマトシジミを主体とする小規模な貝塚も形成される。なかには、居住の反復あるいは人為的な盛土などによって形成された「盛土遺構」を有する遺跡もある。また、遺跡によっては特殊な施設と考えられる大型建物跡、加曽利B式土器が大量にまとまった状態で出土する土器塚、土偶をはじめとする多量の祭祀的な遺物が出土するような特徴が認められる。これらの遺跡として、各論で取り上げる遺跡のほか、佐倉市神楽場遺跡、同坂戸草刈掘込遺跡が挙げられる。また、



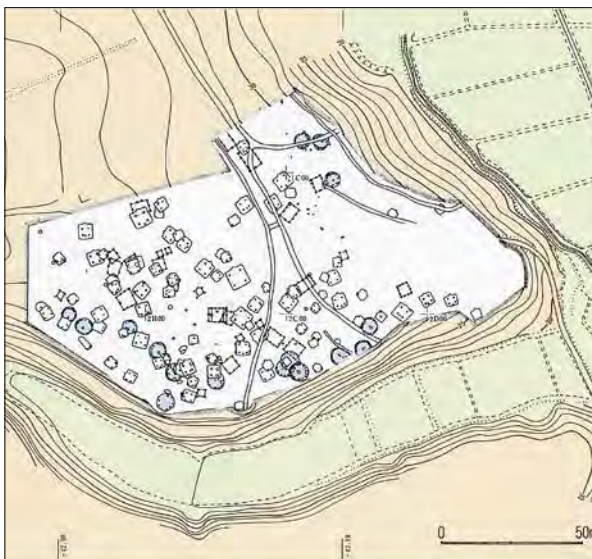
176. 浅鉢（称名寺式 佐倉市向原遺跡）
推定口径15.4cm、10.4cm。



177. 深鉢（称名寺式 成田市山口雷土遺跡）
口径41.2cm、器高40.4cm。



178. 把手（称名寺式 成田市山口雷土遺跡）
最大長13.4cm。爬虫類の頭部をかたどったような把手。



179. 伊篠白幡遺跡全体図
堀之内式期に限定される集落跡。台地縁辺に住居がつくられ全体として環状を呈する。



180. 坂戸草刈掘込遺跡全体図
後・晩期を通して営まれた拠点集落跡。「い」の字状の盛土が形成される。



181. 土偶（成田市小菅法華塚Ⅱ遺跡） 右端：残存長8.6cm。



182. 土偶（佐倉市坂戸草刈掘込遺跡）



183. 手燭形土器（佐倉市坂戸草刈掘込遺跡）



184. 石棒・石剣（佐倉市坂戸草刈掘込遺跡）



185. 石製垂飾（佐倉市坂戸草刈掘込遺跡）



186. 浅鉢（安行3c式 印西市東畑遺跡）
口径15.0cm、器高7.0cm。



187. イノシシ形土製品（栄町大畑Ⅰ-4遺跡）
現存長9.4cm、高さ4.1cm。



188. 人骨出土状況（成田市奈土貝塚）
長軸1.0mほどの土坑墓から屈葬状態で検出された人骨。腹部のあたりにヤマトシジミの貝溜りが認められた。



189. 粘土採掘坑（四街道市南作遺跡）
東西24m、南北14.4cm、深さ3.2m



190. 深鉢（粘土採掘坑出土安行3b式 四街道市南作遺跡）口径13cm、残存高22cm。 191. 浅鉢（粘土採掘坑出土大洞BC式 四街道市南作遺跡）推定口径23cm、残存高9.5cm。 192. 晩期粗製土器（粘土採掘坑出土 四街道市南作遺跡）口径20×23cmの楕円形、器高30cm。

印旛沼北岸においても印西市天神台遺跡、同大越台遺跡、同東畑遺跡、栄町大畑Ⅰ－4遺跡など拠点集落と想定される遺跡が分布している。一方で、印旛村戸ノ内貝塚、同石神台貝塚のように貝塚を伴う小規模な遺跡も散見される。戸ノ内貝塚に関しては盛土を有する可能性が指摘されている。また、印西市西根遺跡、印旛村吉高一本松遺跡、成田市取香川低地遺跡A地点のように、低地に形成された遺跡もわずかながら認められている。これらの遺跡は、土器の廃棄場所、あるいは水辺の祭祀場など、台地上の集落とは異なった性格をもつ。印旛郡市内での検出例は無いが、後期になると堅果類の加工施設が低地で検出されている。印旛沼周辺においては、拠点集落と小規模な衛星的集落が密に分布しているが、これらの集落と低地の作業場などが相互に関係をもち後・晩期の社会が展開されていたと考えられている。後・晩期を通して継続的に営まれた拠点集落は、加曽利B式期以降徐々に規模を縮小しながら、晩期中葉以降に廃絶される。晩期以降、東北地方との関わりが密になってくるが、晩期前半を主体とする遺跡として成田市殿台遺跡、同奈土貝塚などが挙げられる。両遺跡からは塩を精製したとされる「製塩土器」^{せいえんどき}が多量に検出されている。晩期後半から終末にかけての遺構を伴う遺跡は、佐倉市岩名天神前遺跡、四街道市内黒田遺跡群及び御山遺跡、成田市荒海貝塚、同大原野貝塚などを中心とする旧長沼周辺で認められる。また、白井市向台Ⅱ遺跡、佐倉市西御門明神台遺跡、同高崎新山遺跡で小規模な遺物包含層が検出されているが、晩期後半の生活痕跡はほとんどの地域で認められなくなる。

近年、AMS-炭素14年代測定法により弥生時代の始まりが紀元前1千年にまで遡るという測定結果が出ているが、弥生時代の始まりを水田稲作の開始とする立場に立てば、印旛郡市が位置する南関東はその始まりが最も遅い地域となる。言い換えれば、本州において縄文時代が最後まで続いた地域といえる。

遺構に関しては、後・晩期の住居跡の形態は円形を基調とし、円形の居住部分に張り出した出入り口がつく「柄鏡形住居跡」^{えががたじきよあと}も認められる。後期後半になると方形、あるいはD字形を呈する住居跡も認められるようになる。いずれも中央付近に炉が作られ、その周囲に柱穴が穿たれる。また、壁際に沿って小さな柱穴が巡る特徴も認められる。ただし、全体的に掘り込みが浅いため明確な住居形態を把握できない場合が多い。貯蔵穴は円筒形で深さが1m以上もある土坑で、底面中央に小ピットを付設するものも認められる。

遺物に関しては、土器は精緻な文様が施された「精製土器」と文様があまり施されない「粗製土器」との分化が明瞭となってくる。精製土器では、深鉢、浅鉢の一般的な形態のみならず、注口土器、釣手土器^{つりてどき}、異形台付土器^{いけだいつきどき}などの特殊な形態の土器が多く認められるようになる。また、土偶、耳飾、石棒、石剣などの祭祀にかかわる遺物も頻出するようになり、後・晩期の社会においては祭祀が大きな意味をもつようになるといえる。後・晩期の拠点集落からはこれらの遺物が大量に出土するが、その製作場所は不明である。四街道市南作遺跡では、少なくとも晩期前葉（安行3b式期）に利用されたと考えられる粘土採掘坑が検出されており、おそらく遺跡周辺で一連の土器製作が行われていたと想像される。

V-19 西根遺跡 (印西市)

遺跡は、印西市と八千代市の市境、印旛沼に注ぐ神崎川の支流である戸神川に開析された標高約4mの低湿地に立地する。現在の河川と重複して縄文時代の河川跡が見つかり、河川跡に沿って7箇所の土器集中地点が確認された。出土した遺物の大部分は加曽利B式期の深鉢で、日常的に使用された土器が大部分を占める一方、注口土器や異形台付土器などのいわゆる祭祀に利用されたと考えられる土器は一片も出土していない。底部数に基づいた個体数の把握から、約1200個体もの大量の土器が存在したものと想定されている。7箇所の土器集中地点は、それぞれ時期的なまとまりを示しており、流路を北から南に下るにしたがって土器の様相が新しくなる。第1・2地点は多少の時間幅をもつが、概ね加曽利B1式段階、第4集中地点は加曽利B2式段階、第

3集中地点は第1・2集中地点から第4集中地点への過渡期的な様相を示し、第5集中地点は加曽利B3式段階に相当する。また、各集中地点の土器の分布状況をみると部分的なまとまりが認められ、さらに底部数と出土個体数にほぼ同様な分布状況がみられることから、完形個体を順次平面的に据え置いたような状況が想定されている。

これら大量の土器の他には、漆製品も発見された。赤色漆が塗布された飾り弓は、千葉県内では唯一の出土例として注目される。また、漆液の入れ物と考えられる深鉢が2点出土していることから、遺跡周辺において漆を利用する文化が存在したことを示している。



193. 西根遺跡全体図



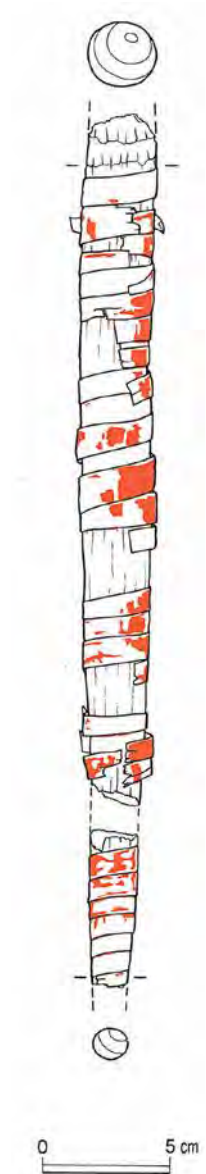
194. 遺跡全景
遺跡は、印旛沼に注ぐ河川に沿った低湿地に形成された。



195. 第3集中地点遺物出土



196. 土器集中地点から出土した加曽利B式土器
土器集中地点からは器形復元可能な加曽利B式土器が大量に出土した。写真中央：粗製壺形土器、口径35.7cm、器高74.1cm



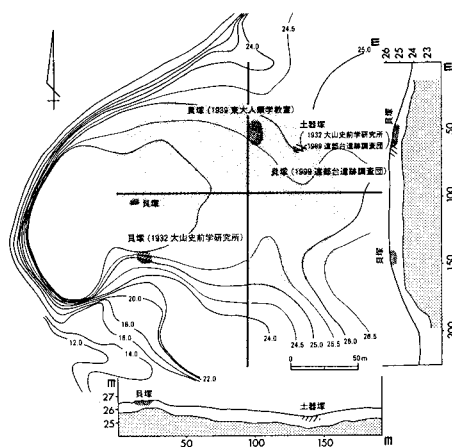
197. 飾り弓
アジサイ属の丸木を削り、樹皮を巻きつけ、その上に赤色漆を塗っている。赤色顔料はベンガラである。
残存長27.2cm、最大幅2.9cm

V-20 遠部台遺跡・曲輪ノ内貝塚（佐倉市）

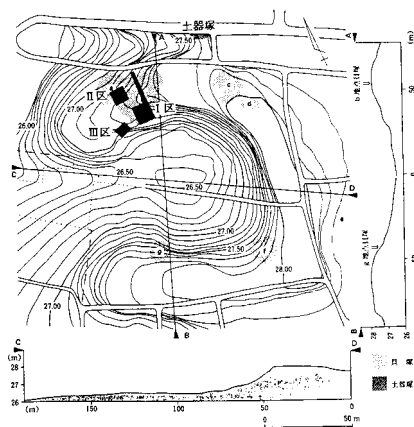
遺跡は佐倉市北西部、鹿島川と手繰川に挟まれ、印旛沼を北に望む標高約26mの台地上に立地する。遠部台遺跡は台地の北西端、曲輪ノ内貝塚は付け根部分に位置し、両遺跡は700m程の近距離に位置する。両遺跡は古くから調査が行われ大規模な集落跡と認識されてきた。遠部台遺跡から出土した土器は加曽利B 2 式土器の指標となるなど、後期の土器編年を確立していく上で重要な役割を担った。

遠部台遺跡は、中期末葉から晩期にかけて営まれた集落跡と考えられる。南西から入り込む谷を囲むように小貝塚や土器塚を含む高まりが展開する。土器塚は遺跡の北東部に位置し、加曽利B 1～B 2 式土器が大量に出土する。土器層下からは中期末葉の土坑が検出された。また、土器塚中央部には土器の集積が認められない道状の遺構が認められた。その他、後期加曽利B 式～安行1 式期の面的な貝層と晩期安行3 a 式期の土坑内貝層が検出され、いずれも汽水産のヤマトシジミを主体とし、ハマグリやオキアサリなどの鹹水産の貝を少量含む。

曲輪ノ内貝塚は、台地西側から入り込む谷を囲むように高まりが展開する中央窪地型集落である。北西側の高まりから中央窪地にかけての調査では、堀之内1 式から安行1 式までの生活痕跡の累積が確認された。また、黒色土中において加曽利B 3 式期の建物跡1 棟とその床下から埋葬人骨1 体、晩期中葉の建物跡1 棟、中期終末から後期初頭の土器群が検出された。これらの調査成果から、曲輪ノ内貝塚の高まりは後・晩期の居住活動にともなう諸施設の構築や埋葬、および生活残滓の廃棄の繰り返しによって形成されたものと考えられている。これは、印旛沼周辺に分布する類似した遺跡の形成を考えていく上で重要な視点のひとつになるだろう。



198. 遠部台遺跡全体図



200. 曲輪ノ内貝塚全体図



199. 土器塚（佐倉市遠部台遺跡）

遺跡北東部の1箇所のみで検出された。中心部では土をほとんど混じえないほど密集した土器集積層が約40cmの厚さで認められた。出土した土器は加曽利B 1 式～加曽利B 2 式で、器種ごとの土器の配置や意図的な破片のまとまりが確認されている。これらのことから、土器塚は単なる土器の廃棄というより、特定の遺跡の一角にモニュメントとして塚状に構築されたものと考えられている。



201. 海獣形土製品（佐倉市曲輪ノ内貝塚）

文様から晩期に作られたものと判断される。一端に髯状の突起が貼付けられ、片面中央に穿孔が施される。

V-21 井野長割遺跡（佐倉市）

遺跡は、佐倉市北西部と八千代市との市境付近の標高約26mの台地上に立地する。遺跡の一部は佐倉市立井野小学校の敷地内に位置する。遺跡の特徴は、①良好な遺存状況、②「道」を基準として中期末葉から晩期中葉にかけて計画的に営まれた集落跡であること、③「環状盛土遺構」が明瞭に残存していること、の3点に集約できるだろう。以上の重要性から、平成17年(2005年)3月2日付けで、遺存状態が良好な井野小学校東隣部分が国の史跡に指定された。

集落は「道」を基準として計画的に営まれていたようである。住居跡、貯蔵穴、墓坑などの各施設はこれらの道避けるようにして、環状盛土遺構の高まり部分（以下、マウンド）と重複する形で分布する。集落は中期末葉（加曽利EⅣ式期）に始まり、晩期中葉（前浦式期）まで継続的に営まれる。堀之内式期は集落の広い範囲に遺構・遺物の分布が認められる一方、加曽利B式期以降になると集落の規模は縮小し、中央窪地寄りに集約する傾向にある。晩期になると盛土の形成も本格化してくるようである。注目される遺構として、加曽利B2式期の大型住居跡と土器塚、晩期の6本柱の掘立柱建物跡、前浦式期の断面播鉢状を呈する大型住居跡、晩期前葉の大型土坑などがマウンド下、あるいはマウンド裾部で検出されている。



202. 計画的な集落を示す遺構配置（第8次調査範囲）

集落の北西部分。遺構が配置されない帯状の空間（道）が北西から南東に向かってのび、その北側には住居跡群、南側には貯蔵穴群と墓坑群が認められる。マウンドも道を避けてその南北に形成されている。また、M7内側裾部には長軸9mを計る6本柱の掘立柱建物跡が検出され、さらに内側の中央窪地との境界には直径12mを測る晩期中葉（前浦式期）の大型住居跡が分布する。



203. 大型土坑（第8次調査28号土坑）

M6外側裾部、土坑群から独立した場所に位置する。直径3m、深さ3.5m以上にもなる円筒形の土坑で、1mほど掘り下げたところで棒状の炭化物が検出された。この炭化物以下の層から残りの良い晩期前葉の土器が10点近く出土した。



204. 遺跡南側からのびる道状遺構（第9次調査）

集落の存続期間道として利用され続けたものと考えられる。道の脇から堀之内1式期の土器集積や曽谷式土器が埋設された土坑墓が検出された。



205. 埋壙をともなう土坑墓（第4次調査）

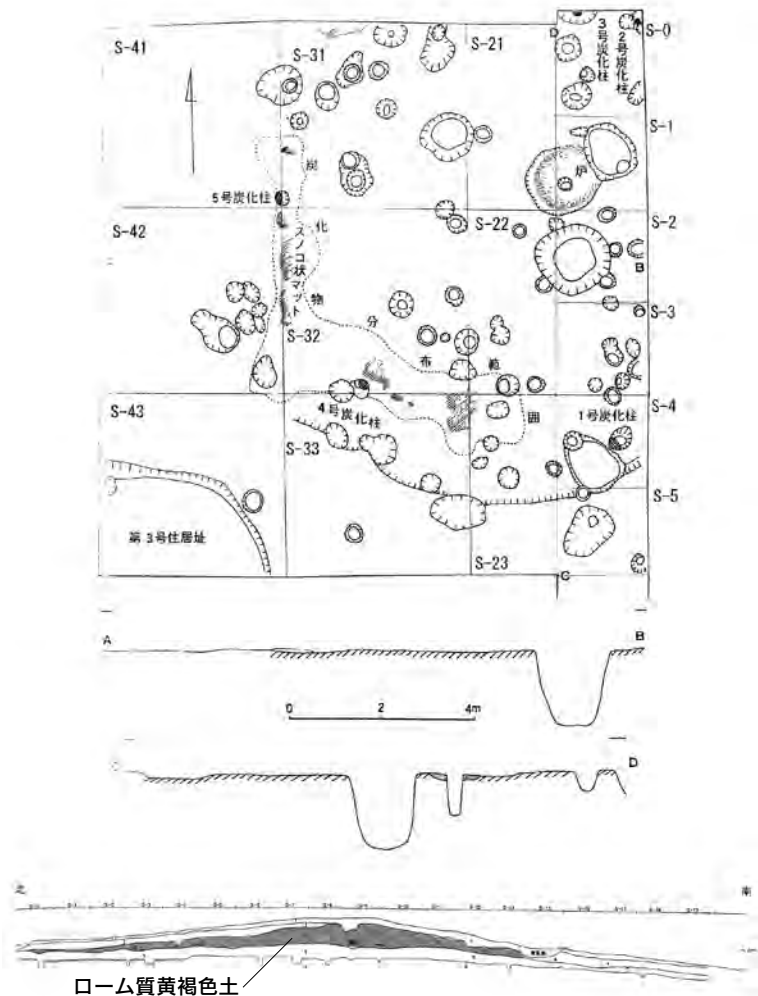
M1の南からのびる道状遺構の脇で検出された。曽谷式の深鉢に、同じく曽谷式の台部を打ち欠いた台付鉢を蓋としている。幼児骨を埋納したと考えられる。

環状盛土遺構は、長軸約160m、短軸約120mの南北に長い楕円形を呈する。マウンドは、環状を構成する外側に5基、中央窪地内に2基の合計7基がそれぞれ独立して存在していた(M1～M4までが現存。Mはマウンドの略)。マウンドと中央窪地の高低差は約2mを測る。マウンドの形成要因は多様であったと考えられるが、本遺跡では「ローム質黄褐色土」による人為的なマウンドの形成および埋め立てなどが、M5、第5次調査1号住、第8次調査9号土坑、第4次調査東側斜面の4箇所を確認されている。ローム質黄褐色土は中央窪地を削平して得られた土を利用したものと想定されている。マウンドのいくつかは人為的に構築されたものと考えられ、しかも東側の斜面を埋め立てることにより環状構造を維持しているとも考えられることから、井野長割遺跡の環状盛土遺構は1つの構造物として捉えられるのかもしれない。



208. 石棒

下：長さ50.1cm、幅6.1cm、厚さ3.0cm（緑泥片岩製）



206. 加曽利B式期の大型住居跡およびマウンド5堆積状況（第2次調査）

M5下で検出された、直径10mほどの円形を呈する住居跡である。底面からシノ竹を編んで作ったスノコ状マットの炭化物が検出された。柱穴の一部には炭化した柱材（クリ）も残存していた。また、底面からは加曽利B2式の異形台付土器2個体が、ほぼ完全な形で出土した。さらにこの住居跡を覆う形で、最大厚約1.3mのローム質黄褐色土が凸レンズ状に堆積していた。この土層からは、加曽利B式から晩期安行式の遺物が出土する。このことから、少なくとも加曽利B式期以降の土層が形成されたものと考えられる（上部平面図および断面図と下端部断面図は縮尺不同）。



207. 貝塚からの獣骨検出状況（第4次調査）

本遺跡では、マウンド部分から汽水産のヤマトシジミを主体とする小貝塚が数箇所検出された。いずれも後期後葉から晩期前葉に形成されている。M2の貝層からはシカ・イノシシの集中箇所が検出された。

209. 角底土器（安行3b式）

口径19.0cm、器高15.4cm。底面は方形で、口縁部は円形となる。



210. 後・晩期深鉢
中央：口径12.8cm、器高16.8cm。



211. 関西地方の影響を受けた晩期の浅鉢
口径19.9cm、器高12.0cm。



212. 後・晩期注口土器
左：安行2式、口径3.7cm、器高10.8cm。右：大洞BC式、口径6.4cm、器高11.5cm、底面に意図的な穴がけられる。



213. 香炉形土器
口径7.0cm、器高15.4cm、底径7.0cm。



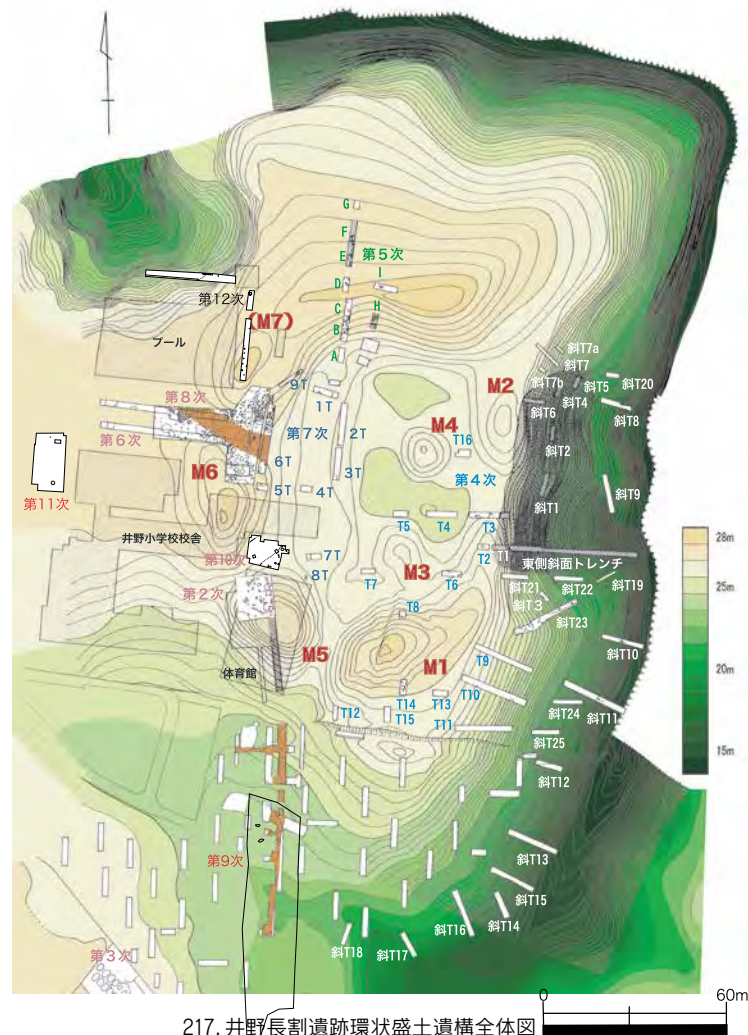
214. 異形台付土器
左：口径7.4cm、器高17.8cm。右：口径5.9cm、器高14.6cm。M5下加曽利B2式期の大型住居跡の床面から出土した。



215. 土製品 上段左・中央：ミミズク土偶 上段右：土版 下段左：有孔球状土製品 長さ6.1cm、幅4.1cm。下段右：蓋



216. イノシシ形土製品
全長10.0cm、器高7.0cm



217. 井野長割遺跡環状盛土遺構全体図

218. 大規模な斜面の埋め立て
(第4次調査東側斜面トレンチ)

東側斜面の埋没谷を中心とした範囲から、ローム質黄褐色土による斜面の埋め立てが確認された。本土層は表土下で確認され、西側の谷の肩口付近では厚さが2mにも及ぶものと推測されている。本土層には焼土、炭化物が含まれ、晩期前葉の土器が主体的に出土する。6層に分層されるが、間層を挟まずにほぼ一様に堆積していることから、晩期の比較的短期間に堆積したものと想定される。

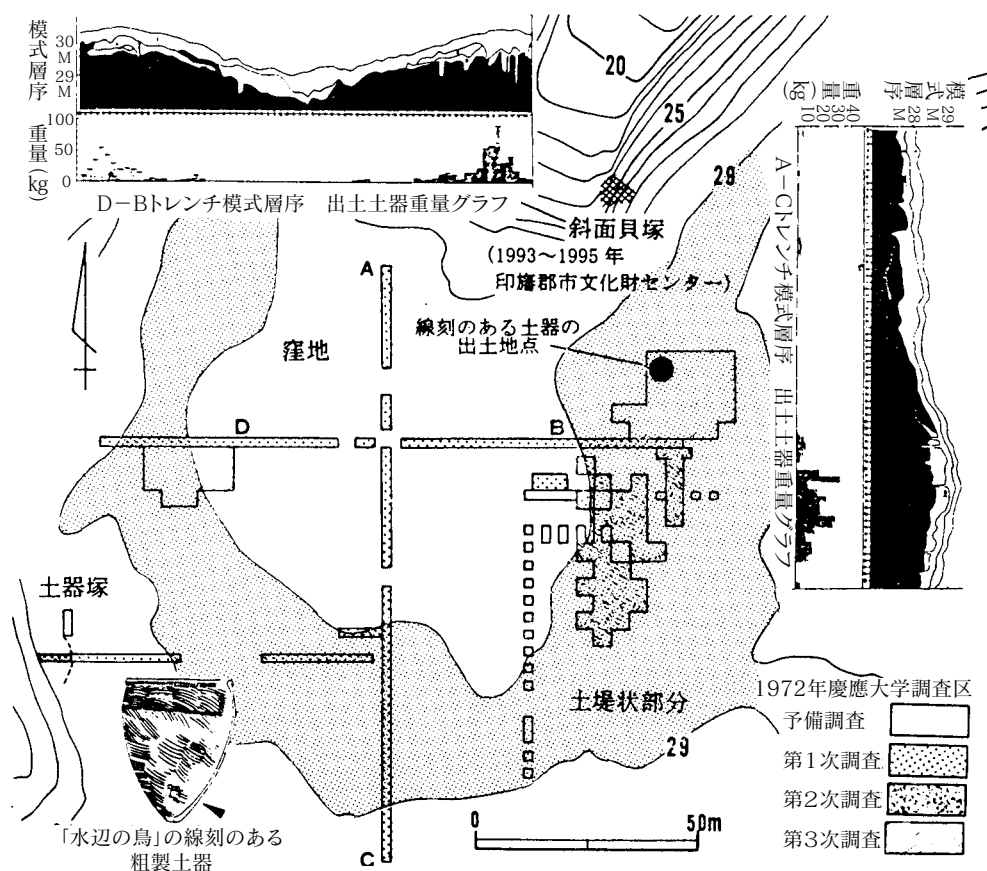
219. ローム質黄褐色土が堆積する土坑 (第8次調査9号土坑)
直径2 m、深さ3 m近くになると思われる円筒形の土坑。上層にブロック状のローム質黄褐色土が堆積し、その上下から安行2式土器が出土した。

V-22 吉見台遺跡（佐倉市）

遺跡は佐倉市北西部、鹿島川と手線川に挟まれた標高約29mの台地上に立地する。鹿島川によって形成された小支谷が北から入り込み、その谷を囲むように中期末葉から晩期中葉にかけての集落跡が環状に展開する中央窪地型集落である。古くから遺跡の紹介および調査が実施され、土器塚および土偶や耳飾などの土製品を大量に有する遺跡として著名である。

昭和47年に中央窪地を中心とした部分的な調査が実施され、後期後半を主体とする住居跡や貯蔵穴、加曽利B式期の土器を主体とする土器塚、ヤマトシジミを主体とする複数の貝ブロックなどの遺構が検出された。昭和58年には宅地造成にともない、中央窪地とその周辺部分を除いた遺跡の大部分の調査が実施された。北から入り込む谷の西側に面した位置から直径20m近くの大規模住居跡が検出された。平成5～7年には道路建設にともなって、集落の北東部分が面的に調査された。北から入り込む谷の斜面部に、加曽利B式期から後期安行式期にかけて形成されたヤマトシジミを主体とする貝塚が検出された。谷に面した台地上からは、晩期の大規模住居跡2軒をはじめとする住居跡7軒、住居跡の支柱穴配置と同様な柱穴配置を呈する掘立柱建物跡2棟、貯蔵穴などの土坑が100基以上検出された。

遺物は大量の土偶、耳飾りをはじめとする大量の土製品のほか、海獣形土製品、水鳥が線刻された後期後半の粗製深鉢など珍しいものも出土している。



220. 吉見台遺跡全体図



221. 大型住居跡（昭和58年調査）

北から入り込む谷の西側で独立して検出された。長軸19m、短軸16.5mで、明確な張り出し部が認められる柄鏡形を呈する。



222. 北側谷部斜面貝層

北側から入り込む谷の東側斜面部で検出された加曾利B式期から後期安行式期にかけて形成された貝層。約8m×8mの範囲に1～1.5mの厚さで貝層が堆積する。曾谷式期から後期安行式期が主体となり、出土土器として台付鉢の出土が多い傾向にある。骨角貝製品は量、種類が貧弱ながら刺突具、装飾品などが出土している。貝類は汽水産のヤマトシジミが主体で、鹹水産のハマグリが少量混じる。哺乳類はシカ、イノシシが主体となる。魚類は汽水域に生息するクロダイが主体となり、鳥類はカモ類が主体となる。魚類・鳥類は1箇所に集中して廃棄されたようである。



223. 骨角貝製品

左端：長さ9.4cm。



どっこいし
224. 独鈷石
長さ14.9cm。



225. 壺形土器
（堀之内1式）
口径長軸9.5cm、
器高21.4cm。



226. アワビ形土製品（加曾利B3式）
口径長軸17.0cm、器高径5.9cm。



227. 釣手土器（加曾利B式）
推定口径15.7cm、器高16.7cm。



228. 注口土器（安行 3 a 式）
左端：口径7.2cm、器高8.8cm。



229. 人面付注口土器（安行 3 a 式）
推定口径16.8cm。口縁部にミミズク土偶に類似した顔がつく。



230. 手燭形土器（安行 3 a 式）
長さ15.5cm、器高7.0cm。



231. 異形台付土器（晩期安行式）
残存高9.0cm、獣脚状の台部。三叉文状の透かし穴が入る。



232. 海獣形土製品（左：正面～側面 右：裏面）
高さ16.7cm、2本の脚に2本のヒレ、くちばしが付いた顔をもつ。正中線上に2つの穿孔がみられる。文様構成から晩期のものと考えられる。





233. 動物形土製品 左端：イノシシ？ 残存長8.5cm。
中央左：イヌ？ 中央右：イノシシ？ 右端：イノシシ？



234. 動物形土製品？
長さ5.7cm。



235. 山形土偶
左下：長さ7.4cm。



236. ミミズク土偶
左上：残存長8.8cm。



237. 中空土偶・土版
左上：残存長7.6cm、右下のみ土版。

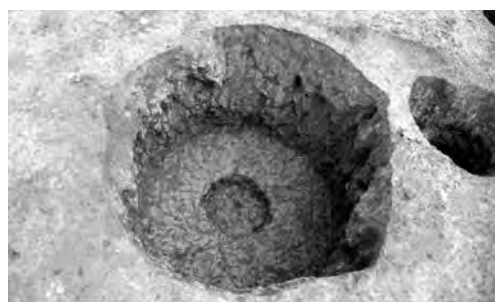
V-23 宮内井戸作遺跡（佐倉市）

遺跡は佐倉市南部、鹿島川中流域右岸の標高約40mの台地上に立地する。隣接する千葉市域部分も含め、後・晩期の集落のほぼ全域を調査した遺跡である。調査の結果、住居跡及び住居跡を構成する柱穴、貯蔵穴、墓坑、道などの集落を構成する約5,000基の遺構と総重量100 tにも及ぶ膨大な量の遺物が発見された。

集落は中期末葉（加曽利EⅣ式期）～晩期中葉（前浦式期）まで継続して営まれ、最終的な集落形態は、東から入り込む谷を囲むように東西に長い楕円形を呈する。この谷には中世の遺構が多く分布するが、縄文時代においては遺構希薄域である。集落の変遷をみると、遺構希薄域は集落存続期間を通して遺構・遺物が希薄な空間として維持され続け、その周囲に各時期において特徴的な分布を示しつつ著しく重複して生活痕跡が認められる。集落の初期段階である中期末葉（加曽利EⅣ式期）から後期初頭（称名寺式期）は台地の広範囲に遺構・遺物が点在しているが、遺構希薄域の北東側に中心が認められる。続く堀之内1式期になると集落の規模が拡大し、遺構希薄域以外の集落範囲全体に展開する。住居形態にはいわゆる柄鏡形住居が多く認められるほか、長方形を呈するものもある。また遺跡の北西から南東方向に伸びる道の周辺を廃棄場所として利用している。堀之内2式期になると集落の西側を中心に遺構・遺物が分布するようになる。また集落北部の東から入り込む谷の最奥部が廃棄場所として利用される。加曽利B式期になると集落が最盛期を迎え、集落の構成も大きく変化してくる。まず、台地東側の谷に面した部分に大型住居跡が出現する。大型住居跡は5軒検出され、加曽利B式期以降晩期まで集落東側の特定の場所に存在し続ける。一般的な住居跡の分布は大型住居跡の分布域と対になる遺構希薄域の西側に移り、大型住居跡と一般的な住居跡で分布が二極化するようである。前段階から認められる谷最奥部の廃棄場所は引き続き維持される。後期後葉（曾谷・後期安行式期）は、前段階から引き続き分布の二極化が認められるが、遺構希薄域の方向に遺構・遺物の分布が移り、谷最奥部の廃棄場所は認められなくなる。晩期に入っても分布の二極化は維持され、遺構・遺物の分布は遺構希薄域方向にさらに集約する。晩期後半の痕跡はほとんど認められないが、東側の谷を挟んだ西御門明神台遺跡で晩期後半の遺物包含層が検出され、遺跡周辺は、後・晩期の集落跡の盛行から廃絶およびその後の状況までを捉えられる地域として注目される。



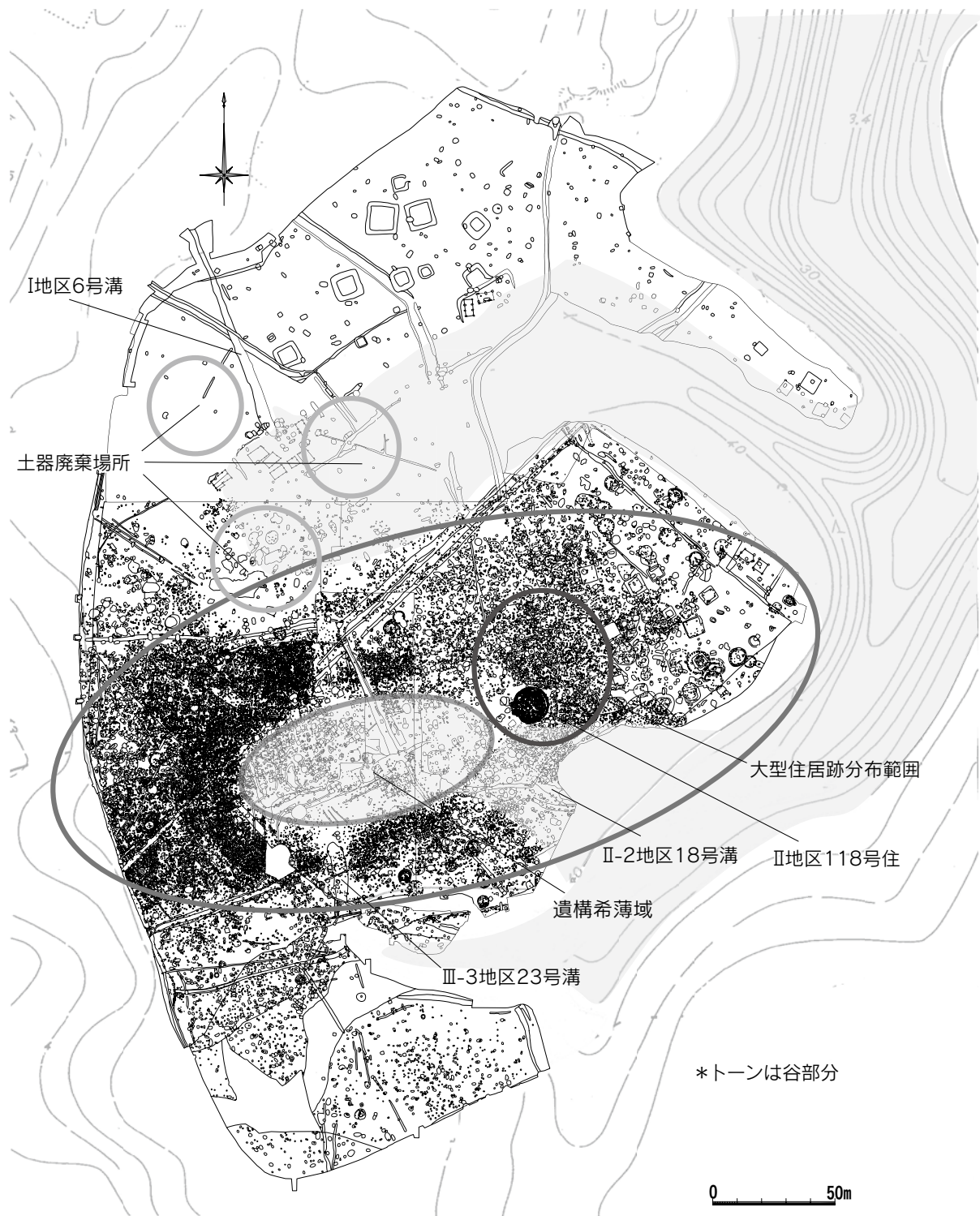
238. 溝状遺構（後・晩期 Ⅱ－2地区18号溝）
調査区内での長さ25m、幅6m。集落東側の谷と集落を結ぶ道と考えられる。底面から晩期前葉の浅鉢がまとめて出土した。この他に集落の北西部（Ⅰ地区6号溝）と遺跡の南側から入り込む谷に面した部分（Ⅲ－3地区23号溝）の2箇所で道が検出されている。いずれも遺構の重複が少なく、集落存続期間を通して機能していた可能性がある。



240. 貯蔵穴（後期 Ⅲ－3地区66号土坑）
直径1.4m、深さ1.2mの円筒形を呈し、底面中央に小ピットをともなう。数基の貯蔵穴が群をなし、まとまって分布する。



239. 溝状遺構
（後・晩期 Ⅱ－2地区18号溝）
遺物出土状況



241. 宮内井戸作遺跡全体図

注目される出土遺物として、東北地方からもたらされた遮光器土偶や群馬方面で製作された透かし彫りの耳飾、ヒスイ製の垂飾などがあり、遠隔地との交流がうかがわれる。また、土偶、耳飾などの土製品、石棒・石剣などの祭祀に関わる石製品などはそれぞれの種類ごとにまとまって出土する地点もあり、これらの分布状況も遺跡の性格を考えていく上で興味深い。

後・晩期の大規模な遺跡が数多く分布する印旛沼南岸において、集落のほぼ全体が調査された遺跡は皆無であり、印旛沼南岸および縄文時代の集落や社会を考えるうえで、本遺跡は重要である。



242. 柄鏡形住居跡（堀之内1式期 VI地区11号住）
直径4mの円形を呈する居住範囲に出入口が張り出してつく。壁際に柱穴がめぐり、炉は中央よりやや入り口側につくられる。
左下：土器片囲炉、炉の壁面に土器片を並べる。



243. 長方形住居跡（堀之内1式期 III-2地区2号住）
長軸4.3m、短軸3.1m、深さ10~20cmほどの長方形を呈する。柱穴はまばらに認められる。円形の住居跡が主体となる当該期において異質な住居跡といえる。



244. D字形住居跡（後期後半 III地区）
長軸5m、D字形を呈する。ハの字状の入り口施設がつく。



245. 掘立柱建物跡（II-2地区 1・2号掘立柱建物跡）
1辺4.5mほどの四角形（手前）と、長軸6.0mの亀甲形（奥）が2棟並んで検出された。



246. 大型住居跡（加普利B式期 II地区113・114号住）
113号住は直径約19mの円形を呈する。壁面に沿って帯状に焼土が分布する。114号住は19m×21mの楕円形を呈する。炉と考えられる焼土跡が16箇所検出された。113号住の方が新しい。



247. 大型住居跡（晩期安行式期 II地区118号住）
直径約14.5mで一端に張り出し部がつく柄鏡形を呈する。晩期前半の間に数回の建て替えが行われたようである。壁面に沿って焼土が堆積する。



248. 筒形土偶

下段左：最大長9.6cm、最大幅5.8cm。堀之内式期に盛行する土偶。



249. 山形土偶・ミミズク土偶・遮光器土偶

中央：遮光器土偶 最大長13.2cm、最大幅7.9cm。東北地方からもたらされたものを在地で真似て製作された土偶。



250. 東北地方からもたらされた遮光器土偶
最大幅12.1cm、最大幅12.0cm、最大厚5.2cm、中空構造の遮光器土偶。



251. サメ歯製垂飾
最大長5.1cm。



252. 堀之内式土器

前列右端：深鉢、口径13.2cm、器高11.8cm。後列左側2点と前列左側1点が堀之内1式、それ以外は堀之内2式。



253. 加曾利B式土器

後列中央：深鉢、口径43.0cm、器高53.5cm。



254. 曾谷・後期安行式土器

前列右端：深鉢、口径19.1cm、器高10.8cm。



255. 晩期安行式土器

前列右端：台付鉢、底径18.5cm、残存高16.0cm。



256. II - 2 地区18号溝出土の晩期前葉の浅鉢

左端：浅鉢、推定口径23.4cm、器高14.2cm。



257. 後期粗製土器

後列中央：深鉢、口径31.0cm、器高81.5cm。



258. 動物（アナグマ？）模倣浅鉢

長軸25.5cm、短軸21.5cm、器高8.5cm。



259. 各種特殊土器

中央奥：異形台付土器、口径7.5cm、残存高16.7cm。

各種特殊土器凡例

異形台付

注口	異形台付	釣手
注口	注口	異形台付
注口	異形台付	釣手
異形台付	釣手	釣手
異形台付		

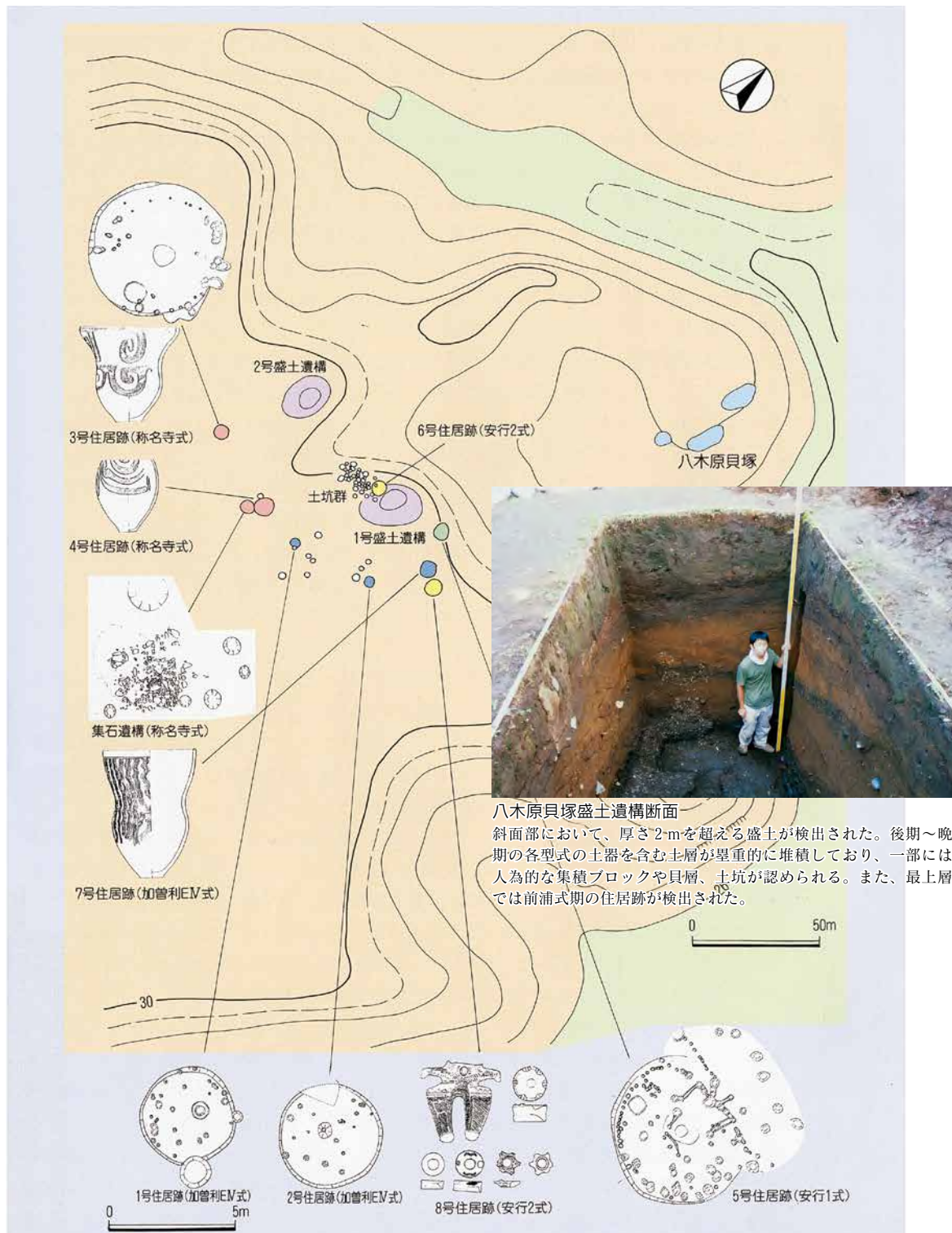


260. 注口土器（加曾利B式）

左：口径3.2cm、器高9.5cm。

V-24 千代田遺跡群（四街道市）

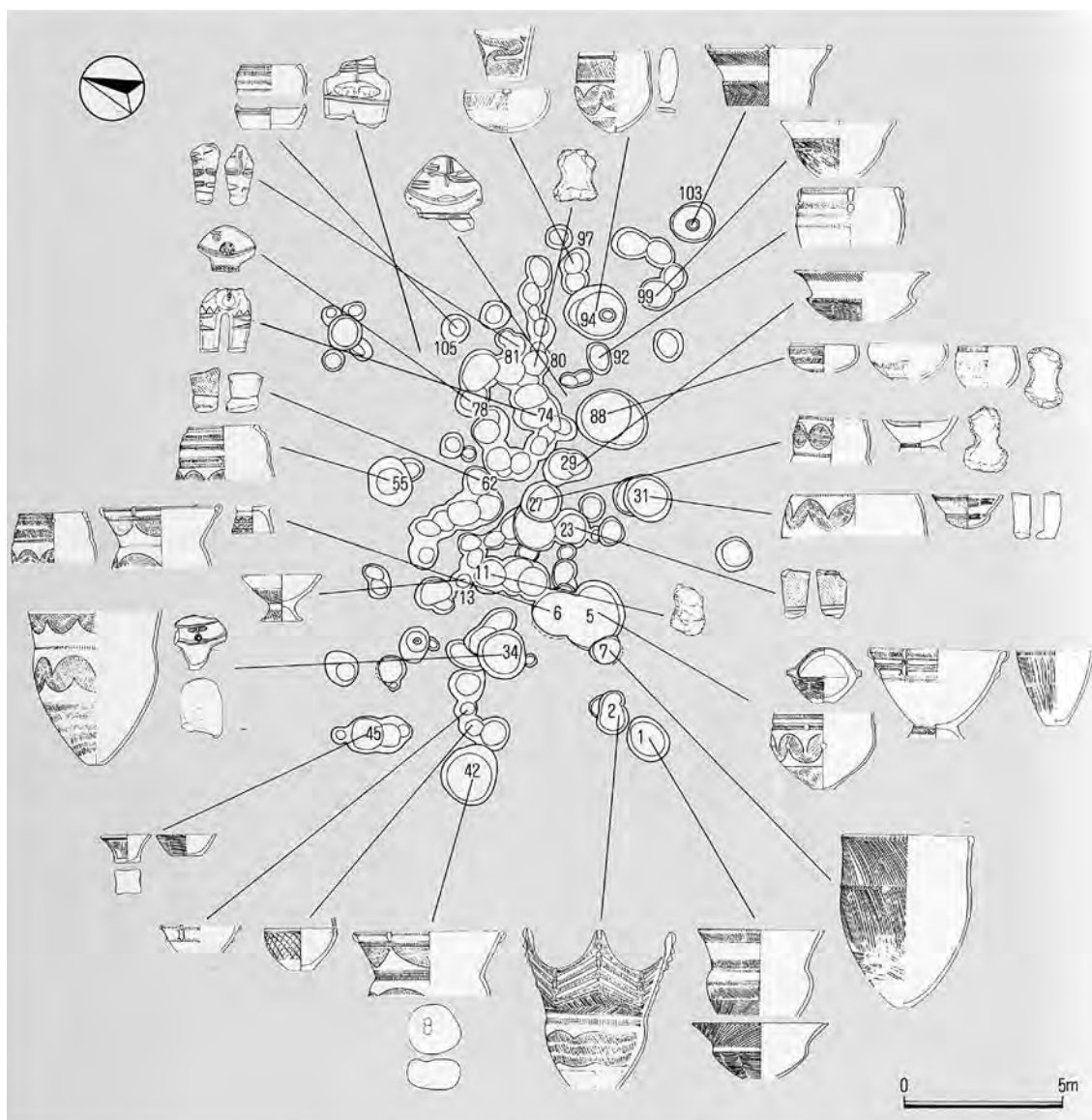
遺跡は四街道市北部、鹿島川と手繰川に挟まれた標高約30mの台地上に立地する。中期末葉から晩期中葉にかけて継続的に営まれた拠点的な集落跡で、鹹水産の貝を主体とする貝塚や盛土を有する。また、近隣に位置する内黒田遺跡群および御山遺跡とともに、中期末葉から弥生時代にかけての変遷をたどれる地域の拠点をなす集落跡とも位置づけることができる。



269. 千代田遺跡群Ⅳ区全体図

遺跡はⅠ～Ⅴ区に区分けされており、そのうちⅣ・Ⅴ区から中期末から晩期の遺構・遺物が検出された。とくに、Ⅳ区からは中期末葉から晩期初頭にかけての住居跡9軒、集石遺構1基、土坑11基、土坑群、盛土遺構2基が検出された。盛土遺構は、北西から入り込む谷を挟むように2基確認されている。1号盛土は長軸35m、短軸25mの楕円形を呈し、高さは2m弱である。盛土内からは安行2式期の住居跡や加曽利B式から安行1式期の土坑群が検出された。盛土付近からは曽谷式期を主体とする土坑が群集して検出された。東側の台地先端部は八木原貝塚と呼称され、その斜面部には厚さ2mを超える盛土が形成される。また八木原貝塚を含め、Ⅳ地区からは加曽利B1式期から安行3a式期にかけて形成された4箇所の貝塚が検出されている。加曽利B1からB3式期に形成された貝層下部はオキアサリ、ハマグリなどの鹹水産の貝が主体となるのに対し、曽谷式期以降に形成された貝層上部はヤマトシジミを主体とする汽水産の貝となる(Ⅳ地区5号住のみ安行1式期も海産貝主体の貝層となる)。

印旛沼南岸の遺跡において、鹹水産の貝が主体となる大規模な貝塚が形成される遺跡は皆無であり、東京湾沿岸地域と印旛沼南岸地域の関係性を考えるうえで多くの情報を有する遺跡である。



270. Ⅳ区土坑群

土坑群は1号盛土遺構下の南北12m、東西20mの範囲で110基検出された。土坑は径1m、深さ0.6mほどの円筒形を呈し、曽谷式期を主体とする。



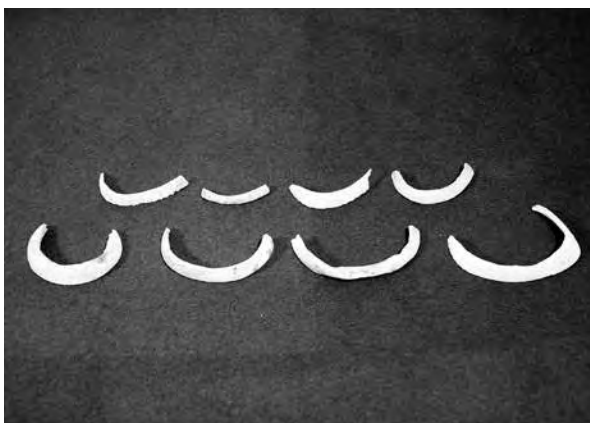
271. 後期土器
中央奥：口径23.0cm、器高36.5cm。



272. 浅鉢（後期）
右：口径12.8cm、器高6.3cm。



273. 蓋
最大長11.6cm、器高3.0cm。



274. 貝輪



275. 石剣
先端部に「I」字状の文様が施文される。晩期中葉の所産と考えられる。



276. 山形土偶・ミミズク土偶
左上：ミミズク土偶、残存長10.3cm。



278. 動物形土製品
イヌ形の土製品と考えられる。



277. 土版（上：表、下：裏）
左：最大長13.7cm、表面に顔状の文様が施文され、表裏面にI字状の文様が施される。晩期中葉。
右：三又文が施される。晩期前葉。



279. クルミ形土製品（左：正面 右：側面）



280. 耳飾・石製垂飾 左上：最大径5.8cm。

土製耳飾

魚骨製耳飾
外面に赤彩が施される

土製耳飾

石製垂飾

V-25 内黒田遺跡群・御山遺跡（四街道市）

遺跡は四街道市北部、手繰川と鹿島川に挟まれた台地上に立地する。両遺跡の間には、中期末葉から晩期中葉にかけて営まれた拠点集落である千代田遺跡群が位置している。これらの遺跡群からは、出土量、規模の多寡はあるものの、縄文時代後・晩期から弥生時代にかけての遺構・遺物が継続的に検出されているため、縄



281. 土坑墓（四街道市御山遺跡）

長軸1.58m、短軸1.13m、深さ13cm程度の楕円形の皿形を呈する。北西寄りの底面からやや浮いた状態で、多数の白玉が出土した。



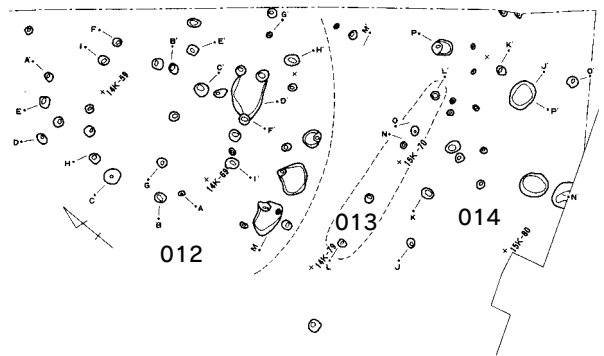
282. 土坑墓白玉出土状況（四街道市御山遺跡）

土坑墓から副葬品と考えられる滑石製の白玉が363個出土した。紐が通されたと思われる状態で出土したものが9列、227個あり、その南側で100個以上が集積された状態で出土した。白玉の計測値の平均は、外径8.54mm、孔径2.74mm、最大厚3.51mm、重量0.43gである。



283. 赤色顔料充填小形壺形土器（四街道市御山遺跡）

左：残存高4.2cm、底3.0cm。右：残存高7.3cm、最大径9.0cm。012ピット群（建物跡）に属する遺物と考えられる。内部に良質なパイプ状ベンガラが充填される。



284. ピット群（012・013・014 四街道市御山遺跡）

ピット群は隣接して3箇所検出された。012ピット群は、深さ50cm以上の柱穴状のピットが直径6mほどの円形にめぐることから、建物跡と想定される。ピット群範囲内からは、滑石製の白玉2点、赤色顔料が充填された小形壺形土器および埴塼形土器が含まれており、建物跡に廃棄された遺物と考えられている。



285. 土偶（四街道市御山遺跡）



286. 石製垂飾（滑石製 四街道市御山遺跡）左：長さ1.3cm、右：1.9cm。

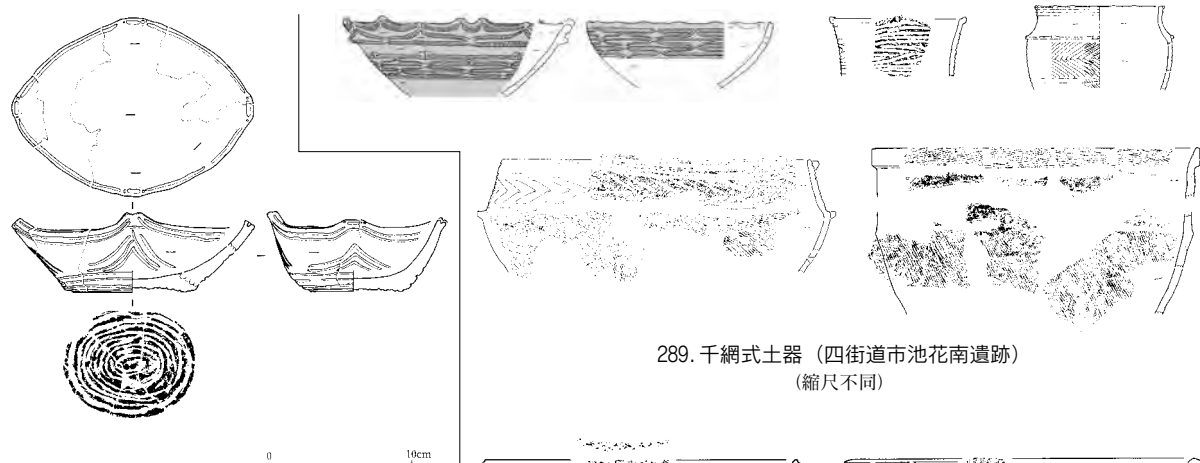


287. 有髯土偶（鯨面土偶 四街道市池花南遺跡）残存高6.4cm。顔面に鯨状の沈線が施される。

文時代から弥生時代へ至る動態を知る上で非常に興味深い地域である。

内黒田遺跡群は、大割、池花、池花南の3遺跡で構成される。大割遺跡からは、称名寺式期の住居跡と遺物包含層、加曽利B2式期の遺物包含層が検出されている。池花遺跡からは、加曽利B3式期、安行3a式期、荒海式期～弥生時代前期末・中期初頭、弥生時代中期のまとまった遺物包含層が形成されている。池花南遺跡からは、加曽利B2式期の埋甕が検出され、加曽利B2式期と曾谷式期～安行1式期、さらに千網・荒海式期～弥生時代前期末のまとまった遺物包含層が形成される。また、千網式土器の分布域からは土坑群が検出され、さらに遺物集中部から、有髷土偶（^{ゆうぜん ど ぐう} 黥面土偶）や石剣、垂飾、土製品、赤色顔料充填土器などの特殊遺物が出土した。

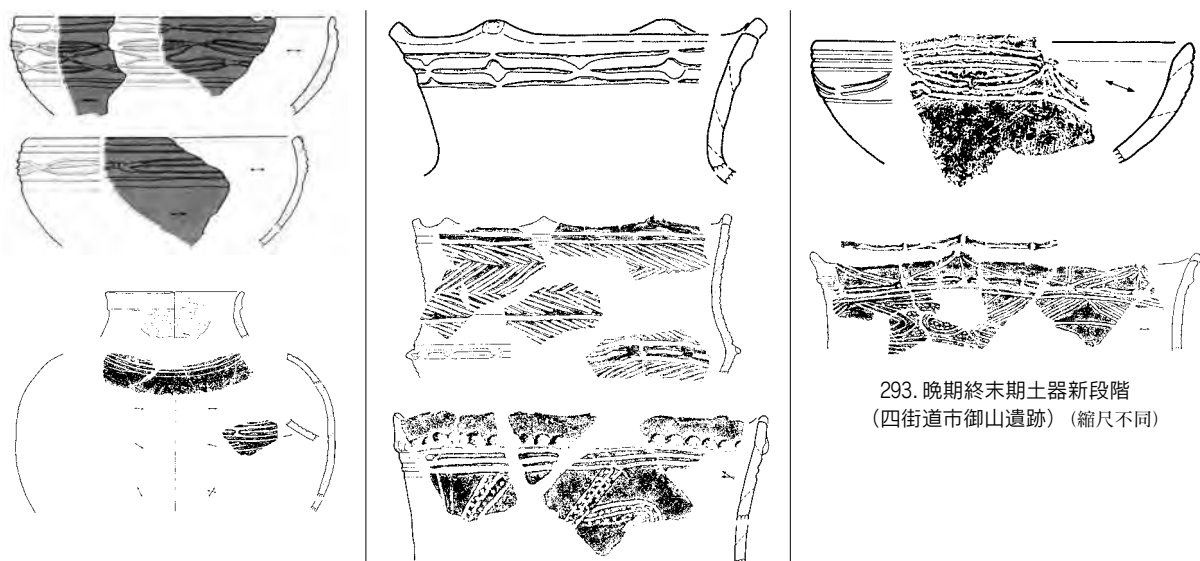
御山遺跡からは、加曽利B2式期と曾谷式期～安行2式期の遺物包含層と晩期終末期～弥生時代前期末・中期初頭にかけての遺構・遺物が検出された。晩期終末期に属する遺構として、^{うすだま} 臼玉が出土した土坑墓1基と竪穴建物跡などと考えられるピット群が3箇所検出された。印旛郡市内においては当該期の遺構検出例は極めて乏しいことから、貴重な検出例として注目される。また、晩期終末期において、石鏃・石錐を中心とした剥片石器の製作が行われていた。



288. 浅鉢(晩期後半大洞系 四街道市池花南遺跡)
長軸口径17.0cm、短軸口径12.6cm、器高5.6cm。東
北方面からの搬入品と考えられる。赤彩の痕跡が極
わずかに残る。底面には大洞A式後半に盛行する渦
巻状沈線が認められる。

289. 千網式土器(四街道市池花南遺跡)
(縮尺不同)

290. 荒海式土器(四街道市池花南遺跡)
(縮尺不同)



291. 晩期終末期土器古段階
(四街道市御山遺跡) (縮尺不同)

292. 晩期終末期土器中段階
(四街道市御山遺跡) (縮尺不同)

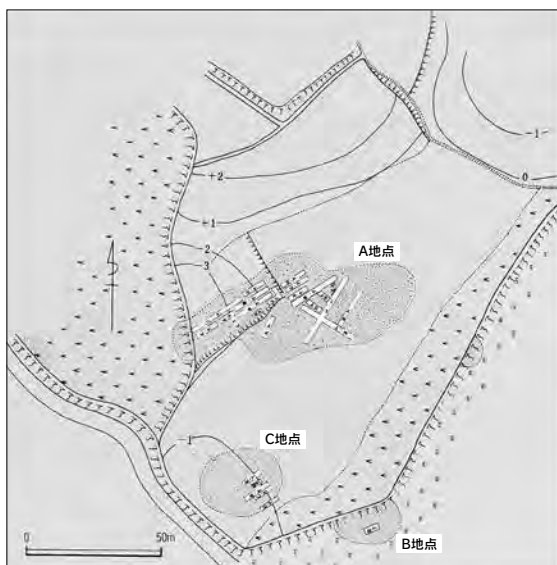
293. 晩期終末期土器新段階
(四街道市御山遺跡) (縮尺不同)

V-26 荒海貝塚・荒海川表遺跡（成田市）

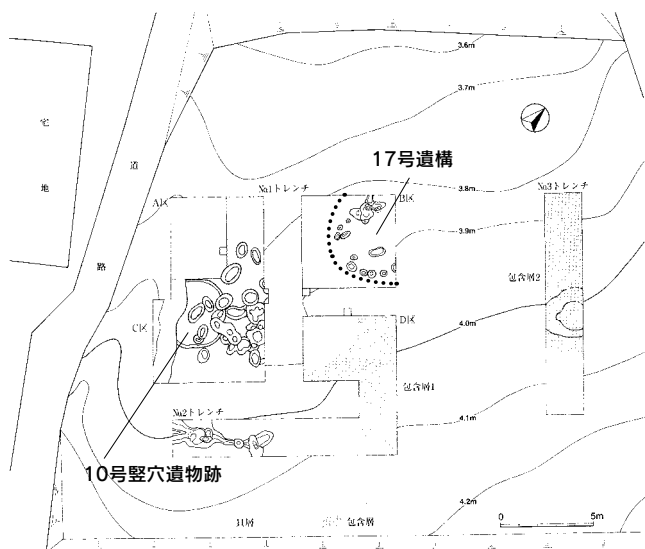
両遺跡が立地する成田市北部の根本名川周辺は、戦後の土地改変以前は「長沼」（以下「旧長沼」）という沼を形成しており、その周辺に縄文時代の遺跡が数多く分布している。

荒海貝塚は、旧長沼右岸の標高約32mの台地上に立地する。後期後半以降の集落として営まれ、弥生時代中期まで断続的に営まれた遺跡である。晩期終末期、荒海式土器の標識遺跡であり、周辺の遺跡とともに晩期から弥生時代にかけての変遷を考える上で極めて重要な遺跡である。台地の先端部に環状に配置される形で4箇所の貝塚が確認された。4箇所の貝塚からはそれぞれ異なる時期の遺物が出土している。A地点は台地平坦面から斜面にかけて形成された貝塚である。台地平坦面において、上層で汽水産のヤマトシジミを主体とする千網・荒海式期の貝層、下層で鹹水産のハマグリを主体とする後期初頭の貝層が重層的に認められた。その他、シカ・イノシシを主体とする獣骨が多量に出土した。その他、後・晩期の埋葬人骨が数体検出された。また、稲粃の痕跡が認められる土器や千網・荒海式期の土層からプラントオパールが検出されたことから、同時期に稲作が行われていた可能性が高まった。B地点は崖面に形成された貝塚で、後・晩期安行（姥山Ⅱ・Ⅲ）式土器が出土した。C地点は台地先端部に形成されたヤマトシジミを主体とする貝塚で、前浦式土器を中心とする晩期前～中葉の遺物が主体的に出土した。貝層下およびローム層上面でピット、焼土などの遺構が検出された。

荒海川表遺跡は、旧長沼右岸の標高約5mの低地に立地する。荒海式期にほぼ限定される遺跡で、当該期の遺構が検出された遺跡として注目される。ヤマトシジミ主体の荒海式期の貝塚が検出されており、その形成期を境に大きく3段階に時期区分される。貝層中および貝層下からは竪穴建物跡1軒や複数の土坑、ピットが検出された。10号竪穴建物跡は、骨角貝製品の製作場所で、さらに廃棄に際して祭祀が行われた可能性がある。17号遺構は、貝層を掘り込む柱穴が直径5mほどの円形に配置された柱穴列で建物跡と考えられている。貝層は汽水産のヤマトシジミが主体となるが、貝層上面でハマグリ、ムラサキガイ、オキアサリの鹹水産貝の集中地点が検出された。また、貝層中から縄文人の特徴を備えた男性1個体分の人骨が検出されている。



294. 荒海貝塚全体図



295. 荒海川表遺跡遺構配置図



296. 荒海貝塚・荒海川表遺跡周辺地形航空写真



297. 荒海貝塚A地点貝層
晩期末（千網式）のヤマトシジミの貝層
（1990年8月）。



298. 土偶（成田市荒海貝塚）
左：大洞C2式にともなう土偶 現存長6.7cm 赤彩。
右：有髯土偶 赤彩。



299. 鹿角製棒状骨角器（成田市荒海貝塚）
何らかの信仰的な行為に用いられたものと考えられている。
右端：長さ27.1cm。



300. 石製垂飾・骨角器（成田市荒海貝塚）
上段左から2点目：鹿角製筭（かんざし）、残存長5.5cm

石製垂飾 鹿角製筭 鹿角製櫛？ 鹿角製筭

イノシシ牙製 鹿角製尖頭器
有孔装身具



301. 10号竪穴出土遺物（成田市荒海川表遺跡）
注口土器 口径10.0cm、器高13.0cm 深鉢形土器
高坏形土器 ミニチュア土器 口径26.0cm、残存高24.0cm



302. 17号遺構出土遺物（成田市荒海川表遺跡）
鉢形土器 口径23.9cm、残存高14.6cm 深鉢形土器
口径23.4cm、残存高21.2cm

協力者・協力機関一覧

本書の作成にあたり、下記の個人及び機関より多大なる協力を賜りました。ここに記して厚く御礼を申し上げます。(五十音順、敬称略)

【個人】

阿部寿彦 阿部芳郎 猪股佳二 岩井明 内川隆志 内田儀久 及川美恵子 大塚加代子 折原繁
菊地敏記 喜多裕明 忽那敬三 工藤幸尚 黒沢哲郎 小針謹子 酒井弘志 篠原正 荘司晃
庄司美恵子 杉原豊 杉山祐一 鈴木圭一 高橋秀雄 戸谷敦司 常木晃 永塚俊司 中村大
能勢幸枝 山口典子 渡辺修一

【機関】

印西市教育委員会	印旛村教育委員会	印旛村歴史民俗資料館
國學院大學考古学資料館	国立歴史民俗博物館	栄町教育委員会
佐倉市教育委員会	酒々井町教育委員会	白井市教育委員会
千葉県教育委員会	千葉県教育振興財団	千葉県史料研究財団
千葉県立中央博物館	千葉県立房総のむら	成田市教育委員会
成田市市史編纂室	北総考古学研究会	明治大学博物館
本埜村教育委員会	四街道市教育委員会	早稲田大学会津八一記念博物館
早稲田大学考古学研究室		

『印旛の原始・古代－縄文時代編－』

◆編集・発行 財団法人印旛郡市文化財センター ◆印刷 株式会社エリート情報社
〒285-0025 千葉県佐倉市鎗木町198-3 〒286-0134 千葉県成田市東和田415-10
平成19年3月27日 印刷
平成19年3月30日 発行

表紙 背景：「印旛沼の日の出」（荘司晃氏撮影）

裏表紙 背景：「印旛沼残照」（荘司晃氏撮影）

財団法人印旛郡市文化財センターシンボルマーク

設立15周年を記念して制作したもので、成田市正福寺1号墳出土のムササビ形埴輪をモデルに、印旛沼上空を滑空するムササビの姿を描いた。

土製品：成田市南羽鳥中岫第1遺跡E地点出土「人頭形土製品」（国指定重要文化財）

ホームページアドレス <http://www.inba.or.jp>



2007

財団法人

印旛郡市文化財センター

